2013年度

青山学院大学
FD活動報告書

青山学院大学全学FD委員会

青山学院教育方針

青山学院の教育は
キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、
神の前に真実に生き
真理を謙虚に追求し
愛と奉仕の精神をもって
すべての人と社会とに対する責任を
進んで果たす人間の形成を目的とする。

青山学院　スクール・モットー

地の塩、世の光
The Salt of the Earth, The Light of the World
（聖書　マタイによる福音書　第5章13 〜 16節より）

青山学院大学の理念

青山学院大学は、「青山学院教育方針」に立脚した、
神と人とに仕え社会に貢献する
「地の塩、世の光」としての教育研究共同体である。
本学は、地球規模の視野にもとづく正しい認識をもって
自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材を育成する。
それは、人類への奉仕をめざす自由で幅広い学問研究を通してなされる。
本学すべての教員、職員、学生は、
相互の人格を尊重し、建学以来の伝統を重んじつつ、
おのおのの立場において、時代の要請に応えうる大学の創出に努める。

2013年度　青山学院大学　FD活動報告書　目次

1. はじめに …… 1
2. 本年度活動一覧 …… 3
3. 新任教職員研修会 …… 7
4. 授業改善のための学生アンケート …… 37
5. 学生FDスタッフの活動 …… 41
6. 教育改善・教育プログラム支援制度 …… 49
7. 学生意識調査 …… 63
8. FDフォーラム …… 67
9. FDEagoプロジェクト …… 69
10. その他 …… 93
11. 諸規則 …… 95
12. FD推進委員会及び全学FD委員会委員一覧…… 101

1. はじめに

全学FD委員会委員長
副学長　長谷川　信

本学のFD（Faculty Development）活動は、2003年度から全学的な授業評価アンケートがはじまり、2005年度からFDプロジェクトチームが活動を開始しました。そして、2008年10月からFD推進委員会、2009年4月から全学FD委員会が活動を開始しました。

本学のFD活動は、次のような点を重視して進められています。第1に、大学を構成する教員、職員、学生、社会の4者が協力して、組織的に教育の改善を行うこと、第2に、学生にとって、また教職員にとって「個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作り」を実現すること、そして第3に、FD、SD（Staff Development）相互のバランスをとりながら、教職員が協力して教育力の向上に努めることです。

FD活動は､「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み」といわれますが､その内容は多岐にわたり、現状ではより幅広い活動が展開されて来ています。本学のFD活動も、単なる授業改善にとどまらず、さまざまな教育支援活動が組織的に展開されはじめています。2013年4月には教育支援課が発足し、FD活動の推進に貢献しています。

本来、個々の教員がおこなっている教育改善の蓄積は、潜在的にたいへん大きなものがあるはずです。しかし、これらの豊富な教育資源は、目に見えないままであり、継承することが難しい現状があります。これらの豊富な資源を可視化するとともに、情報システムを利用しながら、組織的に体系化することがいま求められています。教員と職員が協働しながら、より豊かな、質の高い教育の実現をめざして行きたいと思います。

本学のFD活動として、これまで GPA制度の導入、シラバスの整備、授業アンケートの公開、新任教職員研修、教育改善・教育プログラム支援制度などが推進され、教育力の強化が図られてきました。2010年度に開始された学生意識調査は、学年進行に伴って卒業時調査を含めた経年比較が可能になりつつあります。その結果の一部は「学生の意識調査からみる青山学院大学の学生像」としてホームページ上に公表されるとともに、2013年7月18日のFDフォーラムにおいて分析結果と活用事例が報告されました。また、2012年度からは「FD Eagoプロジェクト」によるFD意識の普及、教育活動の表彰などがおこなわれ、また学生FDスタッフによる「しゃべり場」の企画がはじまりました。2014年度からはFD講演会等による教職員の意識向上にも取り組むなど、新たな視点からFD活動の領域を拡げつつあります。

今後のFD活動は、学生意識調査の個々の学生へのフィードバック、教育プログラムの開発支援、シラバスによる教育記録の蓄積、授業アンケートの改善などを通じて、本学の学士課程教育の質保証を実現していくことになります。これらのFD活動を推進するための教育支援を、学生支援と連携しつつ推進することが課題となります。

2. 本年度活動一覧

○ 2013 年度　月別活動一覧

	委員会開催	新任教職員研修会	授業改善のための学生アンケート	学生FDスタッフの活動	教育改善・教育プログラム支援制度	学生意識調査
4月	4月10日 ①FD推進委員会 ①全学FD委員会	4月2日 第1回開催	(2012年度後期実施結果公開)		(2012年度外部評価委員会全体講評の発表) (3月11日～) 公募開始	(3月29日)～4月4日 学生意識調査(1・2年生)・キャリアアプローチ(3年生)調査実施
5月	5月8日 ②FD推進委員会 5月29日 ③FD推進委員会 ②全学FD委員会			5月7日 2013年度年間活動計画報告	5月10日 公募締切 外部評価委員事前審査	5月8日～21日 1～3年生対象フォローアップ講座
6月	6月12日 ④FD推進委員会			6月28日 学生しゃべり場	6月3日 第1回外部評価委員全体会(審査・配分額決定) 6月12日 採択プログラム決定 各プログラム活動開始	6月7日 フォローアップ講座動画配信開始(～3月31日)
7月	7月10日 ⑤FD推進委員会 ③全学FD委員会		7月8日～27日 前期アンケート実施			7月16日～29日 結果報告会
8月				8月24日・25日 学生FDサミット2013夏参加 (立命館大学・衣笠キャンパス)		
9月	9月11日 ⑥FD推進委員会 ④全学FD委員会	9月17日 第2回開催	9月21日 前期結果公開			9月19日～28日 4年生調査(9月卒業生)
10月	10月9日 ⑦FD推進委員会 ⑤全学FD委員会			10月21日～25日 学生ミニしゃべり場		
11月	11月6日 ⑧FD推進委員会					
12月	12月4日 ⑨FD推進委員会 ⑥全学FD委員会			12月16日 教職員との交流会		12月9日 4年生調査(全4年生)開始(～3月25日)
1月	1月29日 ⑩FD推進委員会		1月6日～27日 後期アンケート実施	1月10日 学生しゃべり場		
2月					2月28日 プログラム活動期間終了 活動報告書・決算報告書提出	
3月	3月5日 ⑪FD推進委員会 ⑦全学FD委員会		(4月1日) 後期結果公開	3月8日・9日 学生FDサミット2014春参加 (東洋大学・白山キャンパス)	外部評価委員事前審査 3月14日 第2回外部評価委員全体会(最終審査・全体講評作成)	3月25日 4年生調査終了

	FDフォーラム	FDEagoプロジェクト		FDハンドブック	科目ナンバリング	全国私立大学FD連携フォーラム	関東圏FD連絡会
		Happyくらす作品コンテスト	FD Tip				
4月			4月のFD Tip発表	FD letter vol.1			
5月	5月15日 第1回開催	5月29日 募集開始(～9月28日)	5月のFD Tip発表	FD letter vol.2 FD letter vol.3		2012年度会計監査実施 実践的FDプログラム利用開始	
6月			6月のFD Tip発表	FD letter vol.4 FD letter vol.5		6月15日 総会出席 (立命館大学 ・衣笠キャンパス)	6月26日 連絡会出席 (東洋大学 ・白山キャンパス)
7月	7月18日 第2回開催		7月のFD Tip発表	FD letter vol.6 FD letter vol.7 FD letter vol.8			
8月							
9月		9月28日 募集締切	9月のFD Tip発表	FD letter vol.9			
10月		審査 10月31日 入選作発表	10月のFD Tip発表	FD letter vol.10 FD letter vol.11	科目ナンバリング体系案承認		10月8日 連絡会出席 (立教大学 ・池袋キャンパス)
11月		11月18日 授賞式 受賞者による座談会	11月のFD Tip発表	FD letter vol.12 FD letter vol.13			
12月			12月のFD Tip発表	FD letter vol.14		12月23日 ミーティング及び懇談会出席 (立命館大学 ・東京キャンパス)	
1月			1月のFD Tip発表				1月28日 連絡会出席 (本学)
2月							
3月				(2014年4月) FDハンドブック発行			

3. 新任教職員研修会

本学では、大学に新規採用された教員と学院全体で採用された事務職員を対象とした「新任教職員研修会」を年2回開催している。

第1回は本学就任直後の4月初旬に開催され、本学における教育研究活動の概要からFD活動の紹介、各種手続に関する説明を行い、本学での教育研究活動が円滑に開始できることを目的としている。

第2回は9月中旬～下旬に開催され、前期の授業経験を踏まえ、教育方法の改善に資する契機となる研修を行うべく、外部より講師をお招きし、より実践的な内容の研修会を実施している。2013年度については、前年度の研修会参加者を対象に行ったアンケート結果での高い評価により、引き続き杉原真晃先生に講師をお引き受けいただいた。

なお、2回目の研修会については、新任教職員以外に希望者も参加可能としている。

○ 2013年度　第1回大学新任教職員研修会

日　時　　4月2日（火）12：00～14：15
場　所　　第19会議室（総研ビル11F）
司　会　　学務及び学生担当副学長　全学FD委員会委員長　長谷川　信教授

プログラム

（1）　聖書朗読・祈祷

大学宗教部長　伊藤　悟教授

「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。」（フィリピの信徒への手紙1：9-10）

（2）　開会挨拶

学長　仙波　憲一教授

（3）　青山学院大学紹介映像「Sense～センスをミガク場所～」の視聴及び昼食

（4）　本学のキリスト教活動について

大学宗教部長　伊藤　悟教授

（5）　「本学の教育研究とFD活動の現状」について

学務及び学生担当副学長　全学FD委員会委員長　長谷川　信教授
同副委員長　加藤　篤史教授

（6）　本学の教育研究システムについて

情報メディアセンター所長　宮川　裕之教授

（7）　国際交流について

広報及び将来構想担当副学長　平澤　典男教授

（8）　大学の予算について

総務担当副学長　林　洋一教授

（9）　「本学の事務機構」について

大学事務局長　鈴木　寛也

（10）　「学事暦、授業、成績評価等」について

学務部　部長　上倉　功

（11）　「研究制度及び研究費等」について

・教員研究費等使用に関する説明会の開催について

研究推進部　部長　安部友紀枝

（12）　「施設設備利用」について

庶務部　担当部長　山田　達二

以上

(5)「本学の教育研究とFD活動の現状」について　資料（スライド）

1

2

学生総数	19,776
大学院	1,397
昼間部	18,040
第二部（夜間部）	339
男	10,901
女	8,875
相模原キャンパス	10,682
青山キャンパス	9,094
専任教員	574
専任事務職員	298

3

青山学院大学

学部学生数（2012年5月1日）

文学部	3,392
教育人間科学部	1,344
経済学部	2,403
法学部	2,240
経営学部	2,497
国際政治経済学部	1,420
総合文化政策学部	1,140
理工学部	2,641
社会情報学部	963
9学部計	18,040

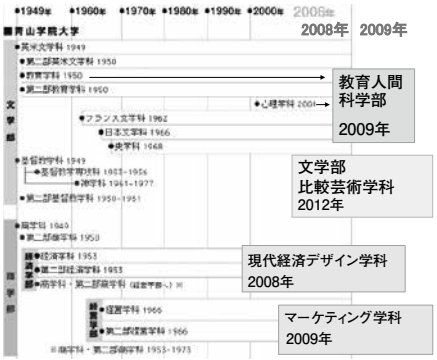
文学部第二部	265
経済学部第二部	41
経営学部第二部	33
第二部計	339

総計	18,379

4

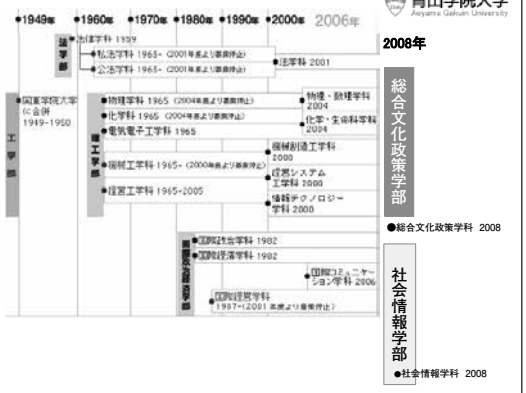
各学部の変遷図

青山学院大学



5

青山学院大学



6

大学院学生数（2012年5月）

青山学院大学

文学	113	理工学	370
教育人間科学	36	社会情報学	69
経済学	45	―	―
法学	158	国際マネジメント	230
経営学	39	法務	150
国際政治経済学	167	会計プロフェッション	169
総合文化政策学	45	合計	1,591

7

青山学院大学

Ⅱ　教育研究体制の課題

1）青山キャンパス17号館完成（2012年5月）
人文社会系学部の1・2年生が青山キャンパスへ
⇒4年一貫教育体制
学部教育プログラムの改革

青山キャンパスの再開発（図書館等）
相模原キャンパスの新学部構想

8

9

Ⅲ　本学の特色ある教育の試み

青山スタンダード科目＝全学共通教育システム

コンセプト:
青山学院大学を卒業すると、
〈一定水準の技能・能力〉
〈一定範囲の知識・教養〉
をそなえていると社会的な評価を受けることを到達目標とする
全学共通教育システム

運営組織:青山スタンダード教育機構
すべての教員が構成員

10

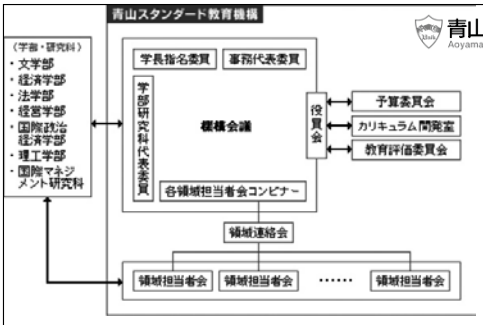
AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY

青山スタンダード科目の展開

1年次	2年次以降
フレッシャーズセミナー ・少人数クラス ・先生とのコミュニケーション ・ディスカッション	・自分の興味のある分野を発展させ ・より多面的な分析能力を身につける
コア科目 ・教養コア科目 ・技能コア科目 ・どんな視角で？ ・どうやって分析し ・表現するか	*テーマ別科目* ・キリスト教理解関連科目 ・人間理解関連科目 ・社会理解関連科目 ・自然理解関連科目 ・歴史理解関連科目 ・言葉の技能 ・身体の技能 ・情報の技能 ・キャリアの技能

11

青山学院大学 Aoyama Gakuin University



青山スタンダード教育機構は、全学共通教育課程である「青山スタンダード科目」を実施するための全学的な組織です。その業務内容は、青山スタンダード科目の編成、運用、科目開発、科目評価から青山学院大学における教養教育のあり方の検討および設計までを含む広範囲なものとなっています。

機構の構成員は青山学院大学に所属する全教員です。

12

Ⅲ　教育研究支援とプログラムの推進

1. 主要な教育研究施設、組織

1）学部、研究科附置研究施設、学会・機関誌

2）総合研究所　プロジェクト研究が進行中

3）社会連携機構
学外諸機関との連携協力により、教育研究活動を展開し、現代的な課題、ニーズに関わる諸事業を展開し、社会に貢献する。

■社学連携研究センター（SACRE）
■WTO研究センター
■ヒューマン・イノベーション研究センター（Aoyama HiRC）
■国際交流研究センター　国際交流基金との提携
■アジア国際センター

4）事務組織による支援　学術研究推進部など

13

2. 教育改革等支援プログラム

[2012年度]
大学間連携共同教育推進事業
①データに基づく課題解決型人材育成に資する統計教育質保証
産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業
②首都圏に立地する大学における産業界のニーズに対応した教育改善

[2010年度]
大学生の就業力育成支援事業
①青山スタンダード教育による就業力育成
産学連携による実践型人材育成事業
②コミュニティ形成を促進する人材育成担当者向けのハイブリッド型学習プログラム開発

[2009年度]
組織的な大学院教育改革推進プログラム
①グローバル・エキスパート養成プログラム
戦略的大学連携支援プログラム
②大学間連携によるマネジメント教育プログラムの質の共有化と相互評価システムの開発
「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム
③人材ニーズと学生意識との格差解消による適職発見支援

14

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

Ⅳ　教育力の向上

1. 基本方針

◇FDとは？「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み」
◇教育力の向上は大学の責務
◇青山学院大学は教育を大変重視
◇本学の特徴を生かした活動を
⇒教員、職員が一体となった教育改善へ

15

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

2. FD活動のスタート

◇2003年度後期から全学自己点検・評価委員会で、「授業評価アンケート」を実施。2004年度後期より「授業改善のための学生アンケート」としてスタート
◇2004年度末に、2007年度に大学基準協会へ認証評価申請することを決定
◇2005年度にFDプロジェクトチームを発足
◇2008年10月、大学HPにFD活動のページを新設して、これまでの活動を外部に公表

16

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

3. FDプロジェクトチームの実績

［2005年度～2007年度］

- 「授業アンケート」の運用
- シンポジウムの開催
- 授業公開の実施
- 「教員アンケート」報告書の作成
- プロジェクトチーム活動報告書の刊行

17

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

4. FD組織の発足

発足の経緯

- 大学設置基準改正　第25条の3によるFDの組織的活動の義務化
- 2008年10月 FD推進委員会発足
- 2009年3月 全学FD委員会設置
- 2009年3月 青山学院大学FD規則制定

18

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

本学のFD組織

全学ＦＤ委員会

ＦＤ推進委員会

内容：ＦＤ活動の啓蒙・企画・立案・実行
・授業改善、教育環境支援、啓発活動

構成員：副学長（委員長）1名
学長指名委員（教員より）5名　※副委員長1名を選出
学長指名委員（職員より）5名

※ここには学務部の全学教務委員担当職員を含む

全学教務委員会

内容：教学に関する全学的な調整
＜例＞学事暦、授業時間の設定、卒業延期制度

構成員：副学長（2名）、宗教部長、青スタ、学科主任（各学部より1名）
学務部長、学生支援ユニット課長

19

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

FD推進委員会の役割

- 学長のもとに、少人数で機動的な組織を設置する
- 若手教職員の構想力によって企画立案を進める
- FD活動の啓蒙
- 学部のFD活動を活性化する起動力に
  ⇒ 全学FD委員会の構成員

20

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

2009年度の主要な活動

- 授業アンケートの見直し
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の発足
- 次年度の新任教職員研修会プログラムの検討
- 各学部におけるFD活動の事例紹介
- 他大学との連携、交流

21

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

2010年度の主要な活動

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施
- 授業シラバスの学外公開開始
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- 「FD letter」の発刊
- 「実践的FDプログラム」上映会の開催
- 他大学との連携、交流

22

青山学院大学 Aoyama Gakuin University

2011年度の主要な活動

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- 授業改善アンケートのための教員アンケートの実施と分析
- 「FD letter」の発刊
- 学生FD活動「しゃべり場」の後援
- 他大学との連携、交流

23

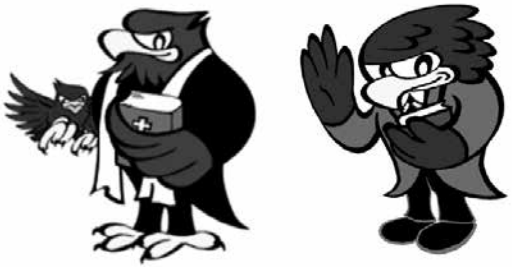
青山学院大学 Aoyama Gakuin University

2012年度の主要な活動

- 新任教職員研修会の開催
- 「教育改善・教育プログラム支援」制度の実施
- 全学的な学生意識調査の実施と集計結果の外部公開
- 授業アンケートの集計結果の学外公開
- FDキャラクター FDEago の投入
- FD Tip の紹介
- FD Board の設置
- 「心に残る授業」作品コンクールの実施
- 学生FD活動「しゃべり場」の後援
- 他大学との連携、交流

24

EAGO　　FD Eago



25

FD Tip を紹介する掲示板

26

FD Board

27

教育改善・教育プログラム支援制度による採択テーマ（2009年度）

事業計画テーマ
シラバスと講義録の統合情報に関する高度活用システムの構築
「科学・技術に関する意識データベース」の構築
各種資格（司書・社会教育主事）教育プログラムの評価モデルの開発
ティーチング&ラーニング・ポートフォリオに基づく総合的教育支援
大学生に対するリーガルリスク教育

28

教育改善・教育プログラム支援制度による採択テーマ（2010年度）

事業計画テーマ
IT専門実験室における演習環境の改善
経済学導入教育用マテリアルの開発
『校友追跡調査に基づく実業要請志向教育プログラム開発のためのシステム構築』
「科学・技術に関する意識データベース」の高度利用 ―学生プロファイリングに基づく科学リテラシ科目の構築を目指して―
ティーチング&ラーニング・ポートフォリオに基づく総合的教育支援

29

教育改善・教育プログラム支援制度による採択テーマ（2011年度）

事業計画テーマ
経済学導入教育用マテリアルの開発
会計専門職大学院教育における実践的教育の展開
多学部間における英語教育情報共有のためのオンライン・システム構築
翻訳タスクによる読解指導： 教員研修DVDの作成

30

教育改善・教育プログラム支援制度による採択テーマ（2012年度）

事業計画テーマ
フランス語学習のための理解力ストラテジーによる改善プログラム
学生意識調査結果を活用したキャリア支援システムの構築

31

5．今後のFD活動

教職員の能力向上・動機づけ	FD活動に関する情報提供・啓発活動 教育プログラム開発の支援制度の実施
学生からのフィードバックシステム	授業アンケート・学生意識調査の改善
教育制度の充実化	シラバスの改善（教育記録の蓄積） スタンダードなGPA制度の導入
教育の質保証に関する説明責任	ウェブサイト上での情報公開の実施

○ 2013年度第２回新任教職員研修会

日　時　　2013年9月17日（火）13：00 ～ 16：00
場　所　　第19会議室（青山キャンパス14号館11階）

司会進行　　全学FD委員会　委員　中野　昌宏教授
開会祈祷　　大学宗教部長　伊藤　悟教授
開会挨拶　　学務及び学生担当副学長　全学FD委員会委員長　長谷川　信教授

プログラム
講師：杉原　真晃　先生（山形大学基盤教育院　教育開発連携支援センター　准教授）

（1）「学生の主体的な学習をいかにして引き出すか」についての理論・実践事例
（2）ワークショップ：青学での実践的課題を語り合う

司会・中野委員：
ただ今より、2013年度第2回大学新任教職員研修会を開催させていただきます。私は、今日の司会進行を務めさせていただきます、全学FD委員の中野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、まず会の開催に先立ちまして、大学宗教部長・伊藤　悟先生から開会のご祈祷をいただきます。よろしくお願いします。

祈祷・伊藤大学宗教部長：
それでは、開会に先立ちまして祈祷を捧げますので、どうぞ目を閉じて、黙祷の姿勢をおとりください。わが学院の真の頭なる主イエス・キリストの祝福に暑い夏の時を経まして、間もなく後期の授業が始まるこの直前に新任教職員の研修の時を持つことが許され、感謝をいたします。

4月から青山学院のファミリーに加えられ、それぞれ新しい環境で、慣れない中で半年を過ごしてまいりました。こうした組織の中で初めての経験をする方々もいらっしゃいますし、また、ほかの教育機関や研究機関を経て、わが学院に来られた方々もいらっしゃることでありますが、共にこの学院の、また、青山学院大学の使命を担う一員とし

ての歩みを始めています。ここまでの半年の期間、あなたが支え、守り、導いてくださいましたことを心から感謝いたします。

これから後期が始まろうとしていますけれども、どうか一人一人、持ち場に慣れて、豊かに教育、また、研究、そしてそれぞれの部署の責任をまっとうしていくことができますように。それぞれ自らの研究分野や、また、関心を持ちながら歩みを進め、教職員が共に自己実現を図る場でもありますけれども、また同時に、この私学・青山学院が立たねばならぬところに立ち、また、それを支えていく使命もそれぞれ担っております。どうか謙虚に、また学生たちの前に真摯に、また誠実に、教育者として、職員としての職業に就いていくことができるよう、一人一人を整えてください。どうか建学の精神を重んじ、青山学院のメンバーとしての自覚を持って、これからの歩みも進めさせてください。

今日、今後予定されていますこのプログラムの始めから終わりまで、すべてあなたの御手のうちに置いてくださいますように。講師として大きな役割を担ってくださいます先生の上にもどうかあなたの祝福を与えてください。豊かなプログラム全体が終わりまで導かれていきますように。開会に当たり、これらの祈りを尊き主イエス・キリストの御名によって御前にお捧げいたします。アーメン。

司会：

ありがとうございました。続きまして、開会のあいさつとしまして、学務および学生担当副学長、全学FD委員会の委員長である長谷川　信先生からごあいさつをいただきます。

長谷川副学長：

皆さん、こんにちは。全学部FD委員会の委員長をしております長谷川と申します。よろしくお願いいたします。今日は第2回の大学新任教職員の研修会ということで、4月に第1回を行っておりますけれども、これは大学のことを知っていただくというのが主要な趣旨でございました。

本日は、学生の主体的な学習という、かなり大きなテーマを掲げまして、第2回の大学の新任教職員研修会を開かせていただきます。この研修会では、先生方はちょうど前期の授業を終えられて、成績の評価も作られた段階でございますので、本学での教育につきましては、すでに一定の認識をお持ちだということを前提に開かせていただくということかと思います。

学生の主体的学習というのは、現在の大学教育におきましては非常に大きなテーマになっておりますけれども、この研修会では、講演ということだけではなくて、グループワークという形でお招きしている杉原先生に、われわれも主体的にかかわれるような形での運営をしていただけるという形に設定をしてございます。その中で、この半年間の先生方のご体験等を生かし、すでにかなり大学教育に携われてきた方のほうが多いかと思いますので、その辺を含めて、いろいろ本学の教育にもアドバイスをいただければというふうに考えております。少し長い時間になりますけれども、よろしくお願いいたします。

司会：

それでは、ここで講師の先生のプロフィール等を紹介させていただきたいと思います。

山形大学基盤研究院、教育開発連携支援センターの准教授でいらっしゃる杉原真晃先生です。杉原先生は、神戸大学を卒業後、養護学校、特別支援学校や幼稚園教員として4年ほど勤務の後、大学院に入学され、高等教育、教育方法学、教育工学等を学ばれました。その後、山形大学に着任され、現在はファカルティディベロップメント業務に携われておられます。ということで、杉原先生にお渡ししたいと思います。よろしくお願いいたします。

杉原：

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました杉原と申します。よろしくお願いします。4時まででしょうか。ちょっと長くなりますが、有意義な時間となりますように、私もがんばりますので、どうか一緒に3時間を無事に過ごせるといいなと願っております。

今ご紹介にもありましたように、私は山形大学に勤めていますけれども、もともとは関西の出身で、神戸大学を出まして、大阪生まれの大阪育ちのこういう言葉遣いなので、ちょっと違和感のある方もいらっしゃるかもしれませんが、ご勘弁いただければと思います。

早速ですけれども、実は今日、先ほどお話しいただきましたように、グループワークを兼ねていろいろやっていきたいと思っておりまして、ちょっと座席を替えていきたいと思っています。できるだけ、教員の方だけというよりも、職員の方と教員の方と一緒に意見交換ができると、また今後の教育づくりあるいは学生支援づくりにもいいのかなと思っていますので、だいたい1グループ6人のグループを作りたいと思います。

では、早速、せっかくですので、ちょっと前のほうをご覧ください。アイスブレイクも兼ねて、自己紹介

をまずしていただきたいと思っています。その後に、前に書いてあることについて少しウォーミングアップがてらに意見交換をしていただければよいかと思います。今日は、学生の主体性をいかに引き出すかという話を皆さんと一緒に考えるのですが、前提として、「学生の主体性がない」「最近の学生は何をやっているのだ」「若者よ、目覚めろ」というところから始まると、非常にかわいそうです。

今日も私、ここに来る前に少し図書館の前で本を読んでいたら、その奥の広場でチアリーダーの人たちが舞台でヤーヤーとか言って、ワーッと観客が見に来ていて、すごく主体性を発揮して、彼女たちは一生懸命披露しているのです。なので、まず昨今の学生は駄目だとかいうところからではなくて、意外といけているのだというところも認めながら、でも課題はあって、その課題の改善に向けてみんなで一緒に力を合わせてがんばろうというふうにしていきたいと思っておりますので、素晴らしいと感じる学生像とその具体的エピソードを情報交換したいと思います。

まず自己紹介をしたいと思います。このエピソードは後ほど時間を取りますので、お名前、ご所属、自分の学生時代に打ち込んでいたものについて、1人1分ぐらいで、5分程度と書いていますが、おそらく6分間になると思います。これについて今から6分間、時間を取りますので、自己紹介、どなたからでも結構です。ひとまず、あの時計で25分になるまで自己紹介をしていただきたいと思います。それではどうぞ始めてください。

6分がたちました。まだ終わっていない方がいらっしゃれば、急いで自己紹介をしていただければと思います。私がちらっと聞こえてきたことだけで面白いなと思いました。学生時代は何もやっていなくて、ただバンドをしてスターになったらとか、素晴らしいです。チアリーダーをまさしくされていたとか、面白い発見がいっぱいありますね。チアリーダーを褒めておいてよかったです。

続きまして、先ほど申し上げましたエピソードについて、お一人1分ずつで、また6分間の時間を設けますので、各自言っていただければと思います。青学に来て半年、あるいは人によっては1年ぐらいかもしれませんが、実はこういうすごいことがあったとか、こういうところはすごく主体的で面白かったとか、そういうことはたぶんご経験されていると思いますので、それについての情報交換を6分間でしていただければと思います。それでは、またタイムマネジメントは皆さんでしていただければと思います。それではどうぞ始めてください。

まだ話し足りないこともたくさんあろうかと思いますが、意外とたくさんありますよね。お聞きしていて、ボランティアですごくがんばっている学生がいたとか、すごく素直で青学の学生は良いよとか、人への心遣いといいますか、気遣いもできているとか、いっぱい良い話を聞けて、もう今日はこれで終わりにしたほうがいいかもしれないですね。あまり詮索しないほうがいいのかもしれないと思いましたが、まだ時間も2時間半ぐらいありますから、先に進みます。

これを前提にしていただいて、次の情報交換をしていただきたいと思っています。こちらです。問題だと感じる部分もあろうかと思いますので、ここについて、また1人1分ずつ程度で6分間お話しいただきたいと思います。一方でこういうところもちょっと気になるとか、もうちょっとがんばってもらえるように私たちもがんばりたいとかいうことについて、お一人1分ずつぐらいでまたお話しいただけるとよいかと思っています。それではどうぞ始めてください。

時間になりました。途中で終わってしまったところもあろうかと思いますが、どうかご容赦ください。それでは、前をご覧ください。今日のスケジュールですけれども、このような形で進めたいと思います。0番のワークというのは、今、していただいたものです。今からだいたい30分から40分ぐらい、私のほうで話をさせていただきまして、その後、10分休憩を取ります。その後、もう1度ディスカッションの時間を15分くらい行いたいと思います。その後で、もう1度、私のほうから少し話をさせていただきまして、最後にディスカッションと発表で終わりということになりますので、そのように見通しを持っていただければと思います。

皆さまのお手元にスライドの資料があります。基本的にはこのまま、このとおりいきますので、必要な場合にぜひメモを取っていただけるとよいかと思います。今、いろいろな良い部分と課題ということでお話しいただいたと思いますが、その中に、本日のテーマである主体性というものにかかわるものがあったかなと思います。

主体的学習が求められる社会的事情と書かせていただきました。これは別に新しいことでも何でもなくて、昔からずっといわれていることですが、昨今、特にこ

の辺りはよくいわれるようになりました。大きく2つの背景があるというふうにまず認識していただけるとよいかと思います。

私はどんどん話を進めますので、この意味が分からないので詳しく教えてほしいとか、聞き逃したのでもう1度話してほしいとかがありましたら、遠慮なく止めてください。もう分かってくださっているかなと思って、いちいち全部説明しないで素通りすることもありますので、どうぞ遠慮なくご質問いただけるとよいかと思います。

これについて少しご説明させていただきます。1番のほうです。これはどういうことかというと、例えばこういう研究がありまして、ボーダーフリー大学ですが、ボーダーフリーというのは基本的には入試があまり機能していないと思ってください。あまり表現は良くないですけれども、偏差値もそんなに良くなくて、選抜をするための入試が機能していなくて、入ろうと思ったら入れるというような大学だと思ってくださるとよいと思います。

そういう大学の学生は、学習意識は高いけれども、授業に対する期待が低くて、授業外でもあまり勉強しない、あるいはサークルやクラブにもあまり熱心でないというようなデータとか、一体何に彼ら、彼女たちは熱心なのかというのはここでは延べられていませんが、少し心配になるところです。

あるいは、こういう逸脱行動といって、ルールを超えていってしまう、ルールを守らないということも指摘されています。擬似出席ですが、昨今は学生のIDカードでピッと、角っこにある出席読み取りカードシステムみたいなものがありまして、それで出席を管理するのですが、中抜けというのは、例えば、最初にピッとやってそのまま食堂へ行くわけです。授業の最後には出席カードみたいなもの、質問用紙みたいなものがあるので、そろそろあと5分で終わりそうだということで、また食堂からいそいそと教室へ戻っていって、カードだけ友達に取っておいてもらって、出して帰るというやつだと思ってください。

エスケープというのは、サボるということです。ながら出席、私語、先ほど私語の話がちらっと聞こえてきましたが、お話をどうしてもしてしまうとか、携帯電話やスマホをいじるとか、居眠り、飲食、ゲームなどなど、あるいは暴言、乱暴もあるところがあるそうです。

居眠りしているので、先生が「ちょっと起きなさい」とか言うと、「うるさいんだよ」「邪魔をするな」とか言って、逆ギレするという場合もあるようです。私の知っている大学の教員で、一番前に座っている学生が、ある日、冷麺を食べていたそうです。びっくりするでしょ。パンならいざ知らず、冷麺を食べるのです。冷麺を食べていたので、「あなた、冷麺、今は授業中だから食べないでね」と言ったら、その学生も、逆ギレまではいきませんけれども、「何でそんなことを言うのですか」「私、初めて言われました」「何なのですか」と言われてしまったという話をしていたことがありますけれども、知らなかったのだなという感じです。

私たちとしたら、常識というか、普通に考えたら分かるだろうとか、小学校、中学校、高校でも食べてきていなかったはずなのにどうして大学だったら食べ出すのだろうとか思いますけれども、アメリカの学校に行くと、普通に食べていますよね。食べている光景があって、それが良いかどうかは別ですが、飲食という行為は、認めるかどうかという議論よりも、それが当たり前だということが認められないというか、当たり前でなくなってきた時代として、日本も変容してきているのかなというふうに思ったりもします。

こういう学生像があるので、大学生らしい、あるいは卒業したときに「青山学院大学を卒業した学生さんですね。さすがですね」と思ってもらうような人間に何とか育てたいと思うのは私たちの普通の感覚だと思います。

続きまして、臨床場面で生きて働くうんぬんとありますが、これまで以上に主体性というのが求められる時代になってきたということであるわけです。昨年に出ました中教審答申を少し引きますと、こういうことが書いてあるわけです。ちょっと読んでください。もし字が小さい方は、お手元の資料ももっと字が小さくなっていますけれども、読んでいただければと思います。私は読み上げません。こういう時代の変化、社会状況の変化があるので、主体的に生涯、学び続け、社会にかかわっていくという人間にならないといけないということがいわれているわけです。

そこで、中教審は、どの学部、どの学科コースで、どんな大学に入ろうが、学士力と書かせていただきましたが、学士力という形で、卒業すれば一定の水準の能力を身につけてほしいということで、4つほど提示しているわけです。これらはすべて主体的に身につけていくということが前提になっているわけです。将来の予測が困難な時代とここに書いておりますが、本当に変動が激しくて、どうなるかが分からないので、ただただ指示を待っているだけとかの人間だと生きていけないということを意味しています。

そこで、ここにも抜粋させていただきましたが、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力が必要ですよということで、教育のあり方もそういうことを目標にして、アクティブラーニングとここに書いていますけれども、能動的に学んでいくというところを重視してくださいと言っているわけです。今日は特にアクティブラーニングの話をするわけではありませんけ

れども、これまで大学でいうと演習、実験、実習という実技というのは当たり前のようにアクティブにラーニングする場所というのがありましたが、これまで以上に充実させましょうということが延べられているわけです。

では、主体的な学習を支援する教育方法ということについてお話しさせていただきます。この3つほど、今からお話ししたいと思っています。1つ目に、主体的学習の支援にかかる検討事項ということで、今日、私のほうでお話しさせていただけるのは、時間的な都合もあって、ごく一部分です。3番目に赤い文字にしてありますが、主にこの部分についての話をしたいと思っております。本当はほかにいろいろ検討すべき事項というのがありまして、例えば1番目の、カリキュラムや制度や課外活動に関しては、こういうふうなところに関してもいっぱい議論もしないといけませんし、教職員の役割というのもまたいろいろなものがありますよねとか言いながら検討もしないといけませんが、今日はちょっと飛ばしたいと思います。3番目、今日はこれについての話をしますが、特にこの中でもこの辺りですかね。上から3つ目の辺りの話になろうかと思います。4つ目、人員や施設の話も検討の必要があるもので、今日は皆さんのディスカッションの中ではぜひやっていただければとも思いますが、私の中で特に重点を置いてお話しする時間はありませんので、割愛させていただきます。

その次に、主体性といった場合に、どのような主体性を期待するのかということも検討しないといけないわけです。先ほど、チアリーダーが下でやっていましたというのも主体性です。あるいは、指示を待って、言われたとおりにやるというのも一つの主体性であるわけです。どういう主体性を私たちは望んでいるのかということを大学、学部、学科、コース等で共有していけるといいと思います。今日がそういうきっかけになればいいと思っております。

例えば、受動的消費者、能動的生産者ということで、受動的というのは、指示待ちで言われたことはやるというふうに考えていただければいいと思います。消費者というのは何かというと、分かりやすくいえば、自分はお金を払って、学費を払って、授業料を払ってきているのだから、私の満足のいく授業をしてもらわないと困る、先生のやり方は気に食わない、帰ろうというような感じで、テレビのチャンネルを変えるがごとく、どんどんと嫌なものは認めないみたいな形で授業に参加していかない結果、成績が今ひとつ上がらないというようなことが起きます。

一方、能動的生産者というのは、自分もその授業を作っている一員ですというような感覚で、面白くないと思うのであれば何で面白くないのかを自分で考えてみるとか、面白くなるように先生と相談しに行くとか、そういうふうにかかわっていって、知識や空間の価値といったものを作っていくという人間だと思ってください。

2つ目の浅い学習、深い学習は次のスライドで少し例を挙げておきましたけれども、私たちはどういうところのレベルを求めるのか、どういう主体性を求めるのかということです。これは、浅いSurfaceが良くなくて、深いDeepが良い、こればかりをやればいいというわけではありません。そういう意味ではありません。階層があって、知識を記憶したり、確認したり、言い換えたりということも非常に重要ですが、ここで止まっていいのかとか、この先に何かあって、それを求める必要があるだろうとか、大学ですので、そういうことまで求めたいと思うのが常かと思っています。共同学習に関しても、こうやって表しておきましたので、また後ほどご覧いただければいいかと思います。

さて、主体的な学習を支援する際に、少し留意しておかなければいけない点が幾つかあります。それは、よくこういう話をすると、私はやっているけれども学生がやらないのですというふうになるのです。結局、幾ら僕たちが工夫をしても、学生の意識改革も必要で、学生にやってもらわないと困るということで、がんばってくれと言って良くなればそれでいいですけれども、そうならないので、どうしようかというときに、あきらめないで済むために私たちがやらないといけないことは、診断です。

私は教育方法学という専門で、方法ですから、こういうふうな教育の技術とか、こういう方法でやりますと学生が活発に議論しますというようなところの知識を一応持ってはいますけれども、皆さん、主体的な学びとか、そういうところでご苦労されていて、私も毎日苦労しています。決してうまくいっているわけではありません。

その中で、こういうやり方をすると学生というのは主体的に学びますとか、能動的に自分で図書館へ行って学ぶようになりますとか、そういうふうに捉えられがちです。「先生、どうやったらいいか、ノウハウを教えてください」とか言われますけれども、私は、引き出しといいますか、ない袖は振れませんので、その引き出しをアドバイスとして提示することはできます

けれども、だからといって、その方法がうまくいくとは限りません。

それはなぜかというと、診断していないからです。何でそこで学生が図書館へ行って、自分で空き時間に学習をしないのかの分析がなくて、単に「授業時間外で課題を図書館に行ってやりなさい」とやれば図書館へ行って学習するようになるかというと、そうではなくて、何でしないのかということを診断する必要があります。

医学の世界、お医者さんへ行くと、この間、僕は帯状疱疹というのが出ました。ストレスがたまるとこの辺に水疱瘡みたいなものが出て、体中が痛くなるのですが、そうすると、お医者さんが休みの日でした。でも、激痛だったので、仕方なく休日診療というところに行きました。結論からいうと、そのお医者さんは整形外科の方で、帯状疱疹のことの専門ではないのです。なので、先生が、「たぶん帯状疱疹だと思うけれども、私は整形外科医だから分からないので、薬は出せない」と言われたのです。

僕も大人ですから、苦しくて苦しくて仕方ないからお医者さんに行っているのに、薬は出せないと言われて、診断できないと言われたわけです。お医者さんとしては、それが正しいのです。診断ができていないから、治療をしてはいけないので、薬は出せません。酷いなと思いながら僕は帰っていきましたけれども、それぐらい医学の世界というのは診断というのを重視しているのです。

ところが、私たち教育者というのは、意外と診断しないで、こうやったらうまくいくかなと思ってやってしまうところがあります。そうすると、うまくいく場合はいいですけれども、うまくいかない、チャンチャンで終わればいいですけれども、うまくいかなくて、それでかえって苦しんでしまう学生も時々います。なので、こういうところの診断評価、形成評価とご説明しますが、そういうところをやっていく必要があろうかと思います。

その診断評価、形成評価、もう1つ総括評価といいますが、まず診断評価とは何かというと、例えば、授業が始まる前に、今、この学生にはどういう知識があるのか、一体どこまではできるのかということをまず調べます。テストをしてもいいでしょう。実技試験をしてもいいでしょう。あるいは、対話、話し合ってもいいかもしれません。いろいろな形で既存知識、技術を確認します。

そして、その後、ずっと授業をして、普通はここで最後に、半年あるいは1年たちましたので試験をしますということで、あなたは100点ですとか、50点ですということで、学習の達成度を評価します。これを総括評価といいます。私たちが、普通、試験あるいは成績評価という場合には、この総括評価を指します。

一方で、診断評価をした後で、形成評価というものをするパターンもあります。この形成評価というのは、同じように実技試験をしたり、ペーパーテストをしたり、対面で面談をしたり、いろいろなことをやりながら、授業期間途中に行います。何のためにやるかというと、学習状況の把握と授業計画の修正のためにやります。僕は伝えたけれども、伝えきれていないかもしれません。全然分かっていなかったのかもしれません。それがそのまま15回積み重なって初めて0点でしたといったら、もう時すでに遅しで、学生さんとしても残念ですし、私としても残念なわけです。

そうすると、途中で確認することで、「伝わっていなかったのか。そうしたら、次回の授業で追加の資料を配っておこうか」とか、最初に10分間、時間を設けて、この間の説明だけれども、みんなよく分かっていなかったのだな。もう1回説明するから、よく聞いておいて」という形で説明し直すとか、そういうことをするための評価です。これを何度か授業期間中にやりまして、最後に総括評価、成績評価に持っていくということです。これが形成評価の位置づけです。

この時に、よく私たちが大事にしているのは、形成評価に学生自身を参加させるということです。これまで小学校、中学校、高校と、子どもたち、児童生徒と呼びますが、児童生徒は評価される人でした。自分が勉強しました、学習しました。それがどこまで学習できたかどうかは、全部先生が評価してきたわけです。それを大学生、生涯学び続ける人になっていただくためには、自ら評価して改善する週間をつけてほしいわけです。

そうすると、形成評価というところに自己評価を入れていくわけです。自分でどこまでできるようになりましたか、次の課題は何だと思いますかといったような自己評価も加味しながら形成評価を行っていくと、自ら評価して改善する学生が育っていきます。これは中教審にもありましたが、生涯にわたって学び続けて主体的に考える力が養成されることにつながっていくということになります。

さて、2の3ですけれども、主体的な学習を支援する際の留意点としまして、3つほど挙げました。①②③で、これも私たちは頭に入れておいたほうがいいのかなと思っています。

1番目は、知識的要因です。要は、やり方をしらないだけで、先ほどの冷麺の例もそうです。知らなかったのです。教えてそうなるのであれば、教えてあげたほうがいいのです。次の段階は、知っているけれども、うまくできない段階です。そして、その次の段階で、知っていて、できるけれども、やらない、やろうとしない段階ということで、一体どれに該当するのかによ

って、フォローの仕方は変わるわけです。ここにも書きましたが、知らないのであれば教えてあげたらいいですし、うまくできないのであれば、それをうまくできるために繰り返し行う機会をたくさん作るということが必要になろうかと思います。

今日は、この中で特に3番目の情意的要因について迫りたいと思います。やろうとしないというところです。アンケートとARCSモデルというものから少しご説明したいと思います。なぜしようとしないのかということですが、これは熊本大学さんが2004年と2005年に学生に対してアンケートをとってまとめたものがあって、非常に面白いまとめ方をしているので、少し紹介しようと思います。

多い意見としては、こういうものがいっぱいありました。これを全部改善すればいいという意味ではありませんので、ご注意ください。読みやすく丁寧な字で板書してきたものをただきれいに写すというのが、彼らが小中高で学んできた学習方法ですが、これから先は、そういう学習の場面というのはそうそうないわけです。ですから、読みやすく丁寧な字で書けばいいということではありません。ただ、学生は、こういうことを一応は嫌だと思っていて、これによって意気消沈してしまうというところを知っていただくといいかと思います。

1つだけ赤にしましたが、これが最も多かった回答だったそうです。話し方のスピードが速すぎるので途中で聞くのを諦めてしまう、理解しようとしなくなるということです。これは、私たち関西人は基本的にしゃべるのが速いですけれども、それを抜いたとしても、知っている人がしゃべることと、知らない人がそれを聞くことというのは、絶対にスピードが違います。知っている人は知っていますから、ワーッとしゃべれますけれども、知らない人は、何をしゃべっているか分からないから、ゆっくりしゃべってほしいですよね。1つ分からないことがあっても何とか付いていけても、3つ分からない言葉が出てきたら、たぶんもう真っ白になると思います。そういうことも私たちは知っておいたほうがいいという気がします。

あとは、レジュメです。特に先ほど、口頭だけでなく板書をということがありましたが、私たちは、ただただ板書を写す学習から、こうやってしゃべっていることをメモしていくという学習スタイルを身につけたいと思うので、あえて口頭でしゃべったりするわけです。このスライドのレジュメもそうで、スライドとは限らないですが、レジュメに全部情報が載っていると、学生は聞かなくなるので、少し情報を薄めに記載しておいて、口頭で情報を埋め尽くして、それをメモさせるというようなこともあります。

全部しゃべっていることをメモするというのは大変です。逆にいうと、それは聞いたことを速記して、ワーッと書くことばかりに集中して、学生は結局、何を書いたのか覚えていないということにもなりがちですので、気を付ける必要があろうかと思います。あと、いろいろ書いていますけれども、また後ほどご覧いただいて、こういうことで学生というのは意気消沈するということです。

逆にCは、好評な授業への意見ということで、この授業は良かった、モチベーションがグーッと上がってやる気があったという授業の要素がかかれています。資料が毎回詳しいとか、難しかったけれども分かりやすい説明で理解できたとか、質問に行った時も非常に熱心に教えてもらったなどがあります。レポートが数回あって授業内容を振り返れるとか、これは形成評価の要素もあるのかなと思っています。体系的に授業を進められたので授業を理解しやすかったなど、また読んでいただくとよいのかなと思います。

続きまして、ARCSモデルというものを紹介したいと思います。ARCSというは、Attention、Relevance、Confidence、Satisfactionの頭文字を取ったものです。

Attentionというのは何かというと、こういうことです。これは別に全部を詳しく理解する必要はありません。何となくで結構です。要は､注意です。学生の意識、注意どう向けさせるか、逆をいうと、どういうときに注意が削がれるかということの観点です。

例えば、ずっと同じようなトーンでしゃべっていると、人間というのは、そのうち私の声というのはBGMみたいになってくるのです。なので、時々、注意を促すために、沈黙を作るとか、ちょっと映像を見せましょうとかいうことで注意をそらすとか、視覚と聴覚とを順番に置いていくとか、こういうときに板書というのは便利です。板書をするときは文字を書きますので、けっこう間が空きます。そうすると、学生はハッと目を覚ましたりします。「今、何か変わったぞ」みたいな感じになります。

あと、探究心の関係ですから、事実を知っている人が、ただただバーッと、覚えなさいと伝えるのではなくて、なぜそうなるのでしょうというような問題提起のような形で示していくというようなことです。変化性は、先ほどの知的注意のところの説明です。

Relevanceですけれども、関連性です。これは理論上の説明なので分かりにくいかもしれません。要は、学んでいる、私が伝達しようとしている授業内容にどういう意味があるのかということを学生が理解できるようにするということです。目的もそうです。興味、動機との一致というのもそうです。親しみやすさ、分かりやすさというのはここに関係してくると思います。ここの親しみやすさの2行目に書いていますが、身近な場面から具体的に実例をあげるというようなことで

す。どうしても大学教育のレベルになると、抽象的な概念、抽象的な記号の操作の割合が非常に多くなりますので、その辺りを具体的に私たちが分かるというのは、自分がこれまで持っていた知識、経験と何か関連付けて、「そうそう、そうだ、そうだ」と分かるという、この実感が分かるのだと思います。

特にグルメレポーターとか、ないですか。グルメレポーターが何を言っているのかよく分からないみたいなことがないですか。僕はあまり納豆を食べたことがないので、この納豆の雰囲気がとてもおいしいですと言われても、納豆を食べたことがないので、分からないのです。でも、それを違う言葉で言い換えていただくと、なるほどと思うこともありますけれども、そういう意味です。何でもかんでも身近だからいいということではなくて、学生たちのこれまでの知識とか経験と結びつける支援をするということです。

続きまして、Confidenceは自信です。私が勤めている山形大学は地方の国立大学ですが、例に漏れず、不本意入学といいまして、本当は東北大学に行きたかったとか、あるいは東京に行って早稲田やら慶應やらMARCHやらに行きたかったけれども家の事情で行けなかったという学生が少なくないです。したがって、何でこんなに小さい山形大学なんかに来たのだろうとなります。山形大学は、国立大学の中で、全国で2番目に小さいです。本当に小さいですし、盆地ですから、夏はウワッと暑くて、冬はジトッと冷たい空気になりますし、何となく沈んでいくのですが、彼らは小中高と成功した経験がそんなにありません。

学習に関して成功している人たちは、おそらく東北大学に行ったと思います。あるいは、東京へ行ったかもしれませんが、今ひとつ成功しきれてこなかったので、山形大学を選んでいる人の割合は少なく無いです。学部によりますよ。学部によって、教育学部系は、地元で就職したいので、すごくできている人が来ますけれども、医学部やら工学部やら、全国レベルの勝負のところの学部というのは、基本的には勝ち組ではありません。そういう意味で、自信がありません。最初からやる気はないです。つまらないし、やる気ないし、やってもあまり意味がなさそうだしというような形で、最初から降りています。降りるという感じになります。

そういうことで、学習の中に成功の経験があるとか、どこまでがんばればいいかが分かりやすく明示されていて、それが自分にもできそうだというレベルとか、そういうもの自体が自分のコントロール下に多少あるので調整できるというふうな感覚が必要だというのが、このConfidenceの概念です。

最後に、満足感は、今のConfidenceと似たようなものですが、要は成功体験で、「よっしゃ〜」とか、「面白いね」とか、「やったぞ」という満足感です。心理学をされている方はもうご承知おきのことだと思いますが、内発的な動機付けもあれば、外発的な動機付けもあります。公平感も必要だということです。

このARCSモデルから、何でやる気が起きないのかということを考えた場合に、例えばAttentionでいうと、図解で示されないので理解しにくいとか、ただただしゃべっているだけとか、論理構造が分からないので理解しにくいかもしれません。あるいは、アイコンタクトがないので自分のことと思わないということです。先ほど、受動的消費者のところで、テレビみたいに授業を受けるという話をちらっと申し上げましたが、基本的に、講義をするとだいたい後ろのほうにそういう方々が座りますね。そうすると、自分は関わっていないと思っていますので、寝るし、スマホはいじるし、自分はこの空間にいるけれども、いないと本人は思っているわけです。それは、アイコンタクトを取らないし、私はこうやってずっといて、「はい、君」とかやれば、その学生は初めて、やばいぞとなりますけれども、たいてい僕たちはここまで歩み寄らないですよね。なぜ歩み寄らないかというと、怖いからです。行って下を向かれたときは怖いですよね。「うわあ」と思って萎えるので、私たちも安全牌としてここでしゃべってしまうのです。テレビの前の放送大学と同じようなことをやってしまうのです。

あるいは、ほかに気になることがあるのかもしれません。近くで幾ら喚起しても、ほかに気になることがあって、例えば、きのう友達とけんかをしてしまったとか、今日は大学に来ていない、どうしているかとか、今、卒業の研究で、グループで調査をやっているけれども、みんな全然やる気を出してくれないとか、私ばかりが先生から注意されてすごくつらいとか、いろいろほかに気になることがあるのかもしれません。

2番目に、探究心の喚起でいうと、ただ知識が並べられるだけで、思考する機会がなくて、受け身にならざるを得ないのかもしれない。しょせん、先生は知っているから、待っていたら答えは与えられるからと思って、待っているかもしれません。よく授業中に当てて、「1+1は幾らですか」とか言って、「はい、何とか君」と言うと、小学校のころは、「はい、はい、はい」とか言って、「はい、杉原君」と言ったら、「1+1=2です」と言うと、「よくできました。おめでとう」と言って、やっていましたけれども、そのうち挙げなくなるのです。

自分としては、小学校5年の時、意識して挙げなくなりました。それは、当時もばかでしたし、調子に乗っていましたので、挙げるやつはあほだと思っていたのです。答えは先生が知っているのに、そんなので当てられて、正解と言われて、ばかじゃないのと思っていた自分が今は悲しいですけれども、そうでなくても、

一番つらいのは、外れたときです。当てられて、あるいは手を挙げて、間違った答えを言ったときの、あの空気は耐えられないです。なので、だんだん挙げなくなってくるのです。先生は仕方なく、「その後ろ、その後ろ」とか言って、僕が高校2年の時、英語の時間に全員が立ち上がったことがありました。全員立って、誰も答えなくて、先生は仕方なくて、何と言うかと思ったら、「もういい。座りなさい」と言って、また授業が淡々と始まりましたけれども、あの外れる怖さがあるので、どうも体として、どうしても待つように刷り込まれてきた部分があろうと思います。

あるいは、自分で手を挙げて答えることが周りから浮くとか、ほかの友達は手を挙げないのに自分は手を挙げるとか、その浮くことが非常に怖いということもあろうかと思います。

変化性です。単調で、退屈で、眠くなっているかもしれません。

関連性で考えますと、例えば、目的志向性でいうと、授業内容や活動が何に役立つのかが分からないとか、自分の専門にどう関係するのかが分からないとか、特に一般教育、教養科目というのはその気があるかもしれません。あるいは、自分の人生、キャリア形成というのがそうです。自分の人生にとって本当に必要なのか、あるいは自分の生活に関して本当に必要なのかと思います。興味、動機もそうです。教員が描く学生の実態とかに、学生はこういうのを学びたいのだろうと思って、一生懸命しゃべりますけれども、学生のほうは全然そんなことに興味がない場合もあるかもしれません。そもそも興味がないとか、あるいは先生自身に反感を持っている場合もあろうかと思います。親しみやすさもそうです。具体的な話や身近な話がないので分からないとか、Confidence、自信に関しても、どこまでやったらいいかが分からないから不安になります。人間は不安になるとどうするかというと、何か身近なものにしがみつくのです。そうすると、次に何をやるか、活動を言ってもらえるように待つわけです。自分でのびのびと学習に行かないものなのです。

2つ目です。見通しを示されても忘れてしまいます。私たちは1週間に1回、授業をして、授業準備もやりますけれども、学生はその間にほかの授業もあるし、サークルも、私たちにもありますけれども、学生にもそれぞれ違う生活世界があって、忘れてしまうということも考えられます。成功の機会もそうです。難しいと諦めているとか、恥ずかしいと思っているとか、あるいは授業の中で、あるいは大学生活の中で成功体験を味わう機会がないのかもしれません。

これでいうと、バイトというのは彼らにとって非常に魅力的です。それは、ここが本当に分かりやすく、すぐフィードバックされるからです。アルバイトというと、やってくれてありがとうとか、うまくできたというのがすぐ分かります。なので、そっちへズズズッと引きずられていく場合がけっこうあります。私たちはバイトに負けていられません。

個人的なコントロールでいうと、教員の指示に従うだけかもしれません。あるいは、学生の要求に私たちが応えていけていないのかもしれません。満足感は、暗記ばかりでつまらないのかもしれないですし、理解できていない学生を対象にしているので、理解できている学生にとってはつまらないのかもしれません。

批判ばかりで、おまえはまだできていないということばかり私たちはついつい言ってしまうのです。研究というのは、先行研究をレビューして、それをある程度は批判的に捉えて、それを超えていくというのを生業にしていますから、良かったね、この研究は素晴らしいよね、よしよしというだけで終わったら食っていけないので、批判的に物を見る習慣がついているのです。そうすると、学生の姿を見ても、君は予習復習をよくがんばったねというだけでは終わらないのです。どこかに、もうちょっとこうやったらもっと良くなるのにとか、もっとここが駄目だけどということが先にいってしまうのです。そうすると、下手をすると、批判ばかりで、学生としても満足感が得られないかもしれません。

浮いてしまうというのは、先ほど申し上げました。満足できる活動が近くにあるのかもしれません。公平感に関しても、こういう形で、どこかで私たちがやってしまっているかもしれません。

さて、ここでディスカッションを行いたいと思います。テーマは、学生の主体性、能動的な主体性と今回は限定したと思います。能動的なほうです。受動的な消費者のほうではなくて、能動的な主体性、そして学習意欲に関して、どのような問題状況が見られるか、そしてそれがなぜなのかといったことを、今まで私がお話しした内容や、あるいは皆さんのこれまでの経験から診断をしていただけるとよいかと思います。皆さんのお手元にはこう書いていますが、6人あるいは5人で15分間、議論をしていただきたいと思います。これは後々、グループディスカッションの2のほうでも使いますので、どなたかグループの議論を記録いただく

とよいかと思います。ディスカッションに関して、何かご質問はありますか。

質問：

学生の主体性とかとありますけれども、個人の単位ですか。集団ですか。つまり、30人ぐらいのクラスでやるときと、多いクラスは600人です。そのときは全く話が違ってくるので、今のARCSといったものは、400人、500人のクラスだととても対応できないと思います。かたや20 ～ 30人のクラスだったらできるかもしれないといったときに、学生といったものがどのくらいの規模なのかということと、もし個人、フェイス・トゥ・フェイスではなくて、集団だったら、その中にどのくらいのやる気のある、なしの分散を仮定するかによって、話をどう考えていいか分からないのです。

杉原先生：

本当ですね。お聞きして私が思うのは、先生の一番扱いたい、大人数のほうで私は今一番困っているとか、あるいは、こっちを皆さんと議論したいと思うほうをお選びいただければいいと思います。大講義でも、分散の話は後ほどしますけれども、なぜ主体的でないのかという分析の枠組みとしては、先ほどのアンケートとかARCSモデルでも可能な部分もあろうかと思いますので、どちらをしたいかということでご選択いただければと思います。

後者の分散に関しても、実際に学生調査等も大学で行われておるかと思いますが、おそらく今日は、あるエピソード、具体的な自分自身のエピソードを基にお話しされると思いますので、自分で、ここまではやってほしいとか、ここの人たちをターゲットにしたいというところの人たちについてお話しいただければいいかと思いますけれども、いかがですか。

質問：

ということは、クラス全体ではなくて、クラスの、例えばやる気がない人の場合の話とか、逆に、クラスですごく主体的な学生に対しての処方というふうに限定的に話を考えていっていいですか。クラス全体のマネジメントというのは難しいと思うのです。クラスを運営するときに、全部をうまくやるという方法は難しいと思うので、その中に、ポイント、ポイントでターゲットとなる学生層を持っていかないと、すごく主体的な学生と、さっき言った中抜けですか。そういった学生の両方というのは、少なくとも教員が一人でするのは難しいと思うので、そうすると、ディスカッション自体がすごく曖昧になってしまうのではないかと思います。

杉原先生：

そうですね。私もそのとおりだと思いますので、先生が難しいということでご判断されて、あるターゲット、特定の階層の分散の、この位置の学生さんの主体性ということで、ポイントを絞ってお話しいただくことで、このグループの合意ができれば、私はそれでいいと思いますし、ある方は、もうちょっと全体のマネジメント、ここにターゲットを当ててはいるけれども、こっちもほったらかしてはいけないとかいうマネジメントの話もちょっとしたいですというようであれば、そこにも少し時間を費やしていただいてもかまわないです。

あくまでも今日は、言っても3時間ぐらいしかないので、たぶん全部しゃべりきることは最初から不可能で、私の望みとしては、今日のここでしゃべりきれなかったこと、例えば、あるターゲットに絞った議論だけでいっても、絶対にしゃべりきらないはずです。これだけでも、先ほどお示ししましたように、検討すべき内容というのは実はいっぱいあって、学習理論だけでは到底できるようなことでもないので、しゃべりきれなかったことを今度また集まってしゃべろうとか、またFD委員の皆さん、こういう会を設けてもらえませんかとか、あるいは、廊下で会ったときに、「この間の話さあ」とかいう形で続けるきっかけになればいいと思っているので、話し足りないこと自体は、こんなことを言うと言い逃れかもしれませんが、ぜひマイナスと捉えずに、話し残ったことは一体何だろう、今後それを継続的に話したいという方向に解釈いただくと、うまくこの時間が過ごせるかと思います。

杉原先生：

さて、50分になりました。まだちょっと話し足りないところもあろうかと思いますが、いったん終えていただけるといいかと思います。後ほど、今お話しいただいたものを基に、どうすればいいのかということの意見交換をしていただきたいと思います。その前に、そのヒントになるかどうかは分かりませんが、私の実践事例についてご紹介したいと思います。

レジュメでいいますと10ページ目からになります。講義と演習と2つ、私は持っていますけれども、今日は主に、講義をメインにした授業についての事例を紹介したいと思います。それを5の2のほうでお話しした

いと思います。5の1のほうで、まずシラバスの授業計画の話をさせていただきたいと思います。

シラバスの構造、いろいろな大学によって項目も違うかと思いますが、だいたいこのぐらいの項目になってくるかと思っています。学習意欲ということをこれから考えていくわけですが、学習ということを軸にシラバスというのを作っていくというふうに今、全体的な方向としてはなっています。何を教えるのか、何を伝えるのかだけではなくて、学生が何を学ぶのかとか、何ができるようになるのかということを表現としては考えて書いていくということになります。読者は学生ですから、学生が読んで分かるということが重要になってきます。

例えば、私が学生だとしたときに、僕は一体この授業で何を学ぶのかなとか、どんな知識、技能や能力が身につくのかなとか、あるいはどういう活動をしないといけないのかなとか、あるいはどういうものが評価の対象になるのかなというのを学習者は知りたいわけです。その成績評価の対象となる活動はいつごろ行われるのかなとか、あるいはそれに対してどういう準備をすればいいのかとか、あるいは教科書は一体どのくらい買わないといけないのかなというようなこともけっこう学生としては関心事です。

その中でも、私は自分の授業で調査したことがあるのですが、学生が重視する項目というのは主に成績評価にかかる内容と水準、そして学習内容と学習形態です。学生というのは､講義がけっこう好きです。意外と､演習とかグループワークとかいうのはあまりしたくなくて、講義が好きという学生が多いです。なぜならば､楽だからです。いちいちワークしてというのはすごく面倒くさいので、講義がいいのです。でも、講義といっても、ずっと先生が調子に乗って話をしているだけだと、それはプイッと向いてくれなくなります。その辺はどうしたいいのかと思ってしまいますけれども、なかなか難しいバランスが必要なようです。

おそらく先生方は、シラバスを書かれて、授業も半年されたと思いますから、釈迦に説法かもしれませんが、またこういうところを意識して、次年度も考えていただければよいかと思います。

続いて、授業事例の紹介です。今日は少し専門的な資格に近いような、これは教員免許状に関係する科目ですが、そういったものを取り上げたいと思います。これは私が非常勤で行っている短大での授業です。こういう授業です。60人のクラスを2クラス、今は持っています。目標はこういうふうな形で、保育課程といいます。いわゆる授業でいいますと、カリキュラムのことだと思っていただけるとよいかと思います。それの意義や内容がどういう構造を持っているかということが分かって、自分で立案できる、作成できるということが目標です。内容としては、1回目は概要、2回目の第2週目、3週目はこれ、4週目はこれという形で15週やっていきます。

学習活動に関しては、講義を90分間ずっとしゃべっているだけでは学生は受け身になります。先ほどのARCSモデルでいうと、注意とか満足が欠如しますので、少しテキストの内容を活用するワークを導入しようと思って、ワークを導入しています。しかし、ワークに割く時間が20分ぐらいありますから、テキスト内容を触れられないわけです。そうすると、駄目ですから、教えないといけません。学生に学習してもらわないといけない知識内容というのがありますので、そこは読んできてくださいと託すしかありません。

そういう形で、授業時間外で読書して、知識を読んできて獲得してきてくださいと言って、そして確認テストをしますということで、冒頭の5分ぐらいでテストをしますので、ここで獲得できているかどうかを確かめて、学生もテストがあると、テストがある、がんばって覚えなければということで、読み始めるということもあって、確認テストをします。その後で、読んできただろうけれども分からないところもあったよねということで、少し解説をしたり、質問を受け付けて答えたりします。これがここです。そして、最後にワークをするという授業構造にしています。

とはいえ、うまくいかないわけです。それは、例えばこういう形で保育課程のテキストがあるのですが、それを覚えることを目標としてしまうのです。冒頭に行うテストをやりますと申し上げましたが、そのこともあって、学生はどうしても暗記することが目標だと思ってしまって、それでは保育実践には活用できません。先ほどARCSモデルで関連性の話をしましたけれども、自分が保育士として保育園やら幼稚園で活用するという関連性が見えると、ウーッとやる気が出ますけれども、しょせん授業の中で覚えて良い点数を取ればいいのだと思うと、学生のモチベーションというのはガーッと下がってきますので、モチベーションが下がるのも良くないし、絶対に実際に現場に出て困るのです。

学生は教育実習に行くと「指導案」を書くのですが、指導案を書くことで疲弊していきます。書いて、担当の先生に見せたら、駄目と突き返されて、それを何度も何度もさせられて、実際に授業の実践になるともうヘロヘロになっていて、かつ授業案どおりうまくできなくて、授業案で立てた計画と実践とが全然結びついていなくて、大変な思いをするのです。ですから、教育計画というものを保育実践に活用できるようにさせてあげたいと思って、このままではいけないと感じているわけです。

何でこうなるのかという理由を学生といろいろ話し

ていると見えてきたのが、この辺りの理由です。「先生、私、こういう考えてやるワークが苦手です」と言うのです。「なぜなの」と言うと、「やってこなかったのです。慣れていないので、先生の授業はすごくプレッシャーです」とか言います。終わった時には、自分で言うのも何ですが、難しかったけれどもやってよかったですとは言ってくださいますけれども、基本的には覚える学習を、点数を取るために何とか暗記して、すぐに忘れるという学習をやってきたので、そのほうが慣れているのです。あるいは、これも慣れていません。考えることとか、あるいは保育実践ということと、目の前で学んでいる保育課程の構造を関連付けるというやり方に慣れていません。そして、意欲を持てないということが何となく分かってきました。では、どうしてやったらいいかということを後ほどご説明したいと思います。

問題点はほかにもありまして、ここに2つ目の事例を挙げましたが、単一の価値観で満足するのです。例えば、けんかをしたら駄目だとか、みんな仲良く、おもちゃは順番に使いましょうとか、そういう価値観があります。あるいは、保育士としても自分で考えて保育を磨いていって、そういうふうに自立的に考えて保育をするというように、教育というのには必ず価値を伴いますので、そういうものを伝えているということは私たちの責任でもあるのですが、こういうところで学生たちは満足するのです。

これも単一の価値観だけでは到底、現場では対応できません。ある時、学務課に出席簿を取りに行ったら、卒業したはずの学生がボロッと泣きながら学務課の事務職員さんとしゃべっていました。久しぶりとか言って、でも、ブワーッとしゃべっていますし、僕も授業があるので、そのまま行きました。授業が終わって帰ってきたら、まだいるのです。僕ももう授業が終わったので、その学生さんもしゃべりかけてきて、何やかんや話を聞いてみると、保育士さんになって保育園で勤めていたけれども、うまくいかなくて、園長先生とか主任の先生にもいっぱい指導を受けて、あれも駄目、これも駄目と言われてボロボロで、もう保育士としてやっていく気がしないし、私は一体何のために保育士のためになったのかが分からないというようなことで、どうしていいかが分からなくてボロボロ泣いていて、かわいそうだと思いました。

よく聞くと、こういうことです。その学生さんの抱いている良い保育とか良い子供像と、その幼稚園の方針が違うのです。どっちが正しいということではなくて、ミスマッチでこの学生さんは苦しんでいて、自己崩壊しかけているわけです。そうすると、かわいそうだというか、自分たちはもっとできることがあったと思うわけです。

どうしてこういう単一の価値観で満足するのかと考えたときに、別に困らないのです。私たちも、良い保育とか、例えば、けんかしたら駄目ですと学生が答えたとしたら、そうだねということで、それは駄目だと言うわけにもいかないので、困らない状況をずっと教室の中で作ってきてしまった、あるいは教育自体が理想を持っているということがあって、こういうところも対応していかなければいけないと思ったわけです。

そこで、少し工夫をしました。1つ目は、ケーススタディをもう1つ入れました。冒頭の確認テストとワークのほかに、もう1つケーススタディの事例検討を入れるようにしました。テキストとは別です。保育課程と直接は関係ないですが、このケーススタディで子供理解と保育の理解をすることを保育課程の中に入れ込んでいくという論理で、ケーススタディをやっています。

そして、最後の20分間でやってもらうワークも、できるだけ具体的な状況とか、あるいは多様な状況を考えてみましょうというようなシミュレーションをしてもらって、それをみんなで4人1組になって紹介し合いましょうという形でグループワークをして、自分の考えていたことと違うことを考える人がいるということに出会わせるとか、そういうことをしています。そして、そういうものを評価しますということを学生にも伝えています。

そして、一番下、段階的な活動の支援ということで、慣れていないということに関して少しフォローしないといけないということなので、段階を作って、徐々に段階を上げていきます。ケーススタディは、例えばこういうケーススタディをやっています。女の子が絵本を読んでいて、男の子がブッブーとおもちゃで入ってきたら、何も邪魔をしていないのに、ガリガリといきなり攻撃をして、追いかけますのですが、この女の子はどうしたらいいでしょうというケーススタディをして、この右側にお二方の専門家がそれなりに回答していますけれども、それを読み込みながら、ほかにも考え方があるかもしれないということで、多様な解釈を生み出すようにしています。

例えば、全然困った子ではないと言います。自分で楽しんでいるところの領域に訳の分からない化け物が入ってくるわけです。どこの馬の骨か分からない人がブーッと入ってきて、それは怖いでしょうというような邪魔をされるかも分かりません。邪魔していないけれども、されるかも分からなくて攻撃しているかもしれないというような子供理解の多様性といいますか、そういったものに触れるようにしています。

ワークシートでの具体性、多様性は、例えば教育課程、保育課程における狙いと内容というのがあるのですが、編成していく上で踏まえておかなければいけな

い観点があったとか、これはテキストの中で書かれているものですけれども、これらを踏まえて具体的に作ってみましょうというような課題を出します。

それぞれに関しては、具体的に考えて作ってくださいと言って、でも、何もないところからは難しいでしょうから、例を示すわけです。具体的に自分で考えてみましょう、状況を作ってみましょうということで作ってもらっています。こんな感じで、子供たち2歳児6名と書いていますけれども、何歳児なのかとか、このクラスは何人いるのかということも自分で自由に考えてみてくださいというふうな形で、2歳児の6人のクラスだったらどうしますか、どんな狙いですかというふうに自分でつなげて考えてもらうようにします。こうやって具体的に考えてもらうと、当たり前ですけれども、学生によって状況は絶対に変わります。違うものを作り出してきますので、それで多様な状況を基にした狙いと内容の多様性にも彼らは気付いていくというふうにしています。

段階を踏んだ支援ということで、学生たちは考えて書くというのが難しいということなので、最初はとにかく考えて、とにかく考えことを何でもいいから書きましょう、たくさん書いてください、最初は量が重要ですということで、たくさん書いてということで書きます。

この段階の次に、量が書けるようになってきたら、今度はそれにちょっと私が下線を引いたり、コメントを書いたりして、返していきます。学生が書き直すということをするようにします。

次の段階は、いつまでも私がそうやってメモして書き出すと、先生が正解を知っているのかなとまた思われると嫌なので、私はすっと1回引きます。そして、ほかの学生の意見に触れる機会に変えていきます。

そして、最終段階として、ここにまでなかなかたどり着けていないのが今の私の現状ですが、ほかの学生の意見に触れなくても、それを想像できるということです。こういう違う考え方もあるかもしれないとか、そういうふうなことを想定して、もう1回、自分で書き直せるようにしていきたくて、こういう機会は設けていますけれども、なかなか満足のいくところまでいけていないので、私の中で課題です。

その他、別の授業ですがということで、この資料の後ろに演習型の授業の実践事例のことを載せておりまして、そこのスライド79をまた後ほどご覧いただいたらいいかと思いますが、今日はご説明しませんので、ご了承ください。こういうことも書かせていただいています。自分自身だけだとどうしても手一杯で、本当は少人数クラスばかりを作って、しっかりと支援をできれば一番いいですけれども、大学の経営的な問題もあって、そうも言っていられない事情があって、そういうときには少し学内リソースということをもう1回問い直して、図書館スタッフや上の学年の学生や、そういうサポーターを使っていく、連携していくというようなこともまた考えているわけです。先ほどの講義型の授業ではそこまでやっていませんけれども、そういう方法もあるかと思っています。

そこで、グループディスカッションの2番に行きたいと思います。先ほど意見交換をした内容があるかと思います。この青いところに対する工夫、主体性、学習意欲を向上させる工夫について、意見交換をしていきたいと思います。時間は20分間、今から取りたいと思います。その後に、前に出てきていただいて、各グループ、6グループありますので、1グループずつ発表していただいて、シェアしたいと思います。

発表としては、まずどういう状況があったのか、それはなぜ発生しているのか、それを克服するためにどういう工夫があり得るのかというような形で発表していただくとよいかと思います。皆さんのところに白紙の用紙とマジックをお配りしますので、前に書画カメラがありまして、それでパッと示しながらプレゼンしていただければと思います。整理して発表していただきますので、その発表に使いました記録は、後ほど全グループ分を、皆さんにぜひフィードバックして、ほかのグループでの知見を共有できるようにしたいと思っています。ですので、タイムマネジメントをする方、記録をとる方、発表される方というのもまた皆さんでお決めいただけるとよいかと思います。

杉原先生：

では、発表に入りたいと思います。独断と偏見で恐縮ですが、1班、2班、3班、4班、5班、6班という順で発表いただきたいと思います。1班の発表の間、自分のところの発表の準備で一生懸命かもしれませんけれども、ぜひ聞いてあげてください。発表者のほうを向いて聞いていただくと、発表者も発表しやすいかと思いますので、支えてあげていただければと思います。それでは、1班の方、よろしいでしょうか。お願いします。こちらのほうへどうぞ。

1班代表：

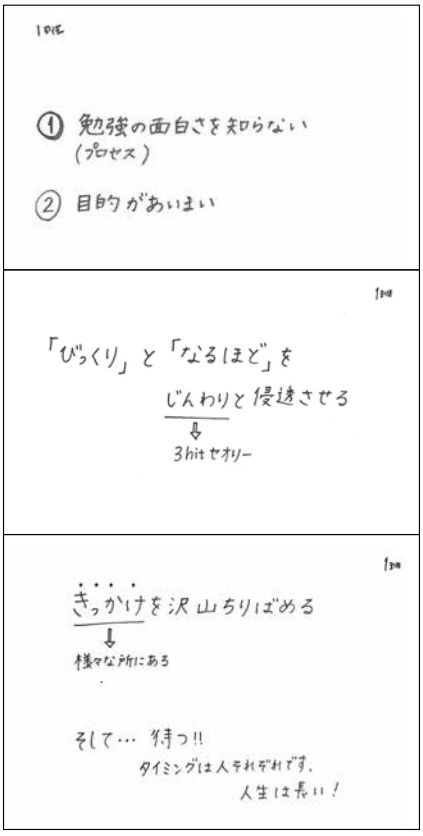
では、1班の発表を始めたいと思います。よろしくお願いします。最初の問題点を私たちみんなで考えたところ、2つあるという結論に至りました。1つは、勉強、プロセスの面白さを知らない学生が非常に多いという

ことと、2つ目が、勉強をすることの目的が曖昧なために意欲が湧かないという2点が出ました。

それを解決するための工夫として考えたのが、びっくりとなるほどをじんわりと浸透させるというものです。先ほど、ある先生からお話があったのですが、広告代理店のお話がありまして、人は驚きと共感を同時に感じるとすごくインパクトを受けて、興味が持てるというセオリーというか、そういうものがあるというお話を聞きまして、なるほどとみんなで共感しまして、この喜びというか、共感を何度も何度もしつこく伝えることで、学生に興味を持たせて、分からないことが分かるようになって、より一層勉強が楽しいと思えるようになっていくと、勉強の面白さを知らない学生が減っていくのではないかと考えました。

そして、2つ目の、目的が曖昧という件です。きっかけをたくさん散りばめるということで、ここには、さまざまなところにあると書いたのですが、学生と接する教授とか准教授の先生方はもちろんですけれども、ふだん学生とかかわる事務職員の方々、あとは試験監督とかオープンキャンパスなどで学生と触れ合うときにお話をする事務職員の方ももちろんですし、本当にいろいろなところにきっかけは見つけられると思うので、そういった場を私たち大人の側からも提供して、よりコミュニケーションを深く取っていくというのが大切だと感じました。

そして、そのきっかけを受けて、いろいろなことに気付くタイミングというのは本当に人それぞれだと思



いますので、そういったたくさんのきっかけを散りばめつつ、ひたすら待って、人生は長いですので、どこで気付いてもいいと思います。学生時代でもいいですし、働き始めてからいろいろなことに気付いて、自分の人生を考えるタイミングも来ると思うので、たくさんのきっかけを散りばめてあげるというのが私たちの結論となりました。ありがとうございます。

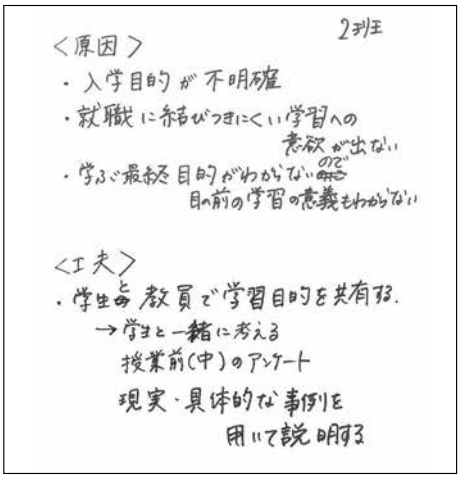
杉原先生：

ありがとうございました。すごく良い発表でしたね。ありがとうございます。タイミングは人それぞれ、人生は長いというと、本当に良いですね。待つというのは、私たち、できない性分がありますけれども、待てるということは学生の主体性を引き出すのにもいいのかなとすごく改めて感じました。ありがとうございます。続きまして、2班の発表をお願いしたいと思います。

2班代表：

1班ほどきれいにまとめられていないですけれども、2班の発表を行わせていただきます。まず、私たちは、最初のグループワークで、なぜ学生が主体的に学べないのかという根本的な原因は、入学目的、大学に入る目的が不明確な学生が多いからではないかと考えました。その結果、何となく入学した学生であるので、どの学問を学びたいという目的があまりないために、どちらかというと、関心は就職にいっていると思います。そのために、就職に結びつく学習への意欲が出なくて、そもそも入学目的が不明確なので、大学で学ぶ最終目的が分からないために、目の前の学習の意義も分からずに、主体的に学べていない学生が多いのではないかと考えました。

その中で、授業という中で、そのような学生の学ぶ目的を高めるためには、学生と教員が学習目的を共有する必要があるのではないかと思っています。教員の方々のお話でよく出たのが、教員が目指している学習目的と学生が目指している学習目的にけっこう差異があることを感じるということです。授業前や授業中にアンケートを行って、教員が学生の学習目的をしっかりと確認することとか、学生と一緒に考えながら授業を行っていくことで、学生の学習目的というものと学ぶ内容を少しずつ照らし合わせていき、また、具体的、現実的な事例を積極的に用いて授業を進めることで、実際に最終的にこの学びがどこに結びつくかということをイメージしやすい授業を心がけていくことが大切



ではないかということになります。非常にまとまりがないですけれども、2班の発表は以上です。

杉原先生：

ありがとうございました。押し付けてでもなく、学生と教職員が一緒に考えるというところがすごく良いと思いました。私たち教員にも、何のためにこの授業をやっているのかということが、単なる学問、専門の論理ではないところともう一歩、絶対にあるはずです。この領域は生活世界とどう関係しているのかとか、それは就職だけではなくて、いろいろなものと関連性があるはずですけれども、それをすっ飛ばして、ありきでやってしまうこともあるので、今の発表のように、一緒に学生と考えるということで、私たち自身もまたディベロップしていけるのかなと思いました。ありがとうございます。続きまして、3班のご発表をお願いしたいと思います。

3班代表：

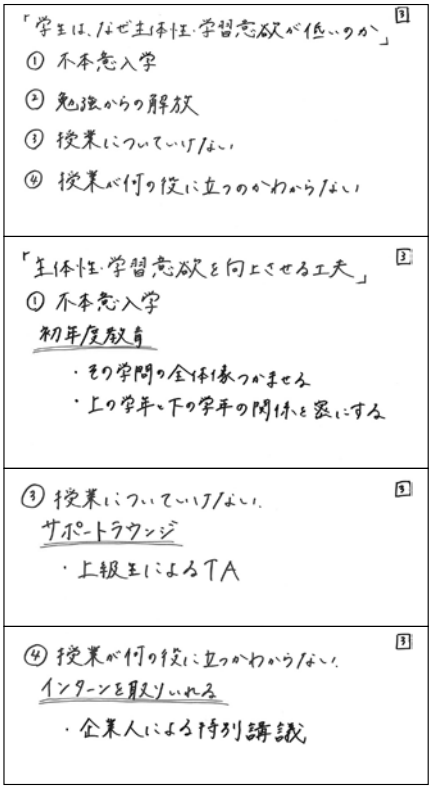
それでは、3班の発表を始めたいと思います。私たちのグループでは、学習意欲が低い理由というのを4つ挙げました。1つが、この大学に来たくないのにという不本意入学です。2つ目が、勉強からの解放です。これは、1年生になると、受験勉強から解放されるので、いっぱい遊んでしまおうというモチベーションになって、あまり学問のほうに意識がいかないということです。3つ目が、授業に付いていけなくなって、そのまま教室にいても面白くなくて、学習意欲が下がるということです。4番目が、結局、一生懸命勉強をしても、それが何の役に立つのか分からないということです。この4つが大元にあるだろうと考えまして、それぞれに対しての対策を考えました。

1つ目の不本意入学に関して、これについては、初年次教育が非常に重要ではないかということで、授業とかカリキュラムの特徴として、例えば、その学問の全体像をつかめるような授業を増やしたほうがいいということです。ディテールは置いておいて、全体をざっくりとやるというような授業を組むということです。

もう1つが、上の学年と下の学年の関係を密にするということです。これは、例えば1年生と2年生が交流しやすいようなラウンジを作るとか、いろいろやり方はあると思いますけれども、そういうところがあれば、上の先輩を見ながら、どういう人がいて、どういう考えを持っていてということが分かってくると、モチベーションが湧いてくるのではないかということで考えました。

2番目です。勉強からの解放については、受験勉強でいろいろストレスがたまっているので、大いに遊べばいいと思います。ということで、特にそれについて対策は立てません。

次に、3番目です。2年生、3年生になって授業に付いていけないということが出てくると思います。1つは、教授の先生一人一人がその授業でなるべく分かりやすいように努力するのは当然ですけれども、それでも落ちこぼれるというか、付いていけない子が出てくると思います。そういう人のためのサポートをする受け皿で、サポートラウンジみたいなものを作っておいて、いろいろな質問をしてもいいという場所を作っておいて、そこで上級生にTAをしてもらうというもの



です。アルバイト代をどうするとか、いろいろ問題はあると思いますけれども、何かそういう仕組みがあるといいと思いました。

最後に、授業で学んだことが何の役に立つか分からないということです。これについては、ふだんからニュースを見たり、サークルの先輩のお話を聞いたりとか、そういうことをしてほしいと思いますけれども、具体的な対策として、インターンを積極的に取り入れるというのが1つと、もう1つが、企業による特別講義です。今、いろいろな会社で働いている、トップではなくても、それなりのクラスの人に来てもらって、特別講義でいろいろしゃべってもらう機会を作るのが大事かと考えました。以上です。

杉原先生：

ありがとうございました。私が一番印象に残ったのは、上回生によるTAですか。ああいうものがあると本当にいいですねと思いました。私は、幼稚園教員とか小学校の教員もやっていましたけれども、だいたい学校改革をするときは6年生を変えるところから始めるそうです。6年生が変わればそこから下は変わるというのです。出口の人たちのやる気とかやっていることが刺激になって下りていくということなので、たいてい教える側になるとすごくがんばりますよね。それで変えていくことで、1年生たちが面白いと思える機会を作れるというのは、私も参考になりました。ありがとうございました。続きまして、4班、お願いいたします。

4班代表：

4班の発表をさせていただきます。まず、問題点に関して、われわれは、授業内容というよりも、せっかく職員がいるので、授業以外で大学全体として何ができるかというのを考えてみました。そもそも自信を持てない学生が多いです。幾らMARCHレベルといっても、上は早慶国立大がいます。上に行けたのに行けなかったので、自分は負け組意識だけれども、実は青学はけっこう上のほうだというのを意識できればいいと思っています。

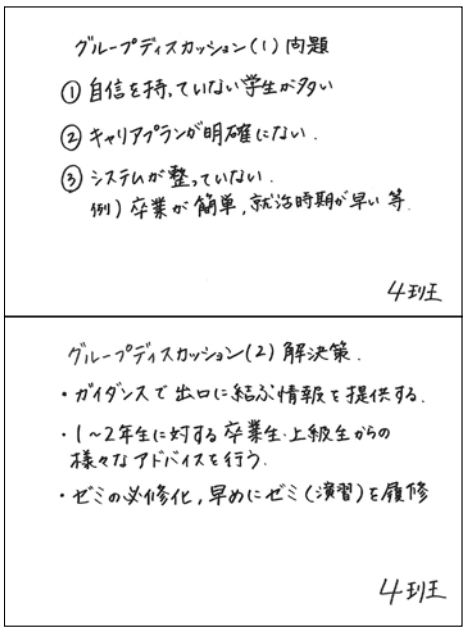
2つ目は、ライフプランが明確ではないです。とりあえず高校までは、できるだけ大学に入りたいという目的で勉強しているので、将来どんな仕事をしたいかというのはあまり考えていないし、入ってからも就活が始まるまではあまり考えません。

そして、システムが整っていないというのも、先ほど講師の先生から、入るのが簡単な大学が増えてきているというふうに言いましたが、彼らの意見を見ても、入るのは難しくても簡単でも、日本の大学は入れば出られるというような感じがしていて、就職活動時期が早いので、勉強が何のために必要なのかというのはあまり分かっていません。

それに対して、大学としていろいろな側面からサポートできるのではないかと思います。まず、例えば、特に1年生とか2年生のガイダンスのときは、主に大学で生き残るための説明はしています。いつ、どれぐらい単位を取れば卒業できると話すので、結局、単位を取るのが目的になってしまいます。だけれども、ガイダンスのときに、出口に結ぶ情報を提供すれば、例えば、私は情報テクノロジー学科の教員ですけれども、システムエンジニアになる学生は4割で、そのためにこの授業は役に立ちますとか、電機メーカーの学生は何割でこういう授業が非常に役に立つとか、そういうような出口に結ぶ情報をガイダンスでしっかり毎年提供するといいと思います。

そして、企業の人とか卒業生からの体験を語りに来てもらうのはよくありますけれども、一般的には成功した人が話に来ます。だけれども、学生の中で、失敗している学生が、この人は僕と違いますと思って、あまり参考にならないので、できるだけ1回挫折して失敗した人の話を聞いて、どうやって立て直したか、そのきっかけを語ってもらえれば、元気がないとか、迷っている学生も、何か立て直すきっかけになるかもしれません。

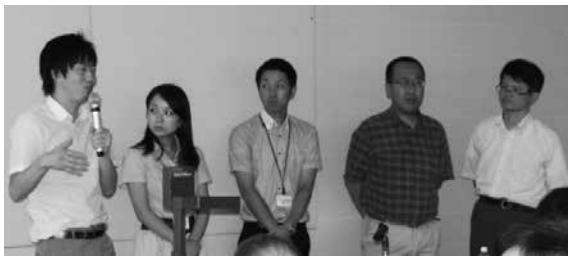
そして、3番目の工夫としては、ゼミの必修化です。理工学部だと当たり前ですけれども、文系の学部だと、



特に卒業論文とか、そういうゼミはない場合もあります。だけれども、ゼミだと教員1人に対して学生は10人とか、非常に教員と会話できる機会がゼミなので、そこで仕事のアドバイスとか、いろいろ聞けますので、ぜひゼミを必修化して、あとは早めにいろいろな先生の考え方、体験も聞けるように、2年生ころからそういう少人数ゼミを毎学期に用意すれば、卒業研究はどの先生がいいのか、どんな仕事があるかというのは、具体的な話、相談ができるので、こういうことを考えてきました。以上です。

杉原先生：

ありがとうございました。提示していただいたガイダンスのお話とか上級生のアドバイスというのを1、2年の早い時期にゼミで取り入れるとうまくいくというような良い方程式が出ていたという気がしました。ありがとうございます。では、5班のほうの発表をよろしくお願いします。



5班代表：

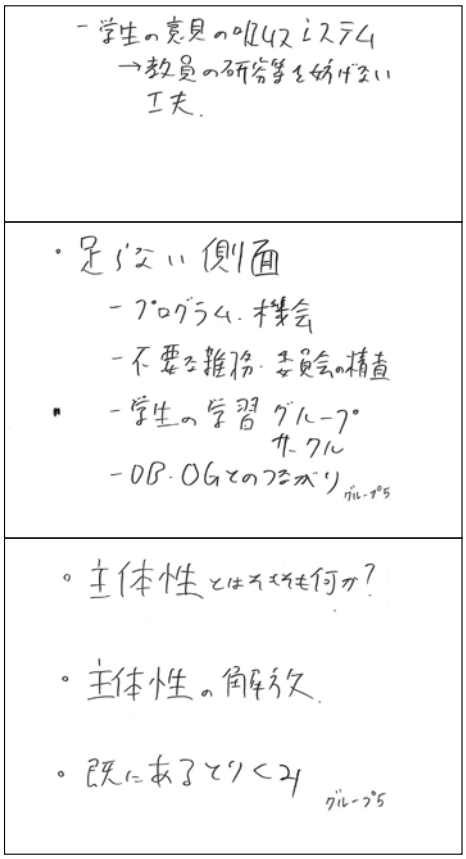
われわれのグループは、主体性とはそもそも何なのかというところの問いもさせていただきました。例えば、授業中に私語をしたりとか、別のことをやったり、これは主体性がないというふうにわれわれは見がちですが、むしろ主体的におしゃべりをしているという意味では主体的なのかなという気はします。何かといいますと、子供たちというのはとてもいろいろなものに興味があって、自分が面白いと思うものをどんどん見つけていくというものがあります。しかし、われわれ、教育になると、それをむしろ押さえ込むようなことを逆にしてしまっている側面がないのかという気がしています。

というところで、むしろ主体性がないというのを前提に話をするのではなくて、主体性というものを解放するという方向で議論をするという方向も必要ではないかという議論が出ました。

あと、すでにある取り組みと足らない側面というところで、すでにある取り組みとしては、例えば理工のほうでしたら、研究発表をしていて、そこにOB、OGの方、本物の研究者の方が入っていって、その研究者の方がその発表についてアドバイスをして、それが良い発表であれば、学会誌にもなっていくという形で、いかに本物の実践とつなげてあげるかというところが大事なのではないかというところです。

あるいは、プロジェクト学習というのを社会情報学部ではやっていまして、そこでは企業の方とか地域の方がお題を出してくれて、学生はグループに分かれて、そのお題に基づいて、例えばある企業さんの商品というのをもっと生かす形で新しい商品を作るとしたらどういう商品を作ればいいかとか、そういうのをグループに分かれてやって、発表していったりするのです。けっこう良いアイディアとかを学生たちは出してくれて、コメントをくれる企業の方たちから見ると商品化につながるのではないかというような話もありますけれども、なかなかいろいろな現実的問題もあって、そこまでいかないということがあったりします。

われわれがそういう仕組みを、あまり教員たちあるいは職員の方々たちの負担にそこまでかからない形で、どういう形でサポートしてあげる必要があるのだろうかというところです。足りない側面として、そういう意味では、もっと学生たちにいろいろな本物を見せたりして、あるいは本当のOB、OGの方たちとか、そういう方たちとの関係をつないでいくような機会とかプログラム、第1種の資格の議論も出ました。青学は第1種の資格を取れる人がなかなか少なく、MARCHの中でも低いというような話があって、僕は初めて伺いましたけれども、そういう機会をどういうふうにしていくかということで、そのためには、学生同士で1種に受かった先輩とか、あるいは他大学さんの中で1種に



受かっている実績を挙げている大学の学生のサークルとかと関係を作っていって、そういうコミュニティを作るとか、そういう議論も出ました。

あと、そういう新しい取り組みをするということになると、今までよりも仕事が増えるということなので、本当にその仕事は必要なのかとか、そういうものも同時に精査していかないと、ただ負担が増えていくばかりなので、その辺りの調整も必要なのではないかというような話です。

最後は、学生の意見を吸収するシステムというものが何かあれば、一方的なクレームにならずに、学生自身も提案するのであれば責任を持って学生もかかわってやりましょうということで、それが学生にとってもメリットになるし、われわれ教員にとってもやる気になるというような、何かお互いが相乗効果でうまく、文句の言い合いにならないような関係というのも考えていく必要があるのではないかというようなところです。以上です。

杉原先生：

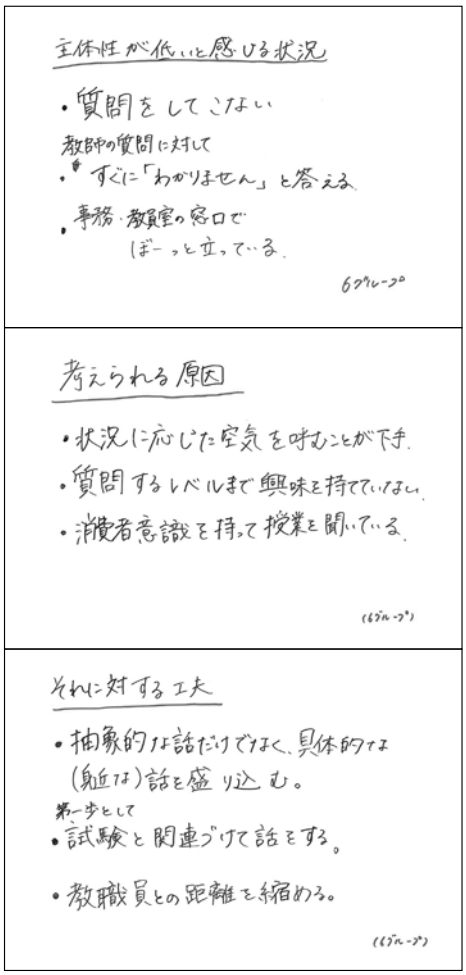
ありがとうございました。印象的だったのは、本物という言葉だったと思いますけれども、本物の実践というところにどう触れさせるかというのは、先ほどの4班の早いうちからのゼミというものともたぶん通ずるところなのかなと思いました。ありがとうございます。それでは、最後に6班のご発表をよろしくお願いします。

6班代表：

それでは、最後に6班の発表を始めさせていただきたいと思います。まず、具体的に、私たちのグループでは、学生の主体性が低いと感じる状況というのはどういうものがあるかということを話し合いました。大きく分けると3点ございます。1点目が、質問をしてこないことです、2点目が、教師の質問に対してすぐに、分かりませんと答える学生が多いことです。3点目が、事務室とか教員室の窓口で、こちらが話しかけるまでずっと立っていて、何がしたいのか分からない学生がいるということを、主体性が低いと感じる状況で具体的に挙げてみました。

それに対して、なぜそういうことが起こるのかという考えられる原因を3点挙げてみました。1点目が、状況に応じた空気を読むことが下手ということで、仲間内で空気を読むことはよくできる学生が多いですけれども、たぶん空気を読み過ぎていて、今話しかけていい状況なのかがよく分かっていなくて、逆に空気を読めていない学生が多いのかなということです。2点目が、授業で質問をしてこないという学生に対して、何でそういうことが起こるのかというと、質問するレベルまで興味をきちんと持てていなくて、何を質問していいのか全く分からない状況にあるということが考えられるということが挙がりました。3点目が、消費者意識を持って授業を受けているということです。自分が発言をしたり、質問をしたりしなくても授業は勝手に進んでいくという状況が実際にあるので、学生がうまく主体性を出せていないのではないのかということが考えられました。

それに対する工夫ですけれども、まずは、抽象的な話だけでなく、具体的な、学生にとって身近な話を盛り込むということが大事なのではないかというふうになりました。大学でやる授業ですので、抽象的な話が多くなってしまって、なかなか具体的なものと結びつけるというのは難しいのかもしれないですけれども、学生にとっては全く分からないものをいきなり突きつけられてしまうと、何だろうというふうになってしまうことがあるので、できる限り学生がイメージしやすい事柄と授業を結びつけられると、もっと学生が興味を示すことができるのかなというふうに考えました。



また、試験と関連付けて、あまり良くないのかもしれないですけれども、まず学生の意識を向けさせる第一歩として、試験と関連付けて話をするということが1点です。

最後に、質問というと、ふだんの学生とのコミュニケーションという中で、職員とか教員に話しかけやすい雰囲気というのも、質問のしやすさというので関連してくると思うので、ふだんからコミュニケーションを大切にして、教職員との距離を縮めるということが大切なのかなというふうに思いました。以上で6班の発表を終わります。

杉原先生：

ありがとうございました。試験との関連も決して悪いことでもないと思いますし、評価論ではオーセンティシティといいますけれども、試験自体も、先ほどの本物というところと関連して、本当の本物にどう近づけるか、テスト、評価自体を実践とどう関連付けるかというところも考えると、非常に良い問題提起だったと思います。ありがとうございました。

以上でディスカッションと発表を終わりたいと思います。皆さんも発表をお聞きされていて、感づかれたと思いますが、まだまだ議論すべきことはたくさんあります。私も今日、冒頭に、検討すべき事項というのは大きく4つほど挙げさせていただいて、今日はそのうちの3番目で、その3番目の中でも本当に非常にミクロな話をしますということを申し上げましたように、やらなければいけないことはまだまだたくさんあって、検討しないといけないことが山のようにありますが、決して不可能なことではないと思いますので、ぜひ皆さんの力をこれから青学のために結集させていただけるといいかと思います。また、継続的にこういう場を作っていただければいいかと思っています。

私の稚拙なタイムマネジメントで、本当は5分前に終わりたかったですけれども、7分もオーバーしてしまいまして、申し訳ございません。これで私のお話とグループワークを終わりたいと思います。皆さまの協力に感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

中野委員：

これで本日のプログラムはすべて終了しました。非常に有意義な会になったのではないかと思います。最後に、全学FD委員会委員長の長谷川先生に、もう1度弊会のあいさつをいただきたいと思います。

長谷川副学長：

皆さま、長時間どうもありがとうございました。今日は杉原先生の関西弁に導かれて、あっという間に時間がたってしまいました。それから、最後のディスカッションも大変有意義なものだったというふうに思っております。特に最近、すべての学生を対象に、学生意識調査というものを行っておりまして、その結果もすでに発表されつつありますけれども、その内容ともとても符合するようなところがあると思います。本学の学生は、先ほど指摘されていましたように、第1志望の比率は決して高くありません。でも、その第1志望でない学生もとても優秀な学生がいるわけですし、意欲的な学生もいます。そういった部分を含めて、本学の教育が行われているというのは、先ほどの議論の中の目的性といったところともかかわってきていると思います。

それから、いただいた提言の中で、学習支援の必要性とか、少人数教育の必要性といったところで具体的な指摘をいただいております。この辺についても、大学として今、考えているところもございますので、具体的に検討していただく機会も出てくるかなというふうに思っております。本学の場合、9学部23学科という、とても多様な条件の中で、それぞれ教育が行われているということで、先ほど600人の授業なんていうこともありましたけれども、いろいろな条件の下での先生方が一堂に介して議論していただく機会というのはとても必要だというふうに思っております。

今日の議論というのは、先ほど杉原先生のまとめにもありましたように、結論ではなくて出発点ということだと思いますので、今後、大学としてもいろいろな教育支援の仕組みを考えながら、先生方の教育研究につきまして整備をしていきたいと思っております。本日は本当にどうもありがとうございました。

中野委員：

それでは、最後にもう1度杉原先生に拍手でお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。それでは、この研修会を閉じさせていただきたいと思います。お集まりいただきまして、ありがとうございました。

資料（スライド）　※本紙掲載に当たり一部変更あり

青山学院大学 第2回新任教職員研修会
2013年9月17日

学生の主体性をいかに育むか

山形大学基盤教育院／教育開発連携支援センター
杉原真晃

1

はじめに：持続的・実質的な教育改善・開発に向けて

2

本日の目的

テーマ：
「学生の主体性をいかに育むか」

目的：
・学生の主体性（主体的学習）をいかに育むかについての意識を高める，理論や実践事例を知る。
・それをもとに，授業や業務における不安，課題，工夫，楽しみ等について，考える
・参加者間でそれを共有し，アイデアを交換する

3

本日の内容

(1) 「学生の主体性をいかに育むか」についての話を聞く

(2) 青山学院大学での実践的課題を語り合う
授業における，学生の主体性・学習意欲についての課題

例）・学生の学習意欲をどう高めるのか
・私語をどのようにコントロールすればよいか
・学生生活全体においていかに主体的・能動的にさせるか
など

4

学生の主体性をいかに育むか

0. ワーク：青山学院大学生の現状認識＜15分＞
1. 主体的学習が求められる社会的事情
2. 主体的な学習を支援する教育方法
3. 主体的学習をしない情意的要因＜「1」～「3」：40分＞
＜10分休憩＞
4. グループディスカッション（1）＜15分＞
5. 授業における学習意欲向上のための対応＜30分＞
6. グループディスカッション（2）＜50分＞

参考資料：演習型授業の実践事例

5

0. 青山学院大学生の現状認識

わたしが知っている，青山学院大学生の・・・，

(a) 素晴らしいと感じる学生像と，その具体的エピソード

→ (1) 各自，自己紹介をします。氏名，所属，自分の学生時代に打ち込んでいたもの
（5分程度。1人1分/グループメンバー数）
(2)(a)について発表しあう。
（5分程度。1人1分程度/グループメンバー数）

6

0. 青山学院大学生の現状認識

わたしが知っている，青山学院大学生の・・・，

(b) 問題だと感じる学生像と，その具体的エピソード

→ (3) (b)について発表しあう。
（5分程度。1人1分程度×グループメンバー数）

7

1. 主体的学習が求められる社会的事情

学生参加型の授業が求められる背景　（田中, 2003）

①高等教育のユニバーサル化にともなう学生の学習意欲の低下等への対応

②臨床場面で生きて働く臨床知の獲得や科学技術の爆発的展開にコミットできる高度な創造性等の育成

8

1. 主体的学習が求められる社会的事情

①高等教育のユニバーサル化にともなう学生の学習意欲の低下等への対応

(1) ボーダーフリー大学の学生の認識　（山田, 2009）
・ボーダーフリー大学の学生は，学習意識が高いが，授業に対する期待が低く，授業外であまり勉強しない
・サークルやクラブ活動にもあまり熱心ではない

(2) ボーダーフリー大学の学生の逸脱行動　（葛城, 2012）
・疑似出席：中抜け，エスケープ等
・ながら受講：私語，携帯電話，居眠り，飲食，ゲーム等
・教員への反抗：暴言，乱暴等

9

1. 主体的学習が求められる社会的事情

②臨床場面で生きて働く臨床知の獲得や科学技術の爆発的展開にコミットできる高度な創造性等の育成

(3) 中央教育審議会答申（2012.8.28）
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～」

10

1. 主体的学習が求められる社会的事情

(3) 中央教育審議会答申（2012.8.28）

我が国は未曾有の災害である東日本大震災に見舞われたほか，政治，経済，社会，文化，その他多方面にわたり，当時よりも更に大きな構造的変化に直面している。グローバル化や情報化の進展，少子高齢化などの社会の急激な変化は，社会の活力の低下，経済状況の厳しさの拡大，地域間の格差の広がり，日本型雇用環境の変容，産業構造の変化，人間関係の希薄化，格差の再生産・固定化，豊かさの変容など，様々な形で我が国社会のあらゆる側面に影響を及ぼしている。さらに，知識を基盤とする経営の進展，労働市場や就業状況の流動化，情報流通の加速化や価値観の急速な変化などが伴い，個人にとっても社会にとっても将来の予測が困難な時代が到来しつつある。

11

(3) 中央教育審議会答申（2012.8.28）

将来の予測が困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる能力（学士力）

答えのない問題に解を見出していくための批判的，合理的な思考力等の認知的能力
チームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担う，倫理的，社会的能力
総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力
想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養，知識，経験

12

(3) 中央教育審議会答申（2012.8.28）

生涯にわたって学び続ける力，主体的に考える力を持った人材は，学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から，教員と学生が意思疎通を図りつつ，一緒になって切磋琢磨し，相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り，学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的，倫理的，社会的能力を引き出し，それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義，演習，実験，実習や実技等を中心とした授業への転換によって，学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ，生涯学び続ける力を修得できるのである。

13

2. 主体的な学習を支援する教育方法

2-1. 主体的学習の支援にかかる検討事項
2-2. どのような「主体性」を期待するのか
2-3. 主体的な学習を支援する際の留意点

14

2-1. 主体的学習の支援にかかる検討事項

学生の主体的な学習を育むために
①制度，カリキュラム，授業，課外活動の検討
②教職員の役割の検討
③主体的学習に影響を及ぼす諸要因の検討
④人員，施設・設備，予算，組織構造の検討

15

①制度，カリキュラム，授業，課外活動の検討

・制度：学生FD委員，学生報償制度，授業アンケート
授業選択，GPA制度，CAP制度　など
・カリキュラム：講義とアクティブ・ラーニングとの連携，
学生によるカリキュラムデザイン　など
・授業：受講人数，学習目標，教授・学習方法，
学習環境，授業時間外学習，評価方法　など
・課外活動：クラブ・サークル，ボランティア，自主勉強会，
インターンシップ　など

16

②教職員の役割の検討

・研究者，専門家（research, profess）
・教授者，伝達者（educate, transmit）
・学習者の理解者（listen, understand, counsel）
・学習の支援者（advise, coordinate, coach）
・学生と協働者（collaborate, communicate）

17

③主体的な学習に影響を及ぼす諸要因の検討

・教育技術
・学習環境
・教授－学習プロセスの理解
・教育内容の知識
・教員の倫理観，学習観

18

④人員，施設・設備，予算，組織構造の検討

・少人数教育の充実
・可動式机・椅子のある教室，モバイル端末の貸出等，学習環境の整備
・TA・SA等の学習サポート体制の整備
・ラーニング・コモンズの設置
・LMS，e-learning 等の充実
・給料アップ
・経営と教育の対話

19

2-2. どのような「主体性」を期待するのか

主体的な学習のあり方の分類例
・受動的消費者・能動的生産者（Riesman, 1986）
・浅い学習・深い学習（Biggs and Tang, 2007）
・協同学習（Johnson and Johnson, 1991）
→各大学，各学科，コース等で検討・共有

20

cf. 深い学習と浅い学習の理解のレベル（Biggs and Tang 2007）

振り返って熟考する（reflect）
離れた課題に適用する（apply: far problems）
仮説を立てる（hypothesize）
原理に結びつける（relate to principle）
身近な課題に適用する（apply: near problem）
客観的理由をあげて説明する，解説する（explain）
自分なりの理由をあげて主張する，論じる（argue）
関連づける（relate）
中心となる考えを理解する（comprehend :main ideas）
状況や特徴を述べる，記述する（describe）
言い換えていう（paraphrase）
文章を理解する（comprehend :sentence）
確認する，名前をあげる（identify, name）
記憶する（memorize）

Deep
surface

21

cf. 協同学習（Johnson and Johnson 1991）

	古いパラダイム	新しいパラダイム
知識観	教員が知識を学生に移し，記憶・再現させる	学生が知識を発見・構築・変換するような環境を教員が創る
学生観	受身的な器（教員の知識で満たされる）	自分の知識を積極的に構成・発見・生成する主体
授業の目的	学生を分類・選別すること	学生の能力と才能を開発すること
人間関係	学生間，教員と学生の間で非人間的な関係	学生間，教員と学生の間で人間的なかかわりあい
学習環境	競争的・個別的な学習	クラスでは協同学習，教員間では協同チーム
授業の前提	専門家はみな教えることができる	教えることは複雑で相当な訓練を要する

22

2-3. 主体的な学習を支援する際の留意点

・学生が主体的に学ぶよう，工夫して授業をしているけれど，いっこうに学生は主体的に学習しない
・いくら授業者が努力しても，学生にも努力してもらわなければ良くならない
→「学生諸君，努力せよ！」と学生を叱咤激励する・・・
→それで解決するならOK・・・そうでない場合は・・・？
→あきらめないで済むために・・・，

23

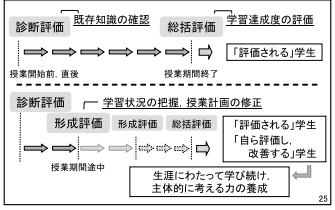
2-3. 主体的な学習を支援する際の留意点

↓
主体的に学習しない要因について，
診断しなければ・・・。

→観察，質問紙，
インタビュー
診断評価，形成評価

24

cf. 主体的学習を育てる評価のあり方
－診断評価，形成評価，総括評価－



2-3. 主体的な学習を支援する際の留意点

①知識的要因
　主体的な学習のあり方を知らない

②技能的要因：
　主体的な学習のあり方を知っているけれど，
　うまくできない

③情意的要因：
　主体的な学習のあり方を知っているけれど，
　やろうとしない・やる気を持たない

→ どの要因によるものなのか（複数にわたる場合もある），をふまえて対応を考える

cf. 知的・技能的要因への対応

①知識的要因，②技能的要因への対応例

- ・授業時間内外で主体的学習を課す
- ・授業時間内外で教える，アドバイスする
- ・協同的な学習において方向づけを行う（足場づくり）
- ・参照できるテキストを作成し，活用させる
- ・ICT，Teaching Assistant 等を活用する
- ・授業内外での主体的学習の機会を増やす
- ・繰り返し行わせる

3. 主体的学習をしない情意的要因

3-1. 学生アンケートから見る要因

3-2.「JKLM」モデルから見る要因

2-3. 学生アンケートから見る要因

・熊本大学「授業改善のための学生アンケート」
（2004年度後期・2005年度前期実施分）より

a) 特に多い意見
b) 深刻な意見
c) 好評な授業への意見

a) 特に多い意見

＜板書＞

読みやすく
丁寧な字で
口頭だけでなく板書を
分かりにくい箇所は板書を
省略せずにきちんと最後まで
板書を消すのが早すぎる
スピードが速すぎる
黒板の下の方まで書きすぎると見えにくい

キレイに
文字が小さいと見えにくい
より多くの板書を
語句だけでなく説明も書いて
板書の前に立たれると見えない
ノートにまとめてきて板書を
板書の時間と説明の時間を分けて

a) 特に多い意見

＜話し方＞

スピードが速すぎる
大切な所やまとめはゆっくりと
声が小さい
はっきりとした話し方で
気持ちのこもった話し方を
（教室によっては）マイクの使用を

＜授業時間＞
開始時刻に遅れないで
延長しないで

a) 特に多い意見

＜レジュメ・配布資料＞
レジュメを配って
内容が中途半端
資料を授業に沿ったものに
多すぎて重要な点がわかりにくい
早めにウェブに掲載して

＜説明・解答＞
設問を詳しく丁寧に説明して
設問の答を明確に詳しく書いて
他の先生や実務家に尋ねてでも，正確な解答を明示して

a) 特に多い意見

＜内容の適切性・難易度・スピード＞
初めてこの問題に取り組む学生も参加しやすい内容に
学術的におもしろいと思うような授業を
内容が難しすぎる
言い回しが難しすぎる
細部よりも，まず大きな視点から
毎時間のつながりがわかるよう
難しい所が速くならないよう，ペース配分を
進み方が速すぎる

a) 特に多い意見

＜視聴覚機器＞
パワーポイントやOHPの切り替えは速過ぎないよう
スライドやOHPだけではなく，板書もして
OHPやパワーポイントのハンドアウトを配布して
手書きのOHPは見にくい
ホワイトボードでの赤ペンの字は見にくい
ホワイトボードは大きな字で
ホワイトボードは大きな部屋では使用しないで

b) 深刻な意見

＜教師のやる気＞
教科書を板書しているだけの授業
板書をノートに写すだけの授業

＜学生への態度や授業中の言葉遣い＞
学生によって態度が違うのは不公平
私語が多い
学生を馬鹿にしたような呼び方をしないで
汚い言葉を使わないで

b) 深刻な意見

＜授業の準備・計画＞
何をどう説明するか，前もって段取りを
教える側にも予習は必要
計画的に授業を進めて
思いつきや行き当たりばったりで授業しないで
話の脱線がひどい
思い出話ばかりしないで

b) 深刻な意見

＜学生の理解への配慮＞
学生の理解度を把握すべき
学生の様子を見ながら進めて
先生一人で授業をしないで
論理的にわかりやすく話して
マイクが不調で聴き取りにくのに構わず話し続けないで

b) 深刻な意見

＜課題と評価＞
課題が曖昧でわかりにくい
採点を返却してもらわないと改善のしようがない
テスト中に話をしないで

＜教員間の調整＞
同じ科目なのに教員間で教える内容に差がある
先生によってやり方やレベルが大きく違う
クラスによって差がありすぎた

c) 好評な授業への意見

＜熱意＞
資料は毎回詳しく，先生の情熱が伝わった
難しかったけど，わかりやすい説明で，よく理解できた
質問に行ったときも，非常に熱心に教えていただけた
とても熱意の伝わる授業だった

＜こまめな課題・評価＞
毎回のテストによって授業の重点がわかった
レポートが数回あり，授業内容を振り返ることができた
レポート課題を通してたくさん考えることができた

c) 好評な授業への意見

＜周到な準備・組立て・資料＞
体系的に授業が進められたので，理解しやすかった
重要な事例ばかりで，無駄のない有意義な授業だった
資料がたくさんあって，深く理解していく上で役立った
毎回レジュメがあったので，全体像がつかみやすかった
プリントのまとめ方が分かりやすかった
説明資料の書き込み形式が良かった
パワーポイントをメールで送っていただき，理解に役立った

c) 好評な授業への意見

＜理解しやすさと興味深さ＞
むやみに難しい用語を使わず，実例に即した授業で，興味が持てた
取り上げられる事例がわかりやすく，理解の助けになった
知らないことがたくさんあって，興味深かった
いいペースで，飽きることがなかった
話し方がうまくて，興味を持つことができた
理解しやすいように工夫され，役に立った
自分の頭で考えさせられることで，理解が深まった
今まで受けた授業の中で最も有意義で考えさせられる授業だった
今問題になっている事を適切に採り上げ，わかりやすかった

c) 好評な授業への意見

＜コミュニケーション＞
毎回，質問や感想に対して，先生がコメントを書いてくださるのが嬉しかった
質問や感想などを毎回書いて出せるのが良かった
些細な質問でも丁寧に答えてもらえ，質問しやすかった
他の授業に比べ，双方向が実現されていた
少人数で意見交換ができる環境だった
グループワークが取り入れられ，他の人の考えを聴き，考えることができた
レジュメの作り方や発表の仕方の勉強になった
いつも学生に気を遣ってくださり，気持ちよく授業が受けられた
私語を注意してくださり，良い環境で授業を受けることができた

c) 好評な授業への意見

＜視聴覚機器＞
図や資料を多く使って，視覚的にも理解しやすい授業だった
OHPで実物を見ることができて，講義内容を身近に感じることができた
ビデオ等，授業をわかりやすくする工夫が良かった
ビデオが興味や理解を深めるのに有効だった
プロジェクターでの説明が分かりやすかった
スクリーンの使用が良かった

3-2.「ARCS」モデルから見る要因

学習意欲を高めるための「ARCS」モデル（Keller, J. M., 2010）

A：Attention（注意）
R：Relevance（関連性）
C：Confidence（自信）
S：Satisfaction（満足感）

ARCSモデル　A：Attention（注意）

①知覚的喚起
　概念間の手順や関係をフローチャート・絵コンテ・略図・漫画など目に見える方法で示す，強いアイコンタクトをとり熱意を表わす，等
②探求心の喚起
　トピックを問題含みに質問する，矛盾を感じさせる，未解決の問題を説明する，等
③変化性
　説明方法に多様性を持たせる（口頭，板書，スライドなど），内容の提示と回答を求める事象との間に多様性を持たせる（質問，練習，パズルなど），等

ARCSモデル　R：Relevance（関連性）

①目的志向性
　獲得できる知識・技能が学習者のゴールに関連していることを説明する，ゴールに関連した事例や課題を用いる，獲得した概念やスキルを活用させる応用問題をさせる，等
②興味・動機との一致
　個人ごとの達成機会とグループによる協同作業を組み合わせる，目的達成のロールモデルを提示する，等
③親しみやすさ
　三人称や人類全般に言及する文章より人称代名詞や人々の名前の使用を含んだ文章を用いる，学習者にとって身近な場面から具体的に事例をあげる，学習者の名前を覚え・呼ぶ，等

ARCSモデル　C：Confidence（自信）

①学習要件
　学習目標（行動目標）の提示・自己決定，最終レポートの基準や例の提示，等
②成功の機会
　学習者に活動（簡単なものから難しいものへ）させ成功を支援する，成功のフィードバックを与える，等
③個人的なコントロール
　学習内容・順序や評価方法等を選択させる，学習環境を選択させたり自ら作らせたりする，成功にかかる個人の努力を認める，等

ARCSモデル　S：Satisfaction（満足感）

①内発的な強化
　新たに獲得した知識技能を使用する機会を与える，タスクを習得した学習者にまだ達成していない学習者を助ける機会を与える，等
②外発的な報酬
　賞賛の言葉，個人的な注目（脅威・監視であってはならない），成果が見えるように提示させる，等
③公平感
　学習内容や要求水準等に関して，日常授業と最終テストとの間に一貫性を持たせる，等

3-2.「ARCS」モデルから見る要因：Attention（注意）

①知覚的喚起
・図解で示されないので理解しにくい。
・アイコンタクトがないので自分事と思わない。
・他に気になることがある

②探求心の喚起
・ただ知識が並べられるだけで思考する機会がなく受け身になる。
・所詮は「教員が知っている」から待っていれば答えが与えられると思う。

③変化性
・授業の展開が単調で退屈、眠くなる。

3-2.「ARCS」モデルから見る要因：Relevance（関連性）

①目的志向性
・授業内容や活動が何に役立つのか、どのように活かすことができるのかがわからない。（専門分野、キャリア形成、生活世界等）

②興味・動機との一致
・教員が頭に描く学生の実態・ニーズと自分のそれとが異なる。
・そもそも興味がない。反感を持っている。

③親しみやすさ
・身近な・具体的な話がなく、抽象的な話に終始するので、理解が困難となる。

3-2.「ARCS」モデルから見る要因：Confidence（自信）

①学習要件
・学習の目標や内容の見通しが示されず不安になる。
・学習の目標や内容の見通しを示されても、目が経てば／活動自体に意識を持つことで忘れてしまう。

②成功の機会
・これまで成功体験が少なく、「難しい・できない」とあきらめている。
・「わからない・できない」ことが恥ずかしくて学習に積極的に取り組めない。
・獲得した知識・技能による成功体験を味わう機会がない。

③個人的なコントロール
・教職員の指示に学生が従うだけで、「やらされている」感覚を強く持ってしまう機会が多い。
・学習にかかる環境や内容の要求に教育者側が応えてくれない。

3-2.「ARCS」モデルから見る要因：Satisfaction（満足感）

①内発的な強化
・暗記ばかりでつまらない。
・理解できていない学生を対象にした授業展開のため、理解できている学生にとってはつまらない。

②外発的な報酬
・批判ばかりで賞賛が得られない。
・浮いてしまうのではないかと周りの視線が気になる。
・「満足できる」活動が身近にある（サークル、アルバイト等）。

③公平感
・かつて言っていたことと異なる授業日程・内容や評価方法を行う。
・私語や遅刻に対する対応が日によって、人によって異なる。

ここで・・・

グループディスカッション（1）を行います。

テーマ：
（青山学院大学の）
「学生の主体性（能動性）」「学生の学習意欲」に関して，
どのような問題状況が見られるか。
なぜ，主体性（能動性）・意欲が低いのか

→本日知った内容やこれまでの経験から考察してみる。

4. グループディスカッション（1）

・4～6名で1グループを形成。身体が向き合うように座る。

・タイムスケジュール
（1）「学生は，なぜ主体性が低い・学習意欲が低いのか」についての意見交換　15分

※ どなたか1人，グループの議論を記録してください。

5. 授業における学習意欲向上のための対応

5-1. 学生の主体的学習を意識した授業計画
5-2. 学生の主体性や学習意欲を向上させる授業事例

5-1. 学生の主体的学習を意識した授業計画

（1）シラバスの構造
◇授業名
◇授業担当者名，開講日時，対象学年等
◇学習目標・到達目標
◇講義概要
◇授業計画
◇評価方法
◇教科書，参考書

5-1. 学生の主体的学習を意識した授業計画

（2）「学習」を軸にしたシラバス
・読者は「学生」。学生が読んで次のことがわかる記述が大切。
・何を学ぶのか，どのような知識技能・能力が身につくのか
・どのような学習活動をおこなう必要があるのか（聞く，書く，調べる，議論する，体験する等）
・どのような知識技能・能力が評価の対象となるのか
・成績評価の対象となる活動（試験，レポート等）に，いつ頃，どのように備えればいいか
・教科書等にかかる費用はどの程度か　など
・学生が重視する項目は，
・成績評価にかかる内容と水準，方法（「評価方法」）
・学習内容，学習形態（「講義概要」「授業計画」）

5-2. 学生の主体性や学習意欲を向上させる授業事例

◆科目名
・「保育課程総論」
◆カリキュラム上の位置づけ
・幼稚園教員免許必修科目，保育士資格選択必修科目
講義形式
◆受講者
▪2年生（某大学短期大学部）。60名×2～3クラス
◆授業構造
・確認テスト10分，講義60分，演習20分

「保育課程総論」授業目標

保育課程（教育課程）の意義および保育内容の構造などを学び，保育課程の立案・作成ができるようになる

・保育課程の意義を理解し，説明する
・保育課程の構造を理解し，説明する
・保育課程を立案・作成する

授業内容

保育課程の概要について学ぶ
長期指導計画と短期指導計画の概要について学ぶ
幼稚園における教育課程の意義やあり方について学ぶ
保育所における保育計画の意義やあり方について学ぶ
実践編1：保育所0～2歳児に関する保育計画について学ぶ
⋮

学習活動

「講義＋テスト」では，学生は受け身になる
（「注意」「満足」が欠如する）
→ テキストの内容（獲得知識）を活用するワークを導入する
→ しかし，ワークに割く時間分のテキスト内容を説明できない
→授業時間外でテキストを読んできてもらう（予習）

・授業時間外学習での読書，知識習得
・授業時間内での知識習得確認テスト
・授業時間内での学習内容（テキスト・配布資料）の解説，質疑応答
・授業時間内でのワーク（知識の活用）

学習に関する問題点とその理由（1）

◆保育課程・計画（指導案）の構造を「覚える」ことを目標とする
⇔・構造を覚えるだけでは保育実践には活用できない
・構造の深い理解は，保育実践そのもの

理由→「覚える」学習をこれまでずっとおこなってきた
「考える」「保育実践と関連付ける」等の学習に慣れていない
保育実践への関連が見えなく意欲が持てない
➡

学習に関する問題点とその理由（2）

◆単一の価値観（良い保育，良い子ども，良い保育士）で満足する
ex ケンカはダメ，みんな仲良く，おもちゃを順番に使う，
自律的に考えて保育をする
⇔単一の価値観だけでは，園の方針，保育士の保育観，子どもの実態・成育歴，保護者の実態・子育て観等の多様性に対応できる保育計画が立てられず，保育実践がうまくいかない

理由→教室内の活動では，単一の価値観でも困らない
子育て・保育の「理想」を持っている（理想が強い）
➡

教授・学習活動の工夫

◆ケーススタディの導入による現場実践との接続，多様な子ども理解・保育との接触
◆ワークにおける具体的・多様な状況の想定
・具体的な状況のシミュレーション
・多様な意見（状況）の紹介
◆ワークにおける具体性，多様性の評価
・保育計画を立てる際に，具体的な状況，考えられうる多様な状況が記述されているかどうかを評価する
◆段階的な活動の支援
・「理解」「思考」「表現」に段階を作り，徐々に段階を上げていく

ワークの事例

教育課程における「ねらい」と「内容」を編成していくうえで，ふまえておかなければならないことには，主に次のような観点があったことと思います。

①子どもの実態（生活経験，発達の過程など）
②保護者の実態（家庭環境，就業形態，保護者の願いなど）
③地域の実態（自然環境，土地の文化や気候，地域の特徴など）
④園の実態（園自体の規模・設備・自然環境・人的配置や構成，クラス編成など）

では，これらの観点をふまえて，具体的に「ねらい」と「内容」を作成してみてください。

それぞれの観点に関して，その具体的な事例を自分で適当に想定し，それを踏まえた保育計画（月案）のねらいと内容（の一部）を作成してみましょう。

例：①子どもたち（2歳児6名）には活発に走り回るようになってきた子が多い。春になり飛び始めた蝶々に興味を持ち追いかけたり絵本の写真を見たりするようになってきた。
②車での移動や，ゲームなど室内での遊びが多く，身体をダイナミックに使う楽しさや自然環境に親しむ機会はあまりないようである。両親共働きで核家族であり，平日はもちろん，休日もあまり外で自然の中で身体を動かしながら過ごすことは少ない家庭が多い。
③歩いて20分ほど行ったところに大きな公園があり，そこにも草木や虫がたくさん存在している。現在，5月であり，季節が良く，外で遊ぶにはもってこいの時期である。しかし，公園までは交通量が多い道路を行かなければならない。
④大きな公園に2歳児6名を連れていくには人手が足りず，安全面でまだ不安がある。一方，園には広い庭があり，草木が生え，蝶々やバッタなどの虫がたくさんいる。虫とり網は年少用の小さなものから年長用の大きなものまで揃っている。
→ねらい：虫を捕る喜びを味わう，虫や草木の存在を知りそれらへの親しみを持つ，身体を存分に動かす楽しさを味わう。
内容：好きな遊びの時間に園庭で虫とりを新たに始める。一斉保育の時間に，虫ニュースをしたり，虫とりかけっこをしたりする。

段階をふんだ「理解」「思考」「表現」の支援

①聴く・読む→考える→書く
②聴く・読む→考える→書く→教員からの質問・反論
→書き直す
③聴く・読む→考える→書く→他学生の意見に触れる
→書き直す
④聴く・読む→考える→書く→他学生の意見（多様な意見）を想定する→書き直す

その他

別の授業についてですが・・・，
学内外のリソース（学務，図書館，情報ネットワーク等の環境およびスタッフ，学生サポーター等）の活用も有効です。
（本レジュメ「スライド79」参照）

・授業時間外学習にかかる学内リソースの活用・連携
図書館スタッフや学生（上回生）サポーターとの連携による，授業時間外学習の充実

ここで・・・，

グループディスカッション（2）を行います。

テーマ：
グループディスカッション（1）で意見交換した、
「学生は，なぜ主体性が低い・学習意欲が低いのか」
に対する，
「主体性・学習意欲を向上させる工夫」について

6. グループディスカッション（2）

・先ほどと同じグループ。

・タイムスケジュール
（1）「主体性・学習意欲を向上させる工夫」についての意見交換　20分
（2）全体発表　20～30分（5分4～6グループ）
「学生は，なぜ主体性・学習意欲が低いのか」
「主体性・学習意欲を向上させる工夫」
を整理して発表

※ 整理した記録は，後ほど，全グループ分をみなさんにフィードバックしたいと思います。

参考文献

Biggs, J., and Tang, C., Teaching for Quality Learning at University, 3rd edition, Open University Press, McGraw-Hill, 2007.

Johnson,D.W., Johnson,R.T., Smith,K.A. 1991 ACTIVE LEARNING: COOPERATION IN THE COLLEGE CLASSROOM.1/E. Interactive Book Company.（関田一彦監訳 2001『学生参加型の大学授業－協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部.）

葛城浩一「ポーダーフリー大学が直面する教育上の困難－授業中の逸脱行動に着目して－」香川大学教育研究第9号，2012 年，89-103.

Keller, J. M.（鈴木克明訳）『学習意欲をデザインする－ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』北大路書房，2010 年.

Riesman, D.（裏多村和之他訳）『高等教育論：学生消費者主義時代の大学』玉川大学出版部，1986 年.

田中毎実『大学授業論』京都大学高等教育研究開発推進センター編『大学教育学』培風館，2003 年，21-38 頁.

柳井晴夫，椎名久美子，石井秀宗「大学生の学習意欲等に関する調査研究－国公私立大学学生 万人の調査結果について－」大学入試研究ジャーナル，14，1-14，2004 年.

山田浩之「ポーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」広島大学大学院教育学研究科紀要第三部第58号，2009年，27-35.

参考資料

本日は取り扱いませんが，
演習型授業における
学生の主体的学習・学習意欲
を育成するための資料です。

cf. 演習型授業での活用事例

「秋からのキョウヨウ教育必勝法」（教養セミナー）

・教養科目，選択科目
・主に1年生（全6学部）が受講
・グループ学習，アクティブ・ラーニングが基盤
・30名程度の受講生（×2クラス）

73

授業目標

・「知りたい」ことを決定する。
・学問活動のおもしろさを味わう。
・学業や大学生活をどのように位置づけ学んでいくのか，大学教育を自らにとってどのように生かしていくのかという能動的な大学生活について考える。
・他の学生との議論をとおして，多様な価値観・生き方に触れ，自らの価値観・生き方を省察する。
・主体性，責任性，批判的思考，リーダーシップ，問題解決力，自己決定力，他者への気づきの力などを身につける。
・大学での学びのスタイルを作り出す。

74

授業内容・学習活動

・自由なテーマで知りたいことを探究していく。
・授業時間外で個人探究を進め，授業時間内ではそれぞれの探究成果を持ち寄り，学生同士で意見交換を行う。
・中間期，最終期に全体プレゼンテーションを行う。
・それに際して，文献・テレビ・インターネット・実体験等さまざまなメディアから知識・情報を収集し，それを批判的に考察し議論をおこなっていく。

75

スケジュール

10/3	オリエンテーション，探究テーマ決定
10/10	探究計画作成・修正，探究テーマ修正
10/17	探究成果（一部）発表，探究テーマ修正
10/24	探究成果（一部）発表，探究テーマ修正
10/31	休講
11/7 〜 12/12	探究成果（一部）発表， 探究のブラッシュアップ
12/19	探究のまとめ，（一部，最終探究発表会）
12月末	最終探究成果発表会

個人面談

76

成績評価

成績評価基準：以下の観点について評価
・探究がどのくらい進捗したか
・探究成果はどの程度か
・プレゼンテーションがいかにうまくできるか
・レポートがいかに質の高いものとなっているか

方法：以下のものを評価の対象とする
・最終発表（プレゼンテーション）
・半年間の探究をまとめた最終探究レポート

77

成績評価

「内容面」（10点満点）と「方法面」（10点満点）の合計点

「内容面」：内容の独創性，
課題の意義，
データ・主張の正確性，
がんばり度　　など

「方法面」：発表方法のメッセージ性・インパクト，
論理性（要点の整理や分かりやすい構成など），
表現力（視線，表情，ジェスチャー，声の大きさ，速さなど）
タイムマネジメント　　など

78

学習に関する問題点とその理由

◆活動の自己目的化
・「何のために」「何を学んだのか」を問うことを忘れる
・活動的にはなるが学習が深まらない
・「良い成績をとるため」に化すことも
→活動することが楽しい，活動がうまく進まない

◆学習目標の下方修正
・学習目標の自己決定と困難な課題からの逃避
・探究がうまく進まないことによる，目標基準の低い設定
→時間がない，他の活動（他の授業課題，サークル，アルバイト等）が忙しい、本授業の優先順位が低い

79

教授・学習活動の工夫

・学生同士の相互研鑽
授業内での学生同士の相互発表・意見交換を行わせる。
・個人面談の実施
探究計画書をもとにした探究進捗状況の確認と，つまずきに対するアドバイスを行う。
・授業時間外学習にかかる学内リソースの活用・連携
図書館スタッフや学生（上回生）サポーターとの連携による，授業時間外学習の充実
・学習成果の明示化
探究活動を通じて身に付く能力等を提示する。
事前に評価基準を提示する。
より良い探究のヒントを提示する。

80

教授・学習活動の工夫

・「やりたいこと」「興味のあること」との連関
個人面談，個別相談を行い，常に意識を持たせる
・タイムマネジメントの徹底
探究計画書を作成させる
計画書の項目：・探究テーマ
・探究の目的・背景
・探究方法，探究スケジュール
・ビックアップした先行研究
・探究成果の視覚化
探究計画書に「探究構想・章構成」の欄を追加し，設定した各章に探究結果を記載していくことが，最終探究レポートになっていくことを実感させる

81

cf. 学習成果の明示化

(1) 身に付く能力等を提示する
→学習目標，成長への見通しを常に意識してもらう。

（→次のスライド参照）

82

参照スライド

何をするの？

「知りたいこと」「やりたいこと」をとことん探究する

83

参照スライド

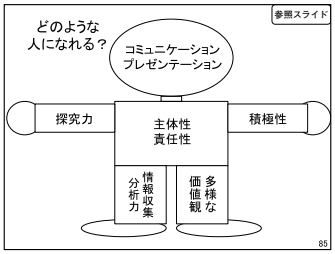
どのような力がつく？

(1)「知りたいこと」「やりたいこと」が見つかる
(2)「知りたいこと」「やりたいこと」を知れる，伝える
(3)学問活動・探究活動のおもしろさを味わう
(4)今後の学業や大学生活をどのように位置づけ学んでいくのかについて考える
(5)卒業後の生活（就職・就労，社会・文化生活等）に活かせる能力が身につく

84

参照スライド

どのような人になれる？



85

参照スライド

資料・データ，情報，知識，学問

資料・データ
言語，文字などに代表される記号や符号の系列
情報
人間や社会組織が特定の目的に対し判断を下す・意志決定を行うために評価を加えた（加工した）データ
知識
将来一般的に使われるものとして体系化された情報
学問
多様な立場・目的からの批判的検討に耐えうる，一般性・普遍性が（その時点で）担保された知識

片岡善治・今井賢『情報文化入門』海文堂出版 1994年

86

参照スライド

ジャーナリズムとアカデミズム

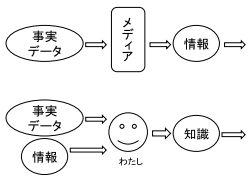
ジャーナリズム	アカデミズム
データをニーズに即して加工し情報にする	データを歴史的・社会的背景からじっくり加工し知識にする
体系化されていない情報を扱う	体系化された知識を扱う
量・速度が重要	一般性・普遍性が重要
信頼性が高くない	信頼性が高い

あくまでも「傾向」

87

参照スライド

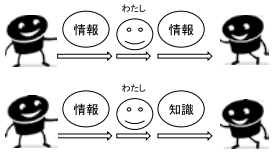
情報と知識



88

参照スライド

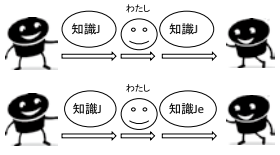
情報の受け売り（横流し）or 情報の検証・知識伝達



89

参照スライド

知識の受け売り（横流し）or 知識の検証・考察・再構成



90

参照スライド

「わたし」が存在しなければ
（単なる情報・知識の横流しなのであれば）・・・
→「わたし」じゃなくていい。
（「別にあなたでなくていい」と判断される）

「わたし」が存在するために・・・
・わたしなりの「問い」をもつ
・「知りたいこと」「探究したいこと」の理由・背景・根源を意識し，そこへ戻り，思考する

91

cf. 学習成果の明示化

(2) 事前に評価基準を提示する
→評価基準を書いた用紙を事前に渡す，中間構想発表・最終成果発表の際に学生同士相互評価をしてもらう

「内容面」：内容の独創性，
課題の意義，
データ・主張の正確性，
がんばり度　　など
「方法面」：発表方法のメッセージ性・インパクト，
論理性（要点の整理や分かりやすい構成など），
表現力（視線，表情，ジェスチャー，声の大きさ，速さなど）
タイムマネジメント　　など

92

cf. 学習成果の明示化

(3)より良い探究のヒントを提示する
→・どのような参照情報・知識が質の高いものなのか
・どのような情報・知識源を活用すれば良いのか

（→次のスライド参照）

93

参照スライド

先行研究のピックアップに際して

・関心ある探究テーマに関する「先行研究」（これまで同じ・似たような研究成果・データを示した人・文献等があるはず）を必ずリサーチしてください。
・リサーチの対象は，本，新聞，報告書，雑誌（論文含む），ウェブサイト，ニュースなど。
・図書館で検索する，インターネットで検索する，その筋の専門家（であろう人）に聞く，など，積極的に。
・情報源に対して必要な構え：
「本当に信頼に足る情報・データなのか」
「根拠がしっかりと示された考察か」
「誰がどのような立場で示したものなのか」

94

参照スライド

先行研究：お薦め検索サイト

＜山形大学附属図書館のHPからのアクセス＞
・山形大学OPAC（主に，本，雑誌）
・山形県公立図書館横断検索（主に，本）
・統合検索 『EHIS』（主に，雑誌）
・Ciniii（主に，雑誌）
・聞蔵IIビジュアル（主に，新聞）

＜その他，一般的な検索サイト＞
・Amazon（主に，本）
・Google, Yahoo（主に，一般的な情報）

95

4. 授業改善のための学生アンケート

本学では、2003年度より、授業内容・方法に関する学生へのアンケート調査「授業改善のための学生アンケート」（以下、本アンケートと略）を全学的に実施している。全学FD委員会の発足に伴い、2009年度からは全学FD委員会が主催となり、本アンケートを実施している。

【実施目的及び実施概要】

○実施目的

「大学が、学生により良い授業を提供し、授業改善を図るための手段」として、学生によるアンケートを実施する。

○実施概要

本アンケートは、全学共通の質問・回答項目にて、演習科目、実験、実習科目等の一部の科目を除いた全ての科目を対象として実施されている。

各学期末の授業時間内、授業担当者の教室からの退席を前提とし、無記名による17問の選択式回答（マークシート）及び2問の自由記述式回答から成るアンケート調査を行う。学科および授業担当者により、独自に質問を追加することが可能となっている。アンケートの回収は受講生の協力によって行われている。

本アンケートの結果は、当該科目の成績評価への影響がない時期に各授業担当者へ報告される他、一定の集計を経て全教職員および学生に公表される。その際、学部によっては科目単位での結果公表を実施している。

※本アンケートの集計結果は、本学WEBサイト（http://www.aoyama.ac.jp/）に掲載している。

「授業改善のための学生アンケート」設問項目

A. 授業への取り組みに関する質問

1. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか。（複数回答可）
   ［回答］授業内容に興味があったから、教員に魅力があったから、空き時間があったから
   単位がとりやすいから、必須科目だから
2. あなたはこの授業にどの程度出席しましたか。
   ［回答］ほとんど出席した、3分の2程度出席した、半分程度出席した、3分の1程度出席した
   ほとんど出席しなかった
3. あなたは授業内容を理解するため積極的に取り組んだと思いますか。［※］
4. 1回の授業につき、あなたは予習・復習を平均してどのくらいしましたか。
   ［回答］3時間以上、2時間、1時間、30分以下、全くしていない

B. 教員（授業内容・教授方法）に関する質問

5. この授業は「講義内容」（シラバス）を基本にして授業が行われましたか。［※］
6. この授業の難易度はどうでしたか。
   ［回答］とても難しい、やや難しい、適切、やや易しい、とても易しい
7. この授業の進行速度は適切でしたか。
   ［回答］速すぎた、やや速かった、適切、やや遅かった、遅すぎた
8. 教員の説明の仕方は分かりやすいものでしたか。［※］
9. 教科書や配布資料は授業内容を理解するうえで効果的でしたか。
   ［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
   この授業では教科書・配布資料を使用しなかった
10. 黒板やプロジェクター等の使い方は効果的でしたか。
    ［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
    この授業では黒板・プロジェクター等を使用しなかった
11. この授業に対する担当教員の熱意が感じられましたか。［※］
12. 授業時間内外における質問への対応は適切でしたか。［※］
13. 補佐教員（助手、TA）のサポートは適切でしたか。
    ［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない
    この授業には補佐教員がいなかった

C. 授業の成果に関する質問

14. あなたは、この授業の開講時に示された到達目標を十分に達成したと思いますか。［※］
15. この授業の内容は興味深いものでしたか。［※］
16. この授業の総合評価を5段階で評価してください。
    ［回答］とてもよい、よい、どちらともいえない、悪い、とても悪い
17. この授業を履修して、自分のためになったことは何ですか。（複数回答可）
    ［回答］新しい知識・技能が身に付いた、新しいものの見方が身に付いた
    関連分野をさらに学びたくなった、問題発見・解決能力が付いた
    人間形成に役立った、コミュニケーション能力が向上した

D. 担当教員による個別質問（13問まで設定可）

E. 自由記述回答

・この授業の良かった点、改善すべき点等について書いてください。
・担当教員による個別質問

※ 設問3・5・8・11・12・14・15は共通の回答
［回答］強くそう思う、そう思う、どちらともいえない、そう思わない、全くそう思わない

2013年度 「授業改善のための学生アンケート」実施状況

学期	2013年度 前 期									2013年度 後 期								
キャンパス	青山			相模原			合計			青山			相模原			合計		
学部	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率	A 実施対象科目数	B 回収科目数	B/A 実施率
青山スタンダード(専任)	92	85	92.4%	23	18	78.3%	115	103	89.6%	102	89	87.3%	31	26	83.9%	133	115	86.5%
青山スタンダード(非常勤)	305	251	82.3%	92	85	92.4%	397	336	84.6%	366	299	81.7%	83	76	91.6%	449	375	83.5%
全学共通第二部(専任)	2	2	100.0%				2	2	100.0%	6	4	66.7%				6	4	66.7%
全学共通第二部(非常勤)	5	3	60.0%				5	3	60.0%	37	18	48.6%				37	18	48.6%
文学部(専任)	37	31	83.8%				37	31	83.8%	100	83	83.0%				100	83	83.0%
文学部(非常勤)	146	129	88.4%				146	129	88.4%	304	242	79.6%				304	242	79.6%
文学部第二部(専任)	3	3	100.0%				3	3	100.0%	11	4	36.4%				11	4	36.4%
文学部第二部(非常勤)	17	10	58.8%				17	10	58.8%	39	23	59.0%				39	23	59.0%
教育人間科学部(専任)	31	30	96.8%				31	30	96.8%	44	40	90.9%				44	40	90.9%
教育人間科学部(非常勤)	27	15	55.6%				27	15	55.6%	84	73	86.9%				84	73	86.9%
経済学部(専任)	75	68	90.7%				75	68	90.7%	82	71	86.6%				82	71	86.6%
経済学部(非常勤)	21	18	85.7%				21	18	85.7%	111	74	66.7%				111	74	66.7%
法学部(専任)	45	40	88.9%				45	40	88.9%	68	55	80.9%				68	55	80.9%
法学部(非常勤)	4	4	100.0%				4	4	100.0%	112	101	90.2%				112	101	90.2%
経営学部(専任)	89	88	98.9%				89	88	98.9%	92	86	93.5%				92	86	93.5%
経営学部(非常勤)	72	63	87.5%				72	63	87.5%	124	108	87.1%				124	108	87.1%
国際政治経済学部(専任)	96	78	81.3%				96	78	81.3%	86	72	83.7%				86	72	83.7%
国際政治経済学部(非常勤)	139	105	75.5%				139	105	75.5%	138	111	80.4%				138	111	80.4%
総合文化政策学部(専任)	36	30	83.3%				36	30	83.3%	32	24	75.0%				32	24	75.0%
総合文化政策学部(非常勤)	37	29	78.4%				37	29	78.4%	35	25	71.4%				35	25	71.4%
理工学部(専任)				136	127	93.4%	136	127	93.4%				145	131	90.3%	145	131	90.3%
理工学部(非常勤)				52	48	92.3%	52	48	92.3%				84	79	94.0%	84	79	94.0%
社会情報学部(専任)				93	80	86.0%	93	80	86.0%				89	76	85.4%	89	76	85.4%
社会情報学部(非常勤)				40	36	90.0%	40	36	90.0%				45	33	73.3%	45	33	73.3%
教職課程科目(専任)	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%
教職課程科目(非常勤)	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	1	1	100.0%	3	3	100.0%	4	4	100.0%
教職課程科目第二部(専任)	0	0	0.0%				0	0	0.0%	0	0	0.0%				0	0	0.0%
教職課程科目第二部(非常勤)	0	0	0.0%				0	0	0.0%	0	0	0.0%				0	0	0.0%
理工学研究科(専任)				40	33	82.5%	40	33	82.5%				33	24	72.7%	33	24	72.7%
理工学研究科(非常勤)				7	7	100.0%	7	7	100.0%				6	3	50.0%	6	3	50.0%
合計	1,279	1,082	84.6%	483	434	89.9%	1,762	1,516	86.0%	1,974	1,603	81.2%	519	451	86.9%	2,493	2,054	82.4%

5. 学生FDスタッフの活動

学生FDスタッフ活動とは、学生が大学における授業改善のために行う諸活動を指す。本学では2011年度よりFD推進委員会の直下組織として学生FDスタッフの位置づけが確立され、学生の視点で教育の質を改善に取り組んでいる。本学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため、さまざまな活動や企画を通して、学生視点で授業や教育のあり方を追及している。

具体的な活動としては、全学的なしゃべり場や学生ＦＤスタッフと教職員との交流会を学内で開催している。学生・教員・職員の3者が集い、大学の授業改善について意見を交わすことで、学生にとって、また教職員にとって「個々が安心して教育目標に向かって取り組むことのできる環境作り」の実現を目指している。

学外においても、東洋大学、法政大学、立教大学及び本学によって構成される関東圏学生FD連絡会に所属し、積極的に活動している。全国規模で開催される学生FDサミットにも例年参加し、他大学での学生FDスタッフ活動や教育改善への取組から学びを得、その知識と経験を本学のFD活動に活かしている。

○ 2013年度学生FDスタッフ活動一覧

◆しゃべり場企画

名称	開催日時	場所	対象	テーマ	備考
しゃべり場	2013年6月28日(金) 15:05-16:35(4限)	青山キャンパス 238教室	学生 教員 職員	大学の授業ってなんだろう	学生FDスタッフ主催、 FD推進委員会・教育支援課共催
昼休みミニしゃべり場	2013年10月21日(月) ～25日(金)12:30- 13:15昼休み	青山キャンパス 17701、17702、 17703教室	学生 職員	大学生活全般について、自由かつ楽しく気軽に話し合っていきましょう！	学生FDスタッフ主催、 FD推進委員会・教育支援課共催
しゃべり場	2014年1月10日(金) 15:05-16:35(4限)	青山キャンパス 15305教室	学生 教員 職員	青学の英語って…正直どうよ？理想的な英語教育、そして英語の授業やカリキュラムへの要望を中心に、自由かつ楽しく話し合っていきましょう！	学生FDスタッフ主催、 FD推進委員会・教育支援課共催

◆学生FDサミット

名称	開催日時	場所	対象	テーマ	備考
学生FDサミット2013夏	2013年8月24日(土)、 25日(日)	立命館大学 衣笠キャンパス	学生 教員 職員	大学を変える、学生が変える	参加者: 学生FDスタッフ6名 職員1名
学生FDサミット2014春	2014年3月8日(土)、 9日(日)	東洋大学 白山キャンパス	学生 教員 職員	あなたが作る、大学最高大作戦 ～めざせ意識改革～	参加者: 学生FDスタッフ3名 職員2名

◆学生FDスタッフと教職員の交流会

名称	開催日時	場所	対象	テーマ	備考
学生FDスタッフと教職員の交流会	2013年12月16日(月) 16:50-18:20	青山キャンパス 第12会議室	学生FDスタッフ、全学FD委員(教職員)	・本学の教育 (英語教育)について ・教養科目の重要性について ・マスコットキャラクター 「FDEago」の活用について ・図書館について ・本学のAV機器設備について ・その他	参加者: 学生FDスタッフ7名、 教員5名、職員3名

○ しゃべり場企画

・全学しゃべり場（2013年6月28日 4限）

学生FDスタッフ主催の全学しゃべり場が、6月28日（金）4限（15:05-16:35）、238教室において開催されました。

学生FDスタッフとはFD推進委員会の下で活動する学生団体であり、本学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため、さまざまな活動・企画を通して学生視点で授業や教育のあり方を考えています。今回のしゃべり場では新入生の参加も踏まえ、大学に入学して感じたことを気軽に話し合える場を目指した「大学の授業ってなんだろう」というテーマの下、各種議論が展開されました。

学生、教員、職員の3者が集った、全学しゃべり場

グループに分かれ、それぞれが「大学の授業」とは何なのか、60分間にわたり意見交換を行いました。普段の授業に関する疑問や悩み、授業に対して感じること、より良い授業をつくり上げていくために必要なこと等、率直な議論が展開されました。学生だけの議論では気付けなかった教員の視点からの意見を聞き、学生からの疑問に職員が答える。授業を構成する学生・教員・職員の3者が集まったからこそ展開できる有益な話し合いが行われました。

グループに分かれ、各々議論を交える

意見交換後は、各グループが話し合いの結果を発表し、質疑応答の時間も設けられました。他グループの異なる視点での議論結果を聞くことで、それぞれ大学の授業について考察を深めたようです。また、発表された意見は大学へ提出され、授業改善に役立てられます。

各グループによる発表と質疑応答

学部や学年を越えた学生、そして教員・職員の3者が集まる、貴重な意見交換の場となりました。

・学生FDスタッフ主催　昼休みミニしゃべり場開催（2013年10月21日～ 25日 昼休み）

学生FDスタッフ主催の昼休みミニしゃべり場が、10月21日（月）～ 25日（金）の昼休みに連日開催されました。

学生FDスタッフとはFD推進委員会の下で活動する学生団体であり、本学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため､さまざまな活動･企画を通して学生視点で授業や教育のあり方を考えています。今回のミニしゃべり場は｢大学生活全般」について、普段生活している中で疑問に思うことや感じていることを気軽に話せる場をめざして開催されました。

はじめて開催された昼休みミニしゃべり場

昼休みという短い時間ながらも、昼食をとりながら、それぞれが日頃思っている様々な事柄について率直な意見交換が展開されました。

昼食をとりながら、各々意見を交わす

今回のミニしゃべり場は学部や学年を越えた学生が集まる、貴重な意見交換の場となりました。提案された意見は大学へ提出され、授業改善に役立てられます。

・全学しゃべり場（2014年1月10日 4限）

学生FDスタッフ主催の全学しゃべり場が、1月10日（金）4限（15:05-16:35）、15305教室において開催されました。

今回のしゃべり場では、本学の英語教育に焦点を当てた「青学の英語って、…正直どうよ？」というテーマの下、議論が展開されました。

学生、教員、職員の三者が集った、全学しゃべり場

グループに分かれ、それぞれが本学の英語教育について日頃思っていることについての意見交換から、より充実した英語教育のための希望や改善策の提案まで、率直な議論が展開されました。学生だけの議論では気付けなかった教員の視点からの意見を聞き、学生からの疑問に職員が答える。授業を構成する学生・教員・職員の3者が集まったからこそ展開できる有益な話し合いが行われました。

グループに分かれ、各々意見を交わす

意見交換後は、各グループが話し合いの結果を発表し、質疑応答の時間も設けられました。他グループの異なる視点での議論結果を聞くことで、それぞれ英語教育について考察を深めたようです。また、発表された意見は大学へ提出され、授業改善に役立てられます。

各グループによる発表と質疑応答

学部や学年を越えた学生、そして教員・職員の3者が集まる、貴重な意見交換の場となりました。

○ 学生FDスタッフと教職員の交流会

日時　2013年12月16日（月）16：50 ～ 18：20

場所　青山キャンパス　第12会議室

出席者

学生FDスタッフ:五十嵐聡子〔文学部比較芸術学科1年〕 松本侑也〔教育人間科学部教育学科3年〕 石口純平〔経済学部経済学科4年〕 田中恭平〔経済学部経済学科1年〕 田中みずき〔法学部法学科4年〕 小山翔太〔法学部法学科3年〕 宮田　潤〔経営学部マーケティング学科2年〕

全学FD委員会委員：長谷川　信〔委員長〕 加藤篤史〔副委員長〕 伊藤　悟　大山和寿　杉谷祐美子　戸田隆也、鳥海貴裕、土居美菜子

意見交換

1. 本学の教育（英語教育）について

学生FDスタッフ（学生）より、下記のような意見があった。

① 入学前には、英語教育はもっと実践的なものを期待していたが、そうではなかった。

② 英語のクラス分けが行われ、クラスによって講義内容が異なっているが、選考基準と配置されたクラスの関連性がよくわからない。

③ ただ英語を読んで訳すだけではなくて、スピーキングやグループディスカッションで英語力を鍛えるといった、授業の形式に最近のトレンドを取り入れるような工夫がほしい。教員に対して「もっとディスカッションを入れてください」とか大学として強制できないのか。

④ ミスマッチを減らすため、講義内容（シラバス）だけではわからない、授業担当者の人柄、展開の仕方等々を知りたい。

全学FD委員会委員（教職員）より、下記のような発言があった。

① 必修科目として全員が受けなければならないので、1～2年生の時にはここまでは身に付けてほしい、という考え方がある。その上で、どれだけ自由度を付けられるのかについては、教員数・教室数といった問題がある。

② 学生参加型授業にしないと、学習効果が上がらないといわれているが、教員がそういった授業をほとんど受けていないので、教員側も試行錯誤している現状がある。また、参加型の授業は教員も準備等大変だが、実は学生も集中力の維持で大変になる。

③ 履修者が確定していない初回講義では、教員の方も履修者に対して様子見のところがある。できれば、電子書籍のような「なか見」機能があればよいと思う。著作権をクリアした上でのオンデマンドなども考えていきたい。

2. 教養科目の重要性について

学生から、青山スタンダード科目の履修方法が難解であり、どう役立っていくのかわからない旨質問があった。大学としては、社会に出た時の各種場面で力になれるように教養科目を配置している。その成果については、学生意識調査の分析結果報告で見ることができるので、ＨＰや冊子を参照してほしい。

3. マスコットキャラクター「FDEago」の活用について

学生から、本来2年間の時限プロジェクトのためのキャラクターであるが、引き続きFD活動のシンボルとして使ってはどうかと提案があり、大学として今後も使用可能かどうか関連部署と検討することとなった。

4. 図書館について

学生から、図書館の閉館時刻及び新館建築計画に対する質問があり、大学からは、開館時間については、青山キャンパスの閉門時間にリンクしているので、これ以上の延長は難しいこと。新しい図書館については、現在検討中であるとの回答があった。

5. 本学のAV機器設備について

「テーマ1.本学の教育について」において話題になった学生参加型の授業に関連して、大学が文科省の補助金を受けて、2014年4月までに青山キャンパスの教室設備を更新するので、学生の視点にもとづくそれらの設備を使用した「アクティブ・ラーニング型授業の提案」をするよう要請があった。

6. その他

大学として、今後も定期的に学生FDスタッフとの交流会を設けていくことを確認した。

以上

6. 教育改善・教育プログラム支援制度

2009年度より学内公募による「教育改善・教育プログラム支援制度」を実施している。

この制度は、本学で行われる教育の質的向上をめざす取組みや新たな教育プログラムの開発を支援することにより、教育の改善・改革を進めることが目的としている。学部・学科や研究科、青山スタンダード教育機構、あるいは学部横断的なグループを単位とし、採択されたプログラムに対して、予算補助を行っている。

【実施目的及び実施概要】

○実施目的

本学の教育現場において実践され、成果を得られるような「教育内容の質的改善」や「教育プログラムの導入・実施」などの取り組みが期待される。また、得られた成果は全学で共有し、発展的に活用するとともに、将来的には学外GPなどへの発展によって、本学の社会的評価が高められるような取り組みが期待される。

○実施概要

［採択件数］　2～4件程度

［予算配分予定額］　総予算500万円程度（申請額）

使途について

※　懇親会等での飲食代としての使用は不可

※　物品購入費としての使用は、できる限り避けること

※　同テーマの助成金との併用は認めない

［「申請グループ・単位」の考え方について］

申請の単位は、学部・学科、研究科など既存の組織に限定せず、学部・学科等を横断したグループでも可能である。

ただし、本制度の目的を「本学で行われる教育の質的向上をめざす取組みや新たな教育プログラムの開発」としているため、学外者は含めない。

［プログラムの採択・予算配分額の審査および実行後の評価］

大学執行部が選定した、約3名程度の他大学の高等教育の専門家等を外部評価委員が、プログラムの採択、予算配分額の審査、及び実施後の評価を執り行う。

［審査の基準］

・本制度の目的にふさわしい企画であること
・実効性をもち目標を達成する可能性があること
・本学の特徴を生かした企画であること
・予算的に妥当な計画であること　等

［採択後の義務］

期限内に定められた報告書を提出すること
成果について学内発表する機会を設けること
ホームページ、刊行物によって成果を公表すること

［スケジュール（2013年度）］

（2013年3月11日（月））	募集開始
2013年5月10日（金）	応募締切
2013年5月下旬～6月上旬	評価委員会による審査・配分額の査定
2013年6月下旬	プログラム代表者へ採用・不採用の連絡、採用の場合は決定配分額の連絡、各プログラムの活動開始
2014年2月28日（金）	活動終了、各プログラムより活動報告書及び決算報告書の提出
2014年3月中～下旬	評価委員会による活動成果の審査及び結果講評
2014年5月28日（水）	各プログラムの成果報告会を開催し、取り組み内容を公表

○ 2013年度　「教育改善・教育プログラム支援制度」　採択事業一覧

代表者氏名	岩井　千明（国際マネジメント研究科）
事業計画テーマ	青山ビジネスゲーム（ABG）の開発
メンバー	森田　充、名児耶　冨美子、粕谷　秀幸
支援金額	2,200,000円
採択理由	何をどこまでやるかが明確であり、実現可能性が非常に高いと思われる。ただし、ゲームシナリオとシステムの全体像を明確にしてほしかった。検証実験まできちんと達成されることを期待する。
結果コメント	システムの設計とそれに対する要件定義は曖昧で無い文章でまとめられており、開発されたシステムの完成度は高い。管理者ガイドも利用者にとってわかりやすくつくられており、高く評価できる。 ビジネスゲームの初期条件を非一元化しつつ単純化を図っている点で利用者（学生と教員）にとって豊かな学びの環境の可能性を示すものとなった。 今後、このビジネスゲームの有用性や教育実践における成果を公表されることを強く期待する。

代表者氏名	野末　俊比古（教育人間科学部教育学科）
事業計画テーマ	学習資源・学習環境としての図書館を活用した授業実践モデルプログラムの開発：「単位の実質化」に向けた授業時間外学習の拡充をめざして
メンバー	小田　光宏、宮澤　淳一（総合文化政策学部）、飯島　泰裕（社会情報学部）
採択理由	他大学と学内の実態調査と合わせて、本質的な問題が明確になるよう分析することを期待する。新しい学部だけでなく、既存の学部における課題も含めて検討してほしい。
支援金額	1,100,000円
結果コメント	代表者の病気療養により、事業中止

代表者氏名	戸辺　義人（理工学部情報テクノロジー学科）
事業計画テーマ	学習者個別進度に基づくIT演習支援
メンバー	鷲見　和彦、大原　剛三、狐崎　直文、斉藤　友彦、白川　真一、長谷川　大
採択理由	これまでの実績を踏まえて、事前準備が非常にできており、目標の達成度は高いと考えられる。ただし、必要最小限のハードウェアの導入に留めて、効果的なアシスタンスができることを期待する。
支援金額	1,300,000円
結果コメント	2010年度から実施してきた研究成果等が非常に効果的に使われている。 それが今年度のプロジェクトの成果並びに外部資金の獲得につながったことは評価できる。 ソフトウェア開発はきちんとなされており、適用テストも行われている。 実授業への導入に向けては、プライバシー等も視野に入れて、記録に残すデータと記録に残さないデータを振り分けたい。特に学生にとって抵抗感のないデータを効果的に保存できることを考えるとなおよい。 ただし、FDとしてのプロジェクトの効果は、他からの資金と明確に切り分けられるとよかった。

○ 2013年度「教育改善・教育プログラム支援制度」採択プログラム活動内容

事業計画テーマ「青山ビジネスゲーム（ABG）の開発」

事業計画

①目的

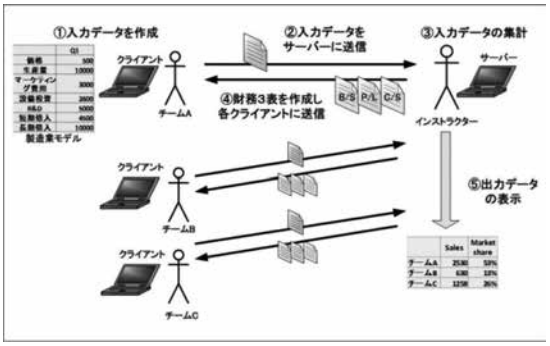
最近の経営学教育では”Learn by Doing”“Action Learning”という学生が実際のビジネスを想定した手法で多角的に経営を学ぶ必要がある。既存のビジネスゲームは一定の効果はあるものの、以下の点で十分でない。

- 学生のレヴェルに合わせたゲームシナリオの自由な構築
- 経営判断の正しさを学生自身が検証するためのシミュレーション機能
- 日本語・英語二か国語に対応し、留学生教育も容易に実施できること

今回、主として専門職大学院（ビジネススクール）向けに以上の機能を備えた、「青山ビジネスゲーム（ABG）」を開発し、学生たちが経営を模擬体験しながら多角的にビジネスを学ぶことができるソフトウェアの開発を行う。また、このソフトウェアはインターネット上で稼働し複数のゲームシナリオを有することができるので、大学学部生むけビジネス教育や国内外の大学との共同授業も可能となる。

②具体的内容

学生にIT企業の製品開発を理解させる目的で設計した、次世代ブックリーダーのメーカーのビジネスデータを用いたゲーム。学生はクライアントPCからデータをサーバーにインターネット経由で送信する。今回の開発はサーバーのソフトウェア部分であり、クライアントやネットワークは学内の既存の設備を利用する。



学生が意思決定するインプット変数としては製品の価格、マーケティング経費、生産数量、研究開発費用、設備投資、長期・短期借入金に限定して、関数モデルにより、Income Statement、Balance Sheet、Cash flow Statementの財務諸表類がアウトプットして出力される。

想定では4半期ごとにこのサイクルを数回繰り返して、

1. 財務諸表の初歩的な分析による会計・財務
2. 各インプット変数とアウトプットの感度分析によるマーケティング・生産計画

を経験的に学習することができる。さらにこのゲームをチームで実施する場合は

3. 経営方針に関する議論による経営戦略の学習
4. チームマネジメントによる経営組織の学習

もあわせて経験することができる。

このような製造業のビジネスモデルに加えて、商品を仕入れて販売する小売業のビジネスモデルも開発する予定である。小売業モデルは比較的理解しやすいために、学部生や初学者にもわかりやすくビジネスを経験することができる。

③期待される効果

経営学は戦略・組織、会計・財務、マーケティング、生産・情報管理など多岐な学問領域を統合的に学ぶ必要があるが、青山ビジネスゲーム（ABG）によって学生はこれらの諸領域がどのようにかかわっているかを全体的に体験・理解することができる。

また、個別の領域では、会計の観点からは、このゲームでは財務諸表が意思決定毎に出力される。通常の講義で用いるような架空の財務諸表やあるいは、実際の企業の財務諸表を分析するのではなく、実際に自分たちの入力した意思決定がどのように財務諸表に反映されるのか興味を持たせ分析させることができる。このため、財務3表のつながりを意識させることが容易になり教育効果も高い。また、ABGは、製造業・小売業などの仮想の企業を学生が主体的に経営するシミュレーション演習が可能である。ABGでは、学生に事前に数期間経営が進んだ状態のデータを提供・分析させ、実際の意思決定につなげることで、能動的な参加のなかで統計分析がどのような場面で使えるのかという理

解を促進することができる。例えば市場全体の需要予測や競合との相対関係で決まる価格・広告費・研究開発費などが及ぼすマーケットシェアの感応度について回帰分析を用いて行うというような使い方ができる。

まず、第一段階として今年度後期専門職大学院授業「ビジネスゲーム基礎」、「統計分析II」でその効果の検証を予定している。

活動報告

今年度私たちはビジネススクール向けに「青山ビジネスゲーム（ABG)」を開発してきた。最近の経営学に関連する教育では従来の教育手法に加えて“Learn by Doing”“Action Learning”という学生が実際のビジネスを想定した手法で多角的に経営を学ぶ必要がある。既存のゲームと比べて今回開発しているABGの特徴は以下の通りである。

- 日本語･英語二か国語に対応し、ビジネスパーソン、留学生や学部生教育など異なる利用者を想定
- システム障害に強く過去ゲームの再利用など多様な用途に対応できる堅牢なシステムの構築
- 経営履歴データを事前に提供する実務に即したゲームシナリオの実現

本報告では以上3点を中心にABGの特徴について述べる。

1. ABGゲームモデルの概要

1.1 ABGシナリオ

ABGは製造業および小売業モデルをシミュレートしたフレームゲームである。

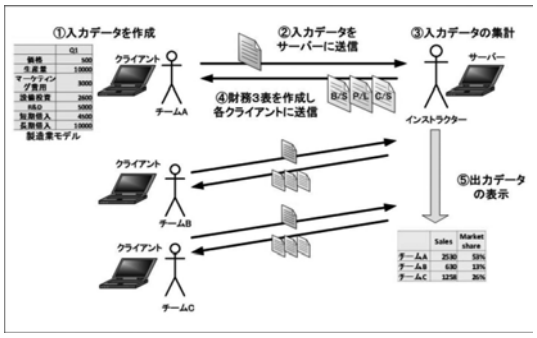


図1　入力データと出力データの関係

図1に示すように、学生などゲーム利用者は①意思決定した製品の価格・マーケティング経費・生産数量・研究開発費用・設備投資・長期/短期借入金などの入力データを作成し、②クライアントPCからサーバにインターネット経由で送信する。一方、インストラクターは、③全クライアントPCのデータをサーバで集計し、④結果として得た数量データに基づいた貸借対照表・損益計算書･キャッシュフロー計算書（以下､財務諸表）などの出力データを各クライアントPCに送信するとともに、⑤チーム別の成績を表示する。

図2・図3は出力データとして表示される英文・和文の財務諸表を示している。これらの財務諸表は以下の3つの方針に基づいて作成されている。これらの財務諸表は会計期間（以下、期）を進行させるにつれて更

図2　英文財務諸表

図3　和文財務諸表

新されるが、ゲーム利用者はいつでも任意の期を参照することができる。

1.2 ABGで学ぶ学生への配慮

1.2.1 学部生や初学者への配慮

今回のゲームは主として専門職大学院（ビジネススクール）向けに開発されたものではあるが、会計・経営を学ぶ学部の学生でも読みやすい簡素な財務諸表を用意した。また、入力変数（販売価格・仕入数量・マーケティング費など）と出力変数（実績販売数量など）を併記することにより自分たちの意思決定がどのように経営成績に反映されるのかを初学者に理解しやすい形で提供している。

1.2.2 留学生への配慮

日本語または英語を苦手とする留学生がビジネスゲームの内容をきちんと理解することを目的として、英文と和文の財務諸表で用いる勘定科目名は、これらの表記の間に矛盾が生じないような名称を用いている。これにより、国内外の大学の学生との共同授業を行うことも可能としている。

1.2.3 ビジネスパーソンへの配慮

和文財務諸表の会計用語の表記は、ゲームのターゲットである専門職大学院の学生、すなわち、一般のビジネスパーソンが見慣れている有価証券報告書で比較的多く用いられている名称を使用している。

2 ABGシステムの概要

2.1 ABGシステムのユーザロール

ABGシステムでは、3種類のユーザロール（教員、学生、管理者）を定義している、それぞれのロールに対する機能要件を以下に示す。

（教員ロール）ゲームの新規作成、復元、進行管理、削除など、ゲームの実行管理を迅速に行うことができること。特に、ゲームを作成する際には過去のゲームデータを容易に再利用できること。

（学生ロール）教員の指示の下で、各期の事業計画を入力し、その結果を財務諸表の形式で受け取ることができること。パソコン以外にもタブレットからシステムにアクセスできることが望ましい。

（管理者ロール）教員用のアカウントの管理および教員に関連するゲームシナリオやデータを管理することができること。

また、これらの機能要件以外に、システムの堅牢性（障害発生時に迅速に復旧ができることなど）やユーザビリティの向上が求められる。

2.2 ABGシステム構成

ABGシステムは、図4に示すように、典型的な3層Webアプリケーションシステムとして構築されている。WebアプリケーションはJava ServletとJava Server Pages（JSP）で実装されており、アプリケーションサーバ（Tomcat）上で動作する。サーバ用管理アプリケーションはコマンドラインのアプリケーションであり、データベースに対するデータのインポート／エクスポート、画面表示言語（日英）の切り替え機能などを提供する。サーバ機能はデータセンターでホスティングされているサーバ上で稼働しており、インターネット経由でアクセスすることができる。また、海外のインターネット環境の悪い地域も想定し、ローカルサーバーを利用した運用も可能である。なお、クライアントはInternet Explorer（9.0以上）、Google Chrome、Firefox、Safariといった各種ブラウザに対応しており、タブレットでの利用も可能となっている。

2.3 堅牢なシステム機能

前述の機能要件・非機能要件に対して実装したABGシステムの堅牢な機能を説明する。

2.3.1 ゲームデータのバックアップ

ABGシステムでは、教員が期を進めると同時に自動的にゲームデータをサーバ側のストレージに保存する。ゲームデータはCSV形式の6種類のファイルから構成されており、バックアップデータはZIP形式に圧縮され、保存対象の期（Q1、Q2 といった期名）と保存した時刻（年月日時分形式）とともに保存される。ABGシステムでは、教員単位でゲームデータを管理するというポリシーから、バックアップデータも教員毎の管理となっており、他の教員のバックアップデータを直接見ることはできない。また、原則すべてのデータを保存する。不要なデータの削除はサーバ管理者が行う。

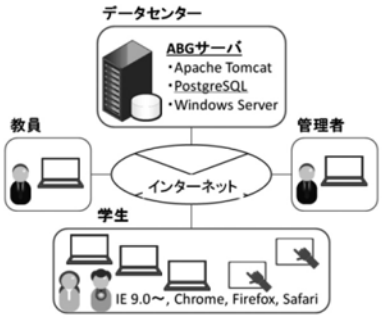


図4　ABGシステム

2.3.2 ゲームデータのリカバリ

サーバの障害等によってゲームを中断せざるを得ない場合、ゲームを途中から再開するには、再開直前の期にゲームの状態を戻す必要がある。このデータを戻す機能としてリカバリ機能が提供されている。リカバリの操作はすべてブラウザから行うことができる。教員は保存されたバックアップデータ群からリカバリしたいゲームデータ（ZIP形式）を選択して、インポートをすれば良い。インポートされたデータが正しい形式のものであれば、システムは読み込んだデータに基づいて自動的に各四半期の計算を実行し、その入力データが定義する最終四半期までゲームの状態を戻す。リカバリの対象となるバックアップデータは任意の期のものを選択することができる。

図5は「ゲームコードG017」のバックアップデータの一覧画面であり、ここでは8期分のデータが保存されていることが示されている。ある四半期（Q1やQ2）に関しては保存日時の異なる複数データが保存されているが、これはリカバリ機能を用いてゲームを同じ期に何度も戻したためである。教員は、この画面で復元したい期に対する保存データを指定し、実行ボタンをクリックする。バックアップデータの形式が正常であればゲームは復元される。

図5　バックアップデータ一覧画面

2.3.3 ゲームデータの再利用

ABGシステムでは、ゲームの新規作成時に過去のゲームデータを再利用することができる。図6に示す通り、教員はログイン後、ゲームの作成画面で新規に作成するか、あるいは過去のゲームデータを再利用するかを選択する。後者の場合、すでに保存されているゲームデータをそのまま利用するか、あるいは予めカスタマイズしたゲームデータをインポートするかのいずれかを選択する。前者の場合、選択できるデータは教員が自ら実施したゲームのデータのみとなる。一方、後者の場合、他の教員のデータを利用することも可能である。他の教員の管理するデータをまずはエクスポートし、必要箇所を修正して、インポートすれば良い。時間制約がある中でゲームを行う場合に、予め途中までゲームを進行させておくことで、短時間でゲームを実施することが可能となる。

図6　再利用ゲーム一覧画面

3. 教育目的での利用の際のABGの機能

3.1 経営履歴データを利用したゲームシナリオ

一般に普及しているビジネスゲームでは、予め数期間経営が行われた状態からビジネスゲームを始めるものは少ない。シナリオとしてはゴーイングコンサーンの前提を考え、予め経営が行われた状態から経営者が交代し、その後、次の経営者に引き継ぐまでを実践することを想定しているゲームも存在する。しかし、実際には一斉にゲームを始め、ゲームの進行とともに手探りの状態から自己や競合の意思決定の動きをもとに分析を行うものが多く、過去の意思決定とその結果を考察した上でゲームを始めるものは少ない。

ゲームの運営上、一斉にゲームを始める方が、学生・教員等インストラクターの負担は少なくてすむ。また、ゲームを未経験の学生に、経営の基礎を教えるうえにおいて、他者の意思決定とその結果を分析するよりは、自分たちの意思決定の結果を分析する方が、参加者の関心が高く、とりあえずゲームを進行させることの方が良いのかもしれない。しかし、ある程度ゲームによる学習に習熟してきた学生を対象にする場合には、経営履歴データからこれまでの経営を振り返って経営目標を立案する、あるいは、需要予測や需要に及ぼす感応度を分析するといった事前の定量的な分析が可能とすることは、教育上の自由度が増加すると考えられる。

途中までゲームが進行した状態で、ゲームを始めることは、これまで開発されているゲームを利用しても実施できないことはない。しかし、参加者のチーム数分、数期間の意思決定をインストラクターが入力しな

ければならず、また、そのようなゲームを別の参加者に対して再利用したい場合にも、再度同じ手順でインストラクターが数期分チーム数の数だけ入力を行う準備をする必要がある。ABGではそのような点を意識して、前節で述べたように意思決定入力データ、および、出力結果のバックアップとリストアをインストラクターの負担を軽減するように設計されている。

また、データのバックアップとリストアが簡単に行えることは、ゴーイングコンサーンを参加者に意識させるという意味で、ある参加者が数期経営を行い、それを引き継ぐ形でさらに別の参加者が経営を行うというスタイルのゲーム運営も可能となるだろう。

途中までゲームが進行した状態で、ゲームを始めることが可能なゲームとして、私たちが、授業で利用している CMU（カーネギーメロン大学）のManagement Gameが挙げられる。Management Gameでは多様なデータが予め提供され、受講者はこれらのデータを予め分析を行うことを要求される。しかし、Management Gameは意思決定項目が多く、中級レベルのゲームを実践していない学生が消化するのは難しいといえる。ABGはその意味で、比較的意思決定項目が少なく、ゲームにおいて定量分析を行うための素養を身につけることが可能な初級と中級をカバーするゲーム設計になっている。

また、ABGは、ケース連動型のフレームゲームとなっており、柔軟に現実のビジネスケースを用いて任意のゲームをインストラクターが開発できるように設計されている。例えば、製造業をモデルとしたシナリオの場合には、図7のような概念モデルのもと、それぞれの製品特性に合わせて、マーケット全体の需要量を設定し、そのマーケットにおける平均的な価格・研究開発費･マーケティング費のもとで、価格、研究開発費、マーケティング費など需要に対する感応度を設定することが可能となる。また、研究開発費などが影響を及ぼす期間の設定もインストラクターが独自に設定することが可能である。

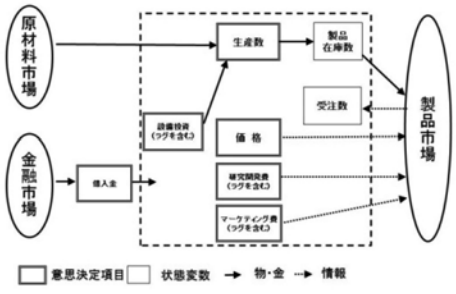


図7　製造業の概念モデル

小売業をモデルとしたシナリオの場合についても、ABGでは図8のような概念モデルのもと、感応度等のパラメータの設定が可能であり、それぞれのケースに応じて事前の経営履歴データを利用した学習を行うことも可能である。

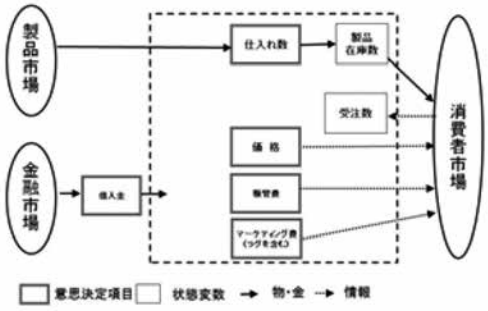


図8　小売業の概念モデル

前述のように経営履歴データを用意するために、一般のビジネスゲームでは参加者のチーム数分、数期間の意思決定をインストラクターが入力しなければならない。この点を改善すべくABGではインストラクターが簡単に過去の経営履歴データを作成することができるような設計をしている。具体的には経営履歴データを作成するには意思決定変数について、それぞれ乱数にもとづくコンピュータープレイヤーの意思決定を数期行わせ、その経営履歴データをエクスポートすることができる。この機能は経営履歴データの生成に役立つだけではなく、シナリオ作成の際の各感応度の調整にも役立つ。その際、統一した分布からすべての意思決定項目の乱数を抽出するとうまく調整が行えない場合があるため、想定した範囲に意思決定の乱数が抽出されるよう、図9のように意思決定項目別に分布のパラメータを設定できるようにしている。

図9　各意思決定項目の分布のパラメータ設定

3.2 経営履歴データを利用したゲームの具体例

次に具体的なABGを利用した統計教育の応用事例を紹介する。シナリオは例えばビール酒造組合加盟の4社（キリン、アサヒ、サッポロ、サントリー（オリオンはシェアが1%程度なので除いた)）を想定し、1回の

ラウンドを四半期ベースで設計している。ビールの需要量はビール酒造組合の月別ビール課税移出数量の実際のデータをもとに四半期毎の数量を求めている。さらにプレイヤーにイメージしやすいように350ml缶ですべて生産されると想定したものである。

価格、広告費、研究開発費については財務データから売上高に対する比率の各社の平均を考慮した上で、ゲームに実装可能なように上述のABGの機能をつかって乱数を生成させ、20期まで経営履歴データを作成しておく。

この価格、広告費、研究開発費のなど意思決定データをプレイヤーに事前に与える。価格、広告費、研究開発費のなどの意思決定項目は需要量に対する各チームのシェアを決定するが、それぞれの感応度を過去の20四半期のデータから回帰分析によって求め、意思決定に利用することを意図している。参加者自身の意思決定判断に関わってくるため能動的で参加型の教育を行うことができる。

事前に参加者に与える経営履歴データによって以下のような分析をもとに意思決定を行うことが可能となる。

① 経営履歴データをもとに市場全体の需要量の予測
② 経営履歴データをもとに需要量のシェアに対する要因となる変数の感応度を求める。
③ 相対価格、相対広告費、研究開発費にもとづく相対品質などの競合他社の戦略についてシナリオをたてる。
④ シナリオにもとづき、自社の価格、広告費、研究開発費などの意思決定項目の戦略をたて、自社のシェアを予測する。
⑤ 自社の予測されたシェアと市場全体の需要量の予測をもとに販売可能数の予測を行い、売上高、営業利益を求める。求められた売上高、営業利益をもとにさらに価格、広告費、研究開発費の意思決定項目の再検討し、最終的に得られた販売可能数の予測結果と製品在庫をもとに生産量の意思決定を行う。

このような活用をするためには、別途分析のための準備講義、および、簡単なビジネスゲームの経験が必要となる。しかしABGでは経営履歴データを利用しない運営も可能であり、また経営履歴データを容易に作成するような中級レベルのゲームも実施できるような機能を備えているといえよう。

活動により得られた成果

経営学は戦略・組織、会計・財務、マーケティング、生産・情報管理など多岐な学問領域を統合的に学ぶ必要があるが、ABGによって学生はこれらの諸領域がどのようにかかわっているかを全体的に体験・理解することが期待できる。

また、個別の領域では、会計の観点からは、このゲームでは財務諸表が意思決定毎に出力される。通常の講義で用いるような架空の財務諸表やあるいは、実際の企業の財務諸表を分析するのではなく、実際に自分たちの入力した意思決定がどのように財務諸表に反映されるのか興味を持たせ分析させることができる。このため、財務3表のつながりを意識させることが容易になり教育効果も高い。

更に、ABGは、製造業・小売業などの仮想の企業を学生が主体的に経営するシミュレーション演習が可能である。ABGでは、学生に事前に数期間経営が進んだ状態のデータを提供・分析させ、実際の意思決定につなげることで、能動的な参加のなかで統計分析がどのような場面で使えるのかという理解を促進することができる。例えば市場全体の需要予測や競合との相対関係で決まる価格・広告費・研究開発費などが及ぼすマーケットシェアの感応度について回帰分析を用いて行うというような使い方ができる。

・教育実施例

ABGの授業時の評価としては、今年度は後期本学専門職大学院授業「ビジネスゲーム基礎」でその効果の検証をおこなった。

2014年1月9日（木）、青山学院大学ビジネススクール（ABS）の「ビジネスゲーム基礎」の受講生10名を対象に、ABGシステムの検証実験を行った。今回は受講生1人が1つの仮想企業（商品はタブレットPC）を経営することとし、コンピュータに予め設定したものも含めて、11社で競う形とした。四半期単位で価格、生産量、広告宣伝費、研究開発費、設備投資額、借入額に関する意思決定を行い、最終的に、累積のROAを最大化することを目的とする。

今回のシナリオでは、資金繰りが重要なポイントであり、現実の会社経営に近いモデルとした。また、通常は3−4名のチームで意思決定を行うが、今回は1人ですべての意思決定を行うため、1四半期を10分間とし、計4四半期（一年）で競った。

講義の冒頭に行ったブリーフィングでゲームの内容

を一通り説明した。その後、学生は、実際の意思決定に進むが、ここではABGシステムで提供されているシミュレーション機能や、損益計算書や貸借対照表などの各種レポート機能が利用された。

図10－図12は今回の検証実験時の様子である。

図10　講義の実施風景（1）

図11　講義の実施風景（2）

図12　講義の実施風景（3）

今回のシナリオはやや厳しい条件設定だったこともあり、最終的に黒字となったのは11社中4社のみであった。短時間でさまざまな指標を見比べながら意思決定を行うことや、設備投資・販売価格の決定のバランス感などは現実の企業経営で起こりうることであり、こうしたことを今回のゲーム体験を通じて学生には理解してもらえたのではないかと思う。

事業計画テーマ「学習者個別進度に基づくIT演習支援」

事業計画

①目的

理工学部情報テクノロジー学科では、実践力の備わった学生を育成するためにプログラミングやコンピュータシステム構築の演習を重視している。そのために、専用の実験室（IT専門実験室）を設備として保有し、多くの演習授業を実施している。本事業は、2010年度「教育改善・教育プログラム支援制度」支援により実施した演習環境の改善事業の後を受けて、さらに教育効果を高めるために、個々の学生の学習進捗状況を可視化して、演習を効果的に実施することを目的とする。

②具体的内容

上述したとおり、当学科ではIT専門実験室での演習に重点を置いている。 90～130名の学生に対して、授業を直接行い教員のほかに、数名～10名程度の複数のアシスタント（助教およびTA）が演習を支援している。通常、演習を進める上で疑問点を有する学生は挙手により、アシスタントを呼び出し、アドバイスをもらう。これでも圧倒的に時間が不足しているため工夫を必要とした。そのため、2010年度の事業では、質問掲示板を構築して、これはこれで一定の効果をもたらした。しかし、相変わらず、演習に時間がかかる学生が多く、特に遅れがちな学生に対して効果が上っていない。

そこで、今年度はさらに学生の演習困難度を定量的に把握し、その状態に応じてアシスタント陣が対応することとする。さらに、授業時間以外に演習をしたい学生向けに、IT専門実験室を使えるようにアシスタントが常駐して相談に乗れるようにし、IT専門実験室に学生証を用いた入退出管理を行うことで、個々の学生の学習状況を把握できるようにする。以上から、本事業は、「学習進度の観測授業時間外学習支援」の2つから成る。

1. 学習進度の観測

演習形式の授業においては、個々の学生が教材に従って自分のペースで学習を進めていく。しかし、各回のテーマには何段階かの到達目標ポイントが設置してある。アシスタントは、学生の質問に応じて、学習を支援する。そうした中にあっても、アシスタントを捕まえることが難しく、学習が遅滞する者も出てくる。

これに対して、2種類の方法で、学生の学習進度・

集中度を把握できるようにする。

⑴個々の学生が、学習進度をより細かくWeb上に入力していく。教材も、細かく進度がわかるように製作する。ここでは、2010年度の事業で構築した「他学生の質問内容をみる」掲示板を活用してよい。

⑵個々の学生の座席にWebカメラを設置し、学習者を撮影する。撮影した画像を解析することにより、学生の集中度を数値として表現し、学生集中度のリストをアシスタントで共有する。これは本学科の卒業研究成果[1]に基づいており、卒業研究の結果を教育に実践するものである。

多くの演習において、10名程度の学生の1グループに対して、1名のアシスタントが学生の援助を形式を踏襲してきた。この学生とアシスタントとの関係は固定的であり、学期期間中15回の演習があった場合、1名のアシスタントは特定の学生集団と接触することとなる。しかし、多くの学生がいる中では、均等に学習指導をすることができずに到達度の遅い学生に目が届かないということが起こりうる。本方法では、個々の学生の学習進度・集中度に基づき、特に学習に支障のある学生に対して、アシスタントが効果的に対応することを狙う。

以上の観測結果は履歴として記録していき、教材全体の改善に役立てる。

2. 授業時間外学習支援

一定のスキルを有する大学院生をIT演習アドバイザとして認定し、IT演習アドバイザがIT専門実験室にて授業時間外の決められた時間帯に常駐し、学生の質問に対応する。学生とのやり取りは、担当教員との間で共有し、学習支援情報を整える。

さらに、IT専門実験室の入退出を管理することで、学生が授業時間外に学習する時間を定量的に把握することができ、教材の構成を考える材料とする。

③期待される効果

本事業により、以下の3つの効果が期待できる。

- 演習に取り残されがちな学生を演習授業を実施する教員が把握することが可能となる
- 特に、蓋然性によらず、公平に学生に接することができる。
- アシスタントの効果的な対応が可能となる。
- 授業時間外での指導により、十分な学習時間が確保される。
- このように、本事業トータルで、IT専門実験室での演習を効果的に進めることができる。

活動報告

［本事業の目的］

理工学部情報テクノロジー学科では、実践力の備わった学生を育成するためにプログラミングやコンピュータシステム構築の演習を重視している。そのために、専用の実験室（IT専門実験室）を設備として保有し、多くの演習授業を実施している。本事業は、2010年度「教育改善・教育プログラム支援制度」支援により実施した演習環境の改善事業の後を受けて、さらに教育効果を高めるために、個々の学生の学習進捗状況を可視化して、演習を効果的に実施することを目的とする。

［本事業の計画］

上述したとおり、当学科ではIT専門実験室での演習に重点を置いている。90 ～ 130名の学生に対して、授業を直接行い教員のほかに、数名～ 10名程度の複数のアシスタント（助教およびTA）が演習を支援している。通常、演習を進める上で疑問点を有する学生は挙手により、アシスタントを呼び出し、アドバイスをもらう。これでも圧倒的に時間が不足しているため工夫を必要とした。そのため、2010年度の事業では、質問掲示板を構築して、これはこれで一定の効果をもたらした。しかし、相変わらず、演習に時間がかかる学生が多く、特に遅れがちな学生に対して効果が上っていない。そこで、今年度は学生の演習困難度を定量的に把握し、その状態に応じてアシスタント陣が対応する仕組みを導入することを試みることとした。

具体的には、演習形式の授業においては、個々の学生が教材に従って自分のペースで学習を進めていく。しかし、各回のテーマには何段階かの到達目標ポイントが設置してある。アシスタントは、学生の質問に応じて、学習を支援する。そうした中にあっても、アシスタントを捕まえることが難しく、学習が遅滞する者も出てくる。そこで、本事業では、

・個々の学生の座席にWebカメラを設置し、学習者を撮影する。
・撮影した画像を解析することにより、学生の集中度を数値として表現し、学生集中度のリストをアシスタントで共有する。

多くの演習において、10名程度の学生の1グループに対して、1名のアシスタントが学生の援助をする形式を踏襲してきた。この学生とアシスタントとの関係は固定的であり、学期期間中15回の演習があった場合、

1名のアシスタントは特定の学生集団と接触することとなる。しかし、多くの学生がいる中では、均等に学習指導をすることができずに到達度の遅い学生に目が届かないということが起こりうる。本方法では、個々の学生の学習進度・集中度に基づき、特に学習に支障のある学生に対して、アシスタントが効果的に対応することを狙う。

さらに、授業時間以外に演習をしたい学生向けに、IT専門実験室を使えるようにアシスタントが常駐して相談に乗れるようにし、IT専門実験室に学生証を用いた入退出管理を行うことで、個々の学生の学習状況を把握できる計画も立案した。しかし、この自動入退出管理については、本事業を進める中でより発展させて、平成25年度文部科学省ICT活用推進事業に「学習者個別進度に基づくIT学習支援環境の構築」として申請し、別事業にて実施することとした。本文部科学省申請は認可され、平成26年2月に実施することとした。この点については、「活動により得られた成果」にて説明する。

以上から、本事業では、集中度観測による個別支援を中心に進めた。

［システム設計］

本システムは、各学生の情報をアップロードするクライアントと、クライアントから情報を集めるサーバ、およびサーバ上で集計された情報を閲覧するビューアクライアントとで構成される。まず、クライアントは、IT専門実験室（図1）の各席に設置されたコンピュータ上にて集中度観測ソフトウェアとして動作させる。

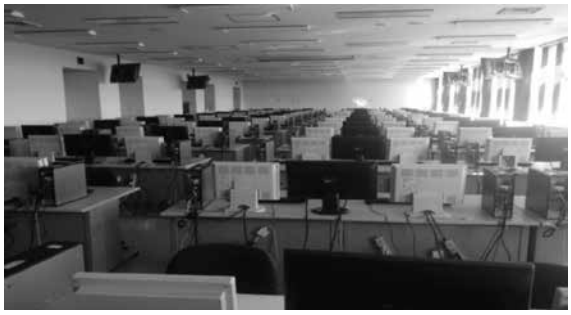


図1　IT専門実験室の様子

クライアントでは、USB接続されたWebカメラを動画として取得し、画像から視線を検出する。視線の動きから集中度を計算し、定期的にサーバに対して集中度情報を送出し続けることとする。

実際のクライアントの処理においては、ネットワークの負荷を軽減させる処置を行う。5秒間の計測間隔期間に取得された画像の時系列から集中度を計算する。

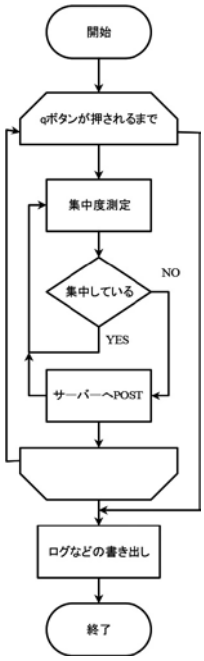


図2　クライアント処理

集中していると判断された場合には、サーバへは送らず、集中していないと判断された場合のみ、サーバへ情報を送出する（図2）。送出する情報には、計算された集中度以外に、各部所、例えば左目や鼻、口などの個別パラメータを含めることとし、授業記録としての価値を持たせる。

図2のqボタンというのは終了を意味し、本ソフトウェアの負荷が授業そのもので動作させるソフトウェアの支障となる場合に、緊急停止できる設計とした。

一方、クライアントから送られた情報は、サーバ上では、リレーショナルデータベースに格納される。学生個別の情報に対して時系列で情報を取り出せるようにするとともに、現在の集中度をWebページ形式で閲覧できる形式に整える。

図3　顔検出

クライアントで集中度を計算する前段の過程で、顔検出を行う。「顔検出」とは、図3のようなデジタル画像から人を自動的に識別し、検出するものである。ライブ画像内の顔と思われる部分を抜き出し、顔面画像

データベースと比較することで識別を行う。顔検出のアルゴリズムは、顔画像から目立つ特徴を抽出することで識別する。例えば、顔のパーツの相対位置や大きさ、目や鼻やほお骨やあごの形を特徴として利用する。こうした特徴を使い、一致する特徴のある画像を検索する。顔検出に成功した後は、視線を検出する。本システムでは、視線検出に工夫を施した。コンピュータに負担を少なくするために、15フレーム/秒で得られる画像に対して、視線を追跡するぎりぎりのフレーム間引きをし、7フレームに1回に対して視線検出をすることにした。残りの6フレームの期間にはCPUアイドルとした。これにより、図4に示すように、CPU処理率を25%程度に抑制することが可能となり、授業で動作させるソフトウェアに支障が起きないようにできた。

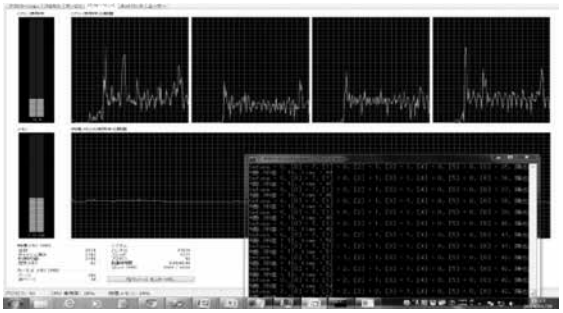


図4　本システムにおけるCPU処理率

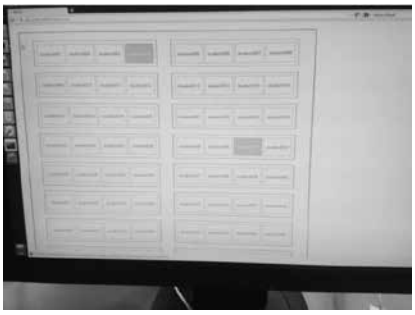


図5　ビューア画面

アシスタントが閲覧するビューア画面では、集中度が欠けていると考えられる座席を表示して、適切なアドバイスができるようにした。図5に設計したビューアの画面を示す。ビューアはWeb画面で設計してあるため、PCだけでなく、携帯電話で閲覧することも可能である。

[実際の授業への適用]

本事業のシステムは、月曜日第4－5時限に開講される「情報総合プログラミング実習Ⅱ」に適用した。実際には、Webカメラを取り付けられることに抵抗感のある学生もおり、承諾をもらった10名に対して本システムを適用した。図6、Webカメラを設置した様子を示す。

図6　Webカメラを設置した様子

集中度の計算を評価するために、各動画に対して人が客観的に評価した集中度、定量化の式によって算出された集中度、フレーム間引きを行わない従来手法によって得られた集中度をそれぞれ折れ線グラフで示したものが図7である。図7に示されるように、特に集中している状態というものが、今回開発したアルゴリズムでよくとらえることができた。

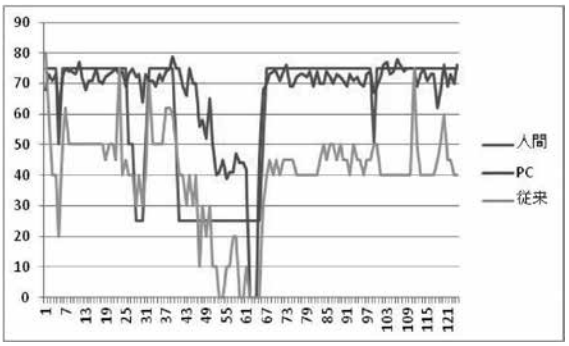


図7　実際に計算された集中度

Webカメラを設置された受講学生からは、

・Webカメラの存在で、逆に集中しなければならないと感じた。

・このように個々の学生をフォローしてくれるのはうれしい。

という意見が出された。しかし、Webカメラ設置に抵抗のある学生もいるので、本事業を全員に適用するにはどうすべきかは、今後の課題となった。

アシスタントからは、

・学生の状態が一目瞭然で、指導に役立てられた。

という意見が出された。

<u>活動により得られた成果</u>

本活動により得られた成果は次の2点である。

(a) 集中度測定により、個別学生のコンピュータ演習の支援をするフィージビリティが得られた。

(b) 平成25年度文部科学省ICT活用推進事業に「学習者個別進度に基づくIT学習支援環境の構築」として申請し、学外資金を引き出すことができた。

(a) については、活動報告に述べたとおりで、コンピュータに負担のかからないクライアントソフトウェアを開発することができたので、平成26年度以降に開講される、「情報総合プログラミング実習Ⅱ」以外に適用できる可能性を示すことができた。

一方 (b) は直接的な成果ではないが、本事業を推進する過程において、学科教員の中で発展系の議論を促し、よりいっそう効果的な教育ができる仕組みの提案につながった。具体的には、図8に示すように、学生の演習状況、学習進度に応じて演習コンテンツを動的に変更するというものである。本FD事業をきっかけに、文部科学省の助成という形となった。

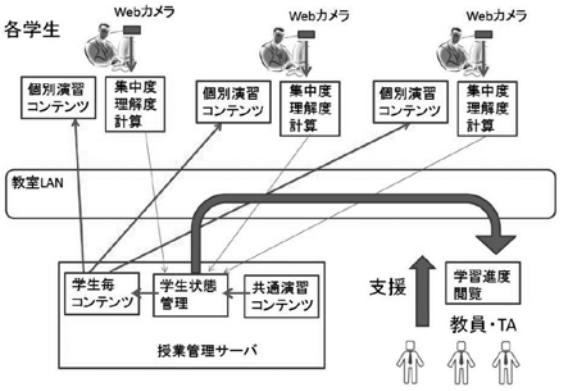


図8　平成25年度文部科学省ICT活用推進事業

以上の2点が具体的な成果として挙げられ、今後より教育効果の高いシステムとして完成させていく予定である。

7. 学生意識調査

【開催経緯】

2010年度より学生の学習に対する期待や姿勢、大学における成長感等に関する調査を全学的に実施している。（2010年度は全学部新入生および経済学部、国際政治経済学部、総合文化政策学部、社会情報学部の2年生）

2013年度も引き続き全学部1～3年生を対象に調査を実施した。また昨年度までは卒業予定の4年生を対象としていた調査を全ての4年生を対象にする「4年生調査」として実施した。

【実施目的及び実施概要】

○実施目的

1年生（4月実施）

（学生にとって）　学生生活の目標設定・学びと進路のつながりを意識するきっかけとする

（大学にとって）　新入生の現状把握。PDCAサイクルの起点のデータとする

2年生（4月実施）

（学生にとって）　学生生活の振り返りをもとに、2年次以降の目標の再設定をするきっかけとする

（大学にとって）　1年間の学生生活の満足度・成長感を把握し、教育改善につなげる

3年生（4月実施）

（学生にとって）　就職活動のための自己分析のツール。結果を元に自己PRと志望動機の作成をする

（大学にとって）　学生の満足度・成長感を把握し、教育改善につなげる

4年生（3月実施）

（大学にとって）　4年間で学生が身につけた力・モチベーションの変化の把握、満足度・成長感を把握し、入学～4年間の総括データとする

○実施概要

［実施方法］

1～3年生は4月、4年生は3月に実施する。

マークシート方式のアンケート調査で、設問内容は学年によって異なり、1～3年生は「基礎学力調査」と「学生生活に関するアンケート」の2部構成。所要時間は約90分。4年生は「学生生活における満足度調査」に関するアンケートで、所要時間は約30～40分。

［実施結果］

アンケート委託業者による回答の集計と分析をおこない、各学生へフィードバックする。その際、前年以前に受検している場合は経年の変化も掲載する。

［集計結果のフィードバック］

1～3年生については、各自へ回答結果と分析結果をまとめた「集計結果シート」を用い、外部講師によるフォローアップ講座（進路指導）を実施している。

また、全実施結果および分析結果を学部教授会にて報告、学部運営の参考としているほか、全教職員対象の報告会を開催し、学院関係者で情報を共有している。

○2013年度　学生意識調査の実施状況

1年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部	708	685	96.8%
教育人間科学部	294	285	96.9%
経済学部	501	479	95.6%
法学部	513	489	95.3%
経営学部	508	484	95.3%
理工学部	587	576	98.1%
国際政治経済学部	294	286	97.3%
総合文化政策学部	264	248	93.9%
社会情報学部	211	207	98.1%
合計	3,880	3,739	96.4%

2年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部	864	700	81.0%
教育人間科学部	333	257	77.2%
経済学部	593	313	52.8%
法学部	594	359	60.4%
経営学部	631	303	48.0%
理工学部	708	462	65.3%
国際政治経済学部	343	204	59.5%
総合文化政策学部	302	191	63.2%
社会情報学部	249	199	79.9%
合計	4,617	2,988	64.7%

3年

学部	学生数(5/1)	受検者数	受検率
文学部	756	566	74.9%
教育人間科学部	348	284	81.6%
経済学部	550	287	52.2%
法学部	522	334	64.0%
経営学部	566	272	48.1%
理工学部	737	478	64.9%
国際政治経済学部	283	144	50.9%
総合文化政策学部	275	115	41.8%
社会情報学部	249	138	55.4%
総計	4,286	2,618	61.1%

4年

学部	学生数(12/1)	受検者数	受検率
文学部	904	685	75.8%
教育人間科学部(※)	372	285	76.6%
経済学部	632	451	71.4%
法学部	565	410	72.6%
経営学部	703	431	61.3%
理工学部	572	421	73.6%
国際政治経済学部	429	243	56.6%
総合文化政策学部	287	204	71.1%
社会情報学部	233	149	63.9%
文学部第二部	120	65	54.2%
経済学部第二部	12	4	33.3%
経営学部第二部	14	2	14.3%
合計	4,843	3,350	69.2%

※ 4年生　文学部教育学科および心理学科は教育人間科学部に含む

8. FDフォーラム

全学FD委員会では、FD活動に関する講演会等の企画を「FDフォーラム」として年1 ～ 2回実施している。

2013年度は計2回開催され、1回目は2012年度「教育改善・教育プログラム支援制度」採択プログラムの成果報告会を実施し、2回目は「学生意識調査」の結果報告会を実施した。

なお、2回目の「学生意識調査」結果報告会については、「青山学院大学FDフォーラム報告書」（2013年12月1日発行）に詳細を掲載している。

○ 2013年度　青山学院大学　FDフォーラム　実施概要

第1回 FDフォーラム「2012年度教育改善・教育プログラム成果報告会」

日時：5月15日（水）14：00 ～ 16：00

場所：第17会議室（青山キャンパス総研ビル10F）

1. 開会挨拶

学長　仙波　憲一

2. 本学のFD活動について

全学FD委員会委員長　副学長　長谷川　信

3. 採択者による成果報告

1）DHORNE, France（文学部フランス文学科　教授）

「フランス語学習のための理解力ストラテジーによる改善プログラム」

2）稲積 宏誠（社会情報学部社会情報学科・教授）

「学生意識調査結果を活用したキャリア支援システムの構築」

4. 質疑応答と意見交換

5. 総括

全学FD委員会委員長　副学長　長谷川　信

第2回 FDフォーラム「青山学院大学の学生意識調査～この4年間の軌跡～」

日時：2013年7月18日（木）　13：00 ～ 15：00

場所：17309教室（青山キャンパス17号館3階）、E101教室（相模原キャンパスE棟1階）

司会：全学FD委員会　副委員長　加藤　篤史（経営学部教授）

1. 開会挨拶

学長　仙波　憲一

2. 学生意識調査の4年間とその成果について

全学FD委員会委員長学務及び学生担当副学長　長谷川　信

3. 成果報告

1)「学生意識調査からみる青山学院大学の学生像」

谷口 雅子様（株式会社ベネッセコーポレーション 大学事業部 東日本営業課　課長）

2)「学生意識調査の活用事例報告」

稲積 宏誠（社会情報学部長）

4. 質疑応答と意見交換

5. 閉会挨拶

副学長　長谷川　信

9. FDEagoプロジェクト

FD活動において、文章やメッセージでの呼びかけだけで、教員に教育の質を向上させるために改善すべき点を認識させ、意識を改革させることは難しく、その効果には限界がある。

そこで、本学のFD活動を推進するためのマスコットキャラクターとして「FDEago」（エフディーゴ）を作成し、2012･2013年度の2年間に期間を限定して、FD活動に関する周知の他、実験的な新しい企画を「FDEagoプロジェクト」として実施することにした。

2013年度は2012年度に引き続き、「Happyくらす作品コンクール」と「FD Tips」の2つの企画を実施した。

また、新たな企画として「Happyくらす作品コンクール」受賞者による座談会も開催された。

【実施経緯】

FD活動において、文章やメッセージの呼びかけだけで、教員に教育の質を向上させるための改善点を認識させ、教員の意識改革を進めることには限界があると思われる。そこで、FD活動に特化したキャラクターを作成し、様々な新企画をキャラクターと共に実行することが2011年7月に提案された。協議の結果、本学のイメージキャラクターである“EAGO”に関連づけた“FDEago”というキャラクターを新たに作成し、2012年5月以降、学内でのFDEagoの周知および各種新企画を“FDEagoプロジェクト”として開始することになった。

【実施目的及び実施概要】

本学のFD活動を推進するためのキャラクターとしてFDEagoを作成し、2012・2013年度の2年間に期間を限定して、活動することにした。また、FD活動に関する新企画を“FDEagoプロジェクト”として実施することになった。FDEagoプロジェクトはFDEagoと同じく2年間に限定した企画になるため、通常では実施しにくい実験的な取り組みも行うことを目標とした。

2013年度のFDEago プロジェクトは、2012年度に引き続きFD活動に関する事柄を標語にして学内周知をおこなう“FD Tip”や、教員へのFD活動の周知をおこなうための掲示板“FD Board”の設置を実施した。

また、学生へよい授業に関する思い出を作品として募集する企画“Happyくらす作品コンクール”も実施し、24件の応募、8件の作品が入選した。入選作品は大学WEBサイト等の媒体へ掲載され、11月には授賞式と受賞者による座談会が開催された。

Happyくらす作品コンクール：実施概要、応募作品一覧、入賞作品集及び座談会記録を掲載
FD Tip：全作品を掲載

○ 2013年度 Happy くらす作品コンクール 実施概要

2013 年５月２９日

青山学院大学　Happy くらす 作品コンクール　2013 募集要項

青山学院大学
全学 FD 委員会

学生のみなさんが青山学院大学でたくさんのことを学び、学生たちの成長を見て教職員も喜びを感じられるような、みんながハッピーになれる学びの場を作っていきたいという思いは、大学に集う全ての人が願っていることだと思います。そんな思いから青山学院大学での授業の思い出について、学生のみなさんに作品の形で表現していただいて、他の学生たちや教職員と広くその思いを共有してほしいと思っています。みなさんの声を聞かせてください。

1. テーマ
「心に残る授業」
青学生のみなさんの講義の思い出、心に響いたクラス、自分を変えた授業、目の覚めた講義、元気の出た授業など、講義を通して得た発見や感動、体験、成長などを作品にして応募してください。

2. 応募資格
青山学院大学の学部生・大学院生（複数名での応募可）

3. 応募テーマ
次の３つのジャンルのいずれかから選んでください。
① 第１ジャンル：　エッセーなど、文章で表現する作品。最大 2000 字。
② 第２ジャンル：　詩、俳句、短歌、川柳など、短い韻文で表現された作品。
③ 第３ジャンル：　漫画（四コマ漫画、ストーリー漫画など）（最大 A４サイズ用紙 10 枚相当。ただし、提出原稿の用紙サイズは自由）。
注）応募作品は未発表のものに限らせていただきます。また、応募作品は他者の権利（著作権、肖像権等）を侵害しないように十分な配慮をしてください。

4. 応募方法
①FD 推進委員会（agufd@aoyamagakuin.jp）にメールを送り、応募用紙を請求してください。
②必要事項を記入して、上記のメールアドレスあてに応募用紙と作品のファイルを添付して提出してください。また、紙媒体での提出を希望する場合には、以下の問い合わせ先に記載されている各キャンパス担当者に直接提出してくださっても結構です。
注）応募作品数に制限はありません。一人で複数の題材による応募も可能です。

5. 公開について
入選した作品は、青山学院大学 FD 推進委員会が発行する FDEago Letter、大学ウェブサイト等 FD 関連活動の情報を提供する媒体において活用させていただきたいと思いますので、ご了解をお願いします。

6. 提出期間
2013 年9月 28 日（土）　必着

7. 選考
選考は大学 FD 推進委員会において厳格に行われます。「大学での講義のよい思い出を伝える、優れた作品になっているか」を主な選考基準とします。

応募作品の中から、ジャンルの区別なく優れたものを選考し、入選作品として下記の賞を授与します。
最優秀賞　　副賞４万円分の図書カード
優秀賞　　副賞２万円分の図書カード
佳作　　副賞５千円分の図書カード
選考結果は 2013 年 10 月末日に大学のウェブサイトで発表するとともに、入選者個人に通知いたします。また、表彰式等の写真につきましては、各種広報媒体に掲載させていただく場合がありますので、予めご了承いただくとともに、ご協力をお願いいたします。

（一部省略）

○ 2013年度 Happy くらす作品コンクール 応募作品一覧

No.	所属	学年	作品ジャンル	作品名	最終結果
1	文学部日本文学科	4	②短い韻文	授業では新たな友と先生と 出会うそれから自分に出会う	
2	国際政治経済学部 国際経済学科	2	②短い韻文	チャイム鳴り増える板書と 減るノート厚い熱意を感じる時間	
3	経営学部経営学科	4	①エッセー	教授へ宛てる手紙	佳作
4	文学部日本文学科	3	②短い韻文	図書館に入り浸ってるそのわけは あの先生のたった一言	
5	〃	〃	②短い韻文	人生に迷った時に聞くだろう このボロボロのルーズリーフに	
6	文学部比較芸術学科	2	①エッセー	科学を恐れるな	優秀
7	国際マネジメント研究科	1 Flex-A	①エッセー	心に残る授業 ～文化と宗教からみるビジネスエシックス～	佳作
8	経営学部経営学科	1	①エッセー	CEOになってみて分かったこと	佳作
9	文学部日本文学科	3	②短い韻文	先生と共に織りなすクラスとが 大学へゆく理由となった	
10	〃	〃	②短い韻文	真剣に向き合われたり向き合ったり 本音ぶつけて深まる理解	
11	〃	〃	②短い韻文	思うこと何でも言い合うこの授業 笑顔広まり知識広がる	佳作
12	文学部日本文学科	3	②短い韻文	先生のたった一言それだけで 新しい世界ひらけた気がした	
13	〃	〃	②短い韻文	たくさんの学びと実りここからは どこまでも世界ひろがってゆく	
14	〃	〃	②短い韻文	友と師とはじめは些細な繋がりも 今は私の一部となった	
15	総合文化政策学研究科 文化創造マネジメント専攻	2	①エッセー		最優秀
16	経営学部経営学科	1	②短い韻文		
17	文学部日本文学科	3	②短い韻文	朝早くチャリを漕ぎ漕ぎキャンパスへ 眠気を飛ばす哲理求めて	
18	〃	〃	②短い韻文	生意気な青二才の鼻へし折った 教授の言葉優しくにじむ	
19	文学部日本文学科	3	②短い韻文	繋がれる二千年と今わたし 一呼吸おけるは淵明の道	
20	文学部日本文学科	3	②短い韻文	先生が呟く雑学纏めたら 授業が好きな訳がわかった	
21	文学部日本文学科	3	②短い韻文	「こんなこと、考えるようになったんだ」 新たな自分が見つかる授業	佳作
22	〃	〃	②短い韻文	学生のやる気のスイッチONにする 「？」が「！」にかわる授業	
23	〃	〃	②短い韻文	「楽しい」は自分たちでつくれても この感動はこの授業だけ	
24	総合文化政策学部 総合文化政策学科	3	①エッセー	「座学だけが授業じゃない。」	佳作

2013年度

Happyくらす作品コンクール 入賞作品集

いずれも力作揃いで審査に苦慮しましたが、
最優秀賞１作品、優秀賞１作品、佳作６作品が選ばれました。

今年度テーマ：「心に残る授業」

講義の思い出、心に響いたクラス、自分を変えた授業、目の覚めた講義、元気の出た授業など、講義を通して得た発見や感動、体験、成長などを作品にして応募してもらいました！

★田中優衣さん　★中澤修平さん
★福岡　彩さん　★張　美善さん
★島田大地さん　★森　素子さん

Happyくらすコンクールとは

学生のみなさんが青山学院大学でたくさんのことを学び、学生たちの成長を見て教職員も喜びを感じられるような、みんながハッピーになれる学びの場を作っていきたいという思い。それは青山学院大学に集う全ての人の願いだと思います。
そこで、青山学院大学での授業の思い出について学生のみなさんに作品の形で表現してもらい、他の学生たちや教職員と広くその思い出を共有できる場として、昨年度より実施しているのがこのHappyくらすコンクールです。

コンクール実施概要

応募テーマは次の３つのジャンルのいずれかから選択。
第1ジャンル：　エッセーなど、文章で表現する作品。最大2000字。
第2ジャンル：　詩、俳句、短歌、川柳など、短い韻文で表現された作品。
第3ジャンル：　漫画（四コマ漫画、ストーリー漫画など）

応募作品の中から、ジャンルの区別なく優れたものを選考し、入選作品として下記の賞を授与します。
副賞として最優秀賞には４万円分、優秀賞には副賞２万円分、佳作には副賞５千円分の図書カードを進呈します。

心に残る授業

大学院総合文化政策学研究科2年　塩田伸一

教授という呼称は、物事を「教え」「授ける」ということから来ている。どの辞書を見ても、だいたいそんなふうに書かれている。しかし、である。そもそも他人に物事を教えたり、授けたりすることが可能なのだろうか。自分の考えていることを他人にきちんと理解してもらうことが、本当に可能なのか。僕はそういう疑問をかなり前から持っていた。そして、さらに言えば、先生と呼ばれる職業もかなり胡散臭い部類の生業なのではないかという疑いを持っていた。

英語の歴史には以前から興味を持っていたのだが、もともと工学系なので、なかなか学ぶ機会がなかった。ある新学期に英米文学科の開講科目に「英語史」を見つけた。ちょっと話でも聞いてみるかという、軽い気持ちで初回の講義に顔を出したのが、山内一芳先生の授業だった。

まず、「何か変な先生だな．．．」というのが第一印象。何が変なのかと言うと、ものすごく楽しそうに話されるのである。英語史という科目は、英語の起源にさかのぼり、発音や単語や文法がどのように現在の形になったのかを記述する体系である。あるときは言葉と音の問題を扱い、またあるときはイングランドを含むヨーロッパ大陸における民族の興亡について考察する。長大な時間と広範な地域にまたがる話であり、効率よく単位だけ取ることを考えれば、まずやめた方がいい科目の筆頭である。先生は、履修に於けるそういう学生のずる賢い選択眼を理解した上で、それでもいかにも楽しそうに話してくれるのだ。話の内容が古英語の文法などで難解すぎてついていけなくても、もうちょっと我慢していれば、面白い発見があるのではないかと思わせる話し方なのである。自分の好きなことを人に話すのは楽しい。そういう楽しそうな話は、聞いているひとを深いところに引き込んでゆく。その時、情報のやりとり以上に、その楽しげな態度が感染していく。山内先生の講義は英語の歴史の面白さを伝えるのに強力な感染力を持っていた。そしてその面白さの根源には「発見」があった。

世の中には素晴らしく賢い人たちがいて、たいていの事柄については自分の頭で考えなくても、代わりに目の覚めるような魅力的なアイデアが用意されている。それに乗っかっているほうが楽だ。学生に限らず、効率優先の社会では、知らず知らずにこの潮流に飲み込まれがちだ。しかし、英語の歴史について、いかにも楽しそうに語る「山内節」を聞いていると、何となく自分で考えた方が面白そうだということに気がついてくる。些細なことでもいいから、まず自分で発見すること。その驚きと感動を、自らの経験を紹介しながら楽しそうに、あるときは授業の残り時間を忘れてしまいながら、山内先生はしゃべり続ける。

今になって思い返せば、英語史の細かいところははっきり言って忘れている。試験前にあれだけ一所懸命に詰め込んだものは遠い記憶の彼方に沈んでしまった。鮮明に蘇ってくるのは山内先生の楽しそうな笑顔と、豊富な話題で時間がなくなり、「え、あと10分しかないの？マズイなあ．．．」といういつものセリフだけである。

山内先生の講義を経験して、かつての僕が持っていた教える仕事に対しての疑問は氷解した。教師の本質とは、その教授内容を超えて、問題に対しての知的態度を見せつけることにある。具体的な題材から出発するとしても、最終的には知的な生き方を示すことに帰結するのだ。好奇心を持って対象に臨み、そこに訪れる新しい発見を楽しむという態度。ひとの歩いたところを歩くのではなく、自分の道は自分で発見するのだという態度。そのような態度を生徒の前で表現すること。教えるとはそういうことなのだ。

子供は父親の背中を見て学ぶと言われる。 先生と生徒の師弟関係は、擬似的な親子関係でもある。自分が理想的な「息子」であったかどうかは甚だ心もとないのだが、山内先生の背中から、自分で発見する面白さをしっかり学び取ったという点では、他の息子たちには負けない自信がある。

先生は本年度をもって青山学院での教育からお離れになる。来年から青山で山内節が聞けなくなるのかと思うと、非常に残念ではある。だが、次は自分たちの番かもしれないとも思う。先生に教えて頂いた発見する楽しさを、次の世代に伝える責任を感じている。いつの日か、そういう背中で語れる親父になりたいとの思いを支えに、日々の研鑽を積んでいきたい。

講評

山内先生の授業から単なる英語史の知識ではなく、自分自身で発見する楽しさ、知的な態度を学ぶことができたという、教育の１つの理想的な成果が描かれている。作者の優れた文章表現から、山内先生が授業をする時の楽しそうな様子や当該授業から作者が学んだことの素晴らしさが、生き生きと伝わってくる。

心に残る授業　―科学を恐れるな―

文学部比較芸術学科2年　鈴木梨歩

電気、車、テレビ、スマートフォン――――科学技術が生活に不可欠となった現代社会において、あなたは科学の脅威を感じたことがないだろうか。専門的な科学と目に見えない亡霊に、私は同じ恐怖を抱かずにはいられない。科学はもはや我々一般人の手から遠く離れたものになってしまった。しかし、C先生は仰った。「科学を恐れるな。科学から逃げるな。」と。

青山学院大学で学ぶ上で避けられないのが、必修科目である青山スタンダード科目である。自分の専門分野だけでなく、幅広い分野の教養を身に着ける目的で設けられている全学部共通の授業だ。それには四つの学問領域が用意されており、卒業するためにはすべての領域を習得しなければならない。文学部に所属する私は自然理解関連科目、つまり理系分野の授業を受けなければならないことに辟易していた。他の文学部の学生の多くがそうであるように、私も理系の科目が苦手である。

そんな私が履修したのが、地学を専門とされるC先生の「科学・技術の視点」の講義であった。初回の授業で、彼はさっそく私を驚かせた。開口一番「専門的な科学の知識を使う場面なんてないから、この授業の内容を覚える必要はない。」と仰ったのだ。そして、試験ではなくレポートの提出で成績を付けるという。小難しい単語を暗記する必要がないと分かり、私は単純に喜んでいたのを覚えている。

そのレポートというのが、新鮮だった。C先生は「地球温暖化は実際に起こっていると言えるのか。君たちのオピニオンを教えてほしい。」と、私たちに意見を求められたのだ。授業では、地球の誕生やプレートの動きなど地質学に準じた地球に関する内容を取り扱っており、先生の投げかけた問いに対する答えは含まれていなかった。C先生もそれは分かっていらして、科学的な根拠を提示しつつ、学生の考えを聞きたいということだった。ただ自分の考えをぶつけるだけではなく、スマートに科学的データを引用することは難しかった。それには、自分の意見を支える最低限の科学知識を必要とするからだ。しかし、先生は丁寧なレジュメと添削でレポートの書き方を示してくださった。このような形式のレポートは、全授業中に二度出されたのだが、その時私はC先生の真意というものを少しもわかっていなかった。

前期中の十一回の授業も、後半では地球の話題から科学の本質に迫るものへと移り変わっていた。その最後となる講義で、C先生は水俣病問題の現代に至るまでの経緯などを取り上げた。今では正論を主張していたことになるある大学の教授が、当時は水処理業界誌で罵倒されていた事実を、私は彼の資料で初めて知った。他にも、環境汚染による食物連鎖によって引き起こされた世界最初の公害病という前代未聞の事態に右往左往する人々の様子が淡々と年表に著されていた。当時の混乱は想像に値する。先生はぐるりと教室を見渡してから、私たちに尋ねられた。「君たちがこの状況に居合わせたらどうしますか。」この言葉を端緒に授業のわずかな残り時間、C先生はその心内を明かされた。

「科学を恐れるな。僕は、みんなにそう言いたい。知識なんて、その時つければいいのです。」水俣病の話題も、私たちに意見を求めたレポートも、科学を様々な視点から解説された授業も、すべての根元にあったのは、C先生のこの思いだった。私はそこで初めて彼の本意を悟った。先にC先生の言葉を引用したように、履修者全員が文系学部に所属する授業で、彼は難解な学問としての科学を教えたかったわけではない。膨大な科学技術とその情報が氾濫する社会で、生きるために判断し、利用できる科学というものが存在することを伝えたかったのである。もし私が1959年の水俣湾にいたとして、そこで獲れた魚を食べられただろうか。以前の私なら、ただ黙って多数派の意見に従っていたかもしれない。それは、私が無知であり、そして無知の克服の仕方にもまた無知であったためだ。しかし、今は違う。科学的な根拠を持つオピニオンを主張したあのレポートを通して、私は自分の確固たる意志を表現できるようになった。

自分の意見が正しいかどうかは問題ではない。科学を制し、その波に流されない方法を知ったことで、私はぶれない芯を得た。現代は、もはや科学なしには生きられない時代である。科学と二人三脚で歩む人生が続くことは、避けられぬ前提だ。けれど、その前半でC先生の授業に出会えたことは、私にとってこの上ない幸運であった。科学に恐れる私はもういないのだ。

講評

作者は科学を亡霊のように恐れ、多数派の意見に従ってしまいがちだったという。しかし、そんな作者が必修科目であることに辟易しながら選択した「科学・技術の視点」の授業で、科学を恐れず根拠をもって自分自身の意見をもつという態度に至った素晴らしい経験が、作者にとって重大な出来事であるにもかかわらず、ユーモラスに表現されている。最初は楽勝科目かと喜んだ作者が、当該科目を通して生きる態度さえ変えていくことになるという展開は秀逸である。

佳作
6作品

★文学部日本文学科3年　田中優衣

「こんなこと、考えるようになったんだ」新たな自分が見つかる授業

講評

授業を通して以前の自分が考えていなかったようなテーマについて考えるようになった自分自身の成長に気付いて、少し驚いている作者の新鮮な喜びが短い言葉にうまく表現されている。

★文学部日本文学科3年　福岡　彩

思うこと何でも言い合うこの授業笑顔広まり知識広がる

講評

学生たちが自分の意見を自由に言い合うことができる授業の楽しげな雰囲気が読者に伝わってくる。学生たちが笑顔で意見を交換しながら学ぶ姿が目に浮かぶ。

このコンクールを主催している“全学FD委員会”の“FD”って何？
“FD活動”って、学生も参加できるの？

FDとはFaculty Developmentの略で、授業改善のための組織的な取り組みをいいます。
青山学院本学では、 FD推進委員会直下の組織として現在15名の学生FDスタッフが活動しています。
大学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため、さまざまな活動・企画を通して学生視点で授業や教育のあり方を考えています。
学生FDスタッフは随時募集中ですので、ご興味のある方はぜひ教育支援課(agufd@aoyamagakuin.jp)まで、お気軽にお問い合わせください！

★座学だけが授業じゃない。　　総合文化政策学部総合文化政策学科3年　島田大地

私は総合文化政策学部の学生である。いわゆる「総文生」として大学3年間過ごしてきた。「社会を文化の感動によって生き生きと価値のあるものとしていく学問」と定義された本学部では、教室で教授のはなしを聞く以外に大切な授業がある。総文の特徴は、何といってもゼミやラボアトリエといった演習授業にある。座学ではない授業だ。

私は、大学2年生になって内山隆ゼミナールに入った。このゼミは映像製作ができるゼミとして私が受験生の頃から憧れていたが、実際はただ映画をつくるだけの授業ではなくて、映像製作を通して、映像コンテンツ産業のマネジメントを学ぶゼミであった。その上で先生が繰り返し言っていたゼミ方針がある。

「学生っぽく」小さくまとまらないこと。つまり、積極的に外と交わること。

そして、「学生っぽい」自己満足な活動はしないこと。つまり、作品の出口をつくること、である。

ここが映画専門の美大や芸大や、学問として映画学だけを扱う他大学とちがう、総文ならではの映画の領域だった。この方針をもとに2012年4月、私は内山ゼミ4期生として仲間たちと共に映画をつくる授業がはじまった。

ゼミ内で唯一映像サークル映画を作っていたこともあり、私が脚本と監督を担当することになった。その他に10人のゼミ生でプロデューサー、助監督、キャスティング、美術・小道具などの役職を決めた。そのメンバーで企画、脚本会議、キャストオーディション、ロケハン(撮影場所探し)、美術制作、香盤表づくり(スケジュール)などの膨大な仕事をこなすことになった。

しかし、これだけでは映画を撮れない。撮影や照明、録音などの技術者がいなかったのだ。ここで、ゼミ方針の、積極的に外と交わる能力が問われた。私たちゼミ生は現場の経験がないから、これを解決しなければ内輪だけの質の低い作品になってしまう。けれど、プロとのツテはなかったし、あったとしてもわずかな製作資金ではまかなえるものではない。ならば、映画の専門学校の学生たちに手伝ってもらうことはできないだろうか。そう考えていた矢先、思わぬところで繋がりができた。

もう一つのゼミ方針に作品の出口をつくることがある。ただ作って終わりではなく、商業映画のように上映機会を増やすためのプロモーション活動をする。そこで既に卒業製作を完成させていた先輩たちは、多くの人に作品を観てもらうために、自ら学生映画祭を開催したのだ。「AOYAMA FILMATE」と題した映画祭のコンセプトは、「“学生でも魅せられる映画を作れる環境”をつくるための映画祭」であった。フィルム(映画)とメイト(仲間)を掛け合わせた造語の通り、他大学の学生のヨコのつながりをつくることを映画祭のひとつのテーマとしていた。結果として、私はその映画祭で日本大学藝術学部の学生たちと知り合うことができ、彼らに撮影や照明、音声を手伝ってもらえることになった。

ゼミ方針を実現した内山ゼミ一期生の先輩たちが、私たち後輩の製作の危機を救ってくれたのだった。まだ学部としての歴史が浅い総文にも、脈々と受け継ぐべき意志があることを感じた。

それから数々の苦労はあった。ロケ地捜しやキャスト捜しに奔走する日々が続いた。しかし、電車内の撮影場所が見つからない時に、最後に駆け込んだ地下鉄博物館で、そこの職員の方がたまたま青学のOBで撮影を快諾してくださったことなど、人の繋がりを実感する経験がたくさんできた。

そして、ほぼ万全の準備を経て、無事撮影を終えることができた。

そして、私たちの代も今年の3月11，12日に「AOYAMA FILMATE2013」を開催し、200人以上の人たちに作品を観てもらうことができた。ゼロから沢山の人達を巻き込んで映画をつくり、そして映画祭まで自分たちで開催してしまう学部は他にないのではないかと思う。

私の学部には「社会を文化の感動によって生き生きと価値のあるものとしていく学問」を学び、それを体現できる授業がある。

文化はひとりでは創りあげることが出来ないということ。そして様々な文化産業が発展するためには、しっかりとした舞台を用意する必要があるということ。これが、私が学んだ通年4単位以上に価値のある、心に残る授業である。

講評

映画の作成という総合文化政策学部らしい授業の中で、作者たちが作品を作り上げ発表するまでの苦労が、表現が多少拙いものの、生き生きと伝わってくる。しかも、内山ゼミの先輩たちや青学のOBに助けられながら、苦労を乗り越えることができたというタテのつながりのすばらしさも、読んでいて嬉しい気持ちにさせてくれる。

★教授へ宛てる手紙　　経営学部経営学科4年　中澤修平

先生、お久しぶりです。先生とは一切連絡がとれなくなってしまったので、私が歩んできた2年間をまだ報告できていません。私は今、就職活動を無事に終え、充実した学生生活を送っています。先生はご多忙な方でしたから、先生と私の出逢いから振り返りつつ近況報告をしようと思います。

2年生の秋、私はなんとなくゼミを選びました。総合商社出身の先生がいるから、その人のもとに行けば何か得られるのではないか、そんな軽い考えでした。まさかそこで人生を変えるような出会いがあるとは思いませんでした。

ゼミに入って間もなく、私は先生を心から尊敬するようになっていました。好奇心、考える力、発想力がすごい。考え方にとても感銘を受けて、人生で最も影響を受けた人物のひとりになるだろうと思いました。 公園にスイカの電灯とか、芸能人とデートできるビジネスをやってみたらどうだとか、発想が本当に面白かったです。先生に勧められて出たビジネスプランコンテストではみんなで力を合わせて優勝することもできました。たくさんの学びがあり、良い経験を積むことができました。
先生には大きな信頼を寄せるようになり、そして、ある相談をしようと決心しました。

私は1年生の時から考えていることがありました。それは海外留学。一度も日本を出たことのなかった私は、長期的に海外に行きたいと思っていました。費用を考えると交換留学が絶対でしたので、努力をして満たした応募条件。しかし結果的に面接には落ちてしまい、一度断念したのです。それでも諦めることができませんでした。諦めたら今後の人生で後悔すると確信を持てたからです。

私は必要な資料を予め先生に送っていたのですが、当日、研究室に行くと早速言われたことがありました。
「ちゃんと調べたのか？英語で探せばまだまだあるやろ。ホントに知りたいなら本気出して探さな。こんなんじゃまだまだ甘いよ。なぁ。自分のことやろ？ちゃうんか？」
この言葉を先生は覚えているでしょうか。私の心にズシンと響いたんですよ。
先生はそう言うと、新たに資料を取り出し私にその内容を丁寧に説明してくれました。そしてそれを足掛かりとし、私は計画を立て実行することができ、その年の冬には遂に海外に飛び出すことができました。相談して、本当に良かったです。

こんな人間になりなさい。
こんな人生を送りなさい。
自分で考えて、自分から行動しなさい。
もっと考えなさい。
そんなことをいつも言っていましたね。

先生との出会いが私の大学生活を大きく変えました。
この大学に入って良かったと、心から思える出会いでした。

海外に渡ってからのことを報告しますね。
私は先生の紹介で訪れた国でアルバイトや一人旅をして、世界を見てきました。実は語学学校には行きませんでした。色々と考えた結果の選択でした。アルバイト探しでは70回以上応募して、面接も何十回もしましたが壊滅的な結果でした。やはり英語は覚えないといけませんね。ようやく見つけたスタジアムでのアルバイトでは人生で初めてチップをもらいました。相手はなんと小学生です。態度が偉そうだったので少し笑ってしまいましたが、非常に嬉しかったのでその1ドルコインは引き出しにしまってあります。一人旅では大陸を横断してきました。写真を3000枚以上も撮ってしまいました。写真の整理が大変です（笑）
実はその後予定を変更して、東南アジアの国に渡りインターンシップを経験してきました。現地の食事で何度も体調を悪くしまして、危うく嫌いになりそうでしたが1ヶ月も経つと愛着がわきはじめて、その後は非常に有意義な時間を過ごせました。インターンシップでは新規事業の立ち上げにウェブデザイナーとしての業務や外部との交渉、また並行してブリッジSEの方の下で、受注したプロジェクトの進捗状況の管理等も行いました。言語も文化も違う人々と働くことは思っていた以上に難しいものでした。それが面白いのだと、現地の日本人の方は笑っていましたが。インターン先の社長は私専用の名刺まで作ってくれて、その150枚の名刺すべてが他の人の手に渡りました。現地に住む多くの日本人経営者の方や駐在員の方の話はどれも興味深く、私の中にあった常識はすべて覆されたように思います。
これらの経験が大きく影響し、就職活動では国際的に活躍し、日本企業を支える人間となれるような企業で働くことを決めました。非常に厳しい世界ですが、とてもワクワクする場所です。

先生に出会ってから、私の生活は非常に充実しています。昨年の経験は本当に価値のあるものになりました。そして現状に満足せず常に成長していくこと、先生が最初の講義で教えてくれたことを実践していくことが、私なりの恩返しだと思っています。
また良い報告ができるよう日々精進していきます。
それでは失礼します。

先生の教え子より

★CEOになってみて分かったこと　　経営学部経営学科1年　張　美善

最近、不景気が続いていて、若者の就職難は深刻さをましています。まわりの人が私のことを心配してください将来、何がしたい？と聞かれることも多かったです。そのたび、私は就職して現場経験を積んでから起業しますと漠然とした考えを言っていました。

マネジメントゲームとは

今年、経営学部経営学科に入ってマネジメント基礎Aという授業を受けることになりました。経営学科の1年生の必修科目ですので、経営学の基礎を学ぶだろうと思って初日のガイダンスに行きました。しかし、授業の内容は思ったこととは全然違いました。授業はマネジメントゲームというゲームの中で学生一人一人に自分の企業を経営してもらうということでした。授業の内容を簡単に説明しますと、ゲームの中で市場は4つに別れていて、学生は自分が属している市場で企業を運営します。毎週、生産量、投資額（生産、販売、開発）、配当金、人材教育額、人材採用数などの数値を自分なり判断して入力します。また、アンケートを提出し、どこを一番中心点的に強化していくか計画を立てます。入力したゲームの結果は毎週日曜日に確認できて、学生はその結果を分析用テンプレートに記録します。また、市場別に株価順位とシェア順位データを先生が上げてくださいます。そのデータを分析して、どうしたら企業の価値を上げられるかをチームで話し合うということです。ゲームは総10期で行われ、最後の10期に1位だった企業の勝利になります。

結果は悪かったけれども

まずは、自分の企業名を決めることでした。私はスペイン語で空という意味のcieloという言葉が好きですので、milkycieloという企業名にしました。一位になりたいという気持ちで毎週結果がでる日曜日はドキドキしながら、結果を確認しました。残念ながら、私の企業成績は良くありませんでした。一番良かった業績は3位で最悪15位まで落ちたこともありました。20社がある市場で決っしていい結果を出したとは言えません。

しかし、個人的には業績がいい企業のほうも経験できたし、下の企業の業績をあげるためにいろいろ工夫することもできたので、学ぶことは多かったと思います。常に情報を集めて、冷静に自分の企業の内部分析を行い、生き残るための努力をするのがどれだけ難しいことか少しながら、わかるようになりました。大企業は常に獲得したシェアを守らないといけないという大企業なりの苦痛があり、中小企業はなかなか自分の企業のシェアを獲得できないという厳しさがあることに気づきました。将来、起業したいと漠然と考えていたのはかなり甘い考えだったと反省しました。このゲームを通して企業の経営の理解が深まり、企業の基本的な活動を知ることができましたので、これからもっとしっかり勉強して将来のこともちゃんと向き合っていきたいと思っています。

天才は努力する者に勝てず、努力する者は楽しむ者に勝てない―ロルプメルクルレ

マネジメント基礎Aの授業、マネジメントゲームを通して経営学を実際に自分の会社に適応することができたので、楽しく勉強することができました。ほかの経営の授業を受ける時も株式資本や負債構成比率など難しそうな知識を学びましたが、マネジメントゲームでやったことだから興味をもって勉強することができました。これから学ぶ経営学も本の知識だけで終わるのではなく実際の企業の活動に結びつけて思考することができるなら、飛躍的に成長できるのではないでしょうか。そう思うと期待でわくわくしてきます。楽しく勉強できてとっても良かったです。経営学に興味をもたらしてくれてとってもありがとうございました。

← 講評

手紙形式の表現方法が、誠実な作者の心の内を鮮明に表す優れた効果を示している。一旦、交換留学の試験に落ちて諦めかけていた作者が、ゼミの先生の後押しで海外に飛び出し、人生を変えるような素晴らしい経験を積んで、たくましく成長していく姿が生き生きと伝わってくる。ゼミを通じた一人の教員との出会いが、作者の人生を大きく変えることになった事実が、教師という仕事の責任の重さと可能性を感じさせてくれる。

注）作品で触れていませんが、作者のゼミの先生は2011年９月に病気で急逝されました。

↑ 講評

マネジメントゲームという企業経営の基本を擬似体験する授業の中で、1年生の学生がこれから4年間学んでいく経営学という学問への興味をかきたてられていく変化の描写が素晴らしい。マネジメントゲームの結果に作者が一喜一憂する姿がうまく表現されている。将来は起業するといっていた作者が、マネジメントゲームを通して企業経営の厳しさに気づき、これから大学で真剣に勉強していくだろうと予感させてくれる。

★心に残る授業～文化と宗教からみるビジネスエシックス～

専門職大学院国際マネジメント研究科　1Flex-A　森　素子

今から4年前に13年間努めた旅行社を退職してフランスから帰国、帰国後はフランスに本社を置く宇宙輸送会社の東京事務所で広報の仕事をしています。この4月に国際マネジメント研究科に入学しました。前期はまさに時間との闘いであり全力疾走で駆け抜けましたが毎日が充実しています。全ての講義は期待以上の内容で新鮮です。今思えば入学して1週間たった頃には既に学費の元を取ったような気分でした。自分の選択に間違いはなかった、と確信が持てるのは幾つになっても嬉しいものです。

その中でも、西谷幸介教授の「文化と宗教からみるビジネスエシックス」は、"これだ！"と思わせる青山学院ならではの贅沢な講座でした。

英語のインプット•アウトプット

1年の前期は7科目中6科目が必修で選択は1科目のみでしたが、この講座が英語オンリーの対話クラスであることに惹かれて選びました。毎回ゲストスピーカーを招いてアットホームな雰囲気の中でスピーチを聞き、ディスカッションを行いました。

まず西谷先生の流暢な英語が印象的でした。ゲストは日本人と外国人が半々で、論理的でしかも見事なプレゼンを披露してくれました。自分自身、海外で働いてきた経験からコミュニケーション能力の重要性を痛感しています。もっとも、外国人として文法的に正しい丁寧な語学力を身につけることが大切で、ネイティブスピーカーと同等の話力を目指すのは非効率的だと考えています。聞く力を鍛えるにはネイティブスピーカーの会話を聞くことが重要ですが、話す能力を鍛える上では高度な語学力を身につけたネイティブ以外のスピーチを聞くことも効果的な学習方法であり、到達目標になります。また、この講座では意見を求められるなどアウトプットする機会も多く最終日には英語によるプレゼンテーションが試験として課されました。言葉に詰まると、語学力の問題なのか、ロジックの構築に問題があったのかなどを認識する良い機会ともなりました。

多彩なゲストスピーカー

毎週変わるゲスト陣は、他大学の教授、プロの通訳者、LINEや電通など大手で活躍する外国人ビジネスマン、米国の法律家、そして青山学院女子短大のSherrill先生など多彩な顔ぶれでした。トピックは企業の倫理、21世紀のグローバル社会と各国の盛衰、逆差別問題、ビジネス英語の言い回し、など各ゲストスピーカーの専門分野に関するバラエティに富んだ内容でした。

中でも感動したのはキャシー松井さんの講演です。松井さんのご両親は奈良県からカリフォルニアに渡り花卉栽培で成功した方です。幼い頃から一日中休み無く働く御両親の姿を見て育ったそうで、４人の兄弟姉妹全員がハーバードに学んでいます。松井さんは現在日本在住で、ゴールドマン・サックス証券のマネージングディレクター兼チーフストラテジストとして活躍しています。「ウーマノミクス」を提唱し女性の社会進出による経済効果を定量的に示すことで女性の登用を推進しています。松井さんの話は具体的、論理的で分かり易く、話術にも生き方にも多くを学びました。

人の教育

チャプレンでもある西谷先生の談話はリベラルアーツ教育の一環としてとても為になり、聞いているだけで心が豊かになりました。グローバルなビジネスを展開していく上で、互いの国の歴史、文化、宗教など違いを理解し尊重することは非常に重要です。そのためには勉強やビジネスの知識だけでない深い教養が求められます。今回の講義では人間、宗教、文化、差別、女性の社会進出などあらゆる問題について語り合いました。この授業に魅せられた一番の理由はここにあるかもしれません。在学中にできる限り対話形の科目を受講しようと思っていたのですが、この講座は私の理想とする全ての条件を備えたクラスでした。

私はフランスでの数知れずの失敗から多くを学びました。客観的、相対的な視点が育ち、日本人としての自分を見直すきっかけにもなりました。ビジネス習慣は国によって様々です。同じ英語圏、同じフランス語圏でも国によって地域によって全く異なります。今後のグローバル社会を生き抜いていくには、まずは人間を鍛え、世界中のビジネス習慣に柔軟に対応する能力を養うことが第一だと考えます。そのためにも普段から様々な国の人々との外国語での対話に慣れておく必要があります。実はゲストスピーカーとして招待した方の何人かは過去にこの講座を履修した卒業生でした。諸先輩が既に多方面で活躍しています。夢が広がります。

講評

フランスで働いた経験から、すでに十分なコミュニケーション能力を持ち、歴史・文化・宗教の違いを尊重する大切さを理解している作者でさえ、多くのことを学ぶことができた西谷先生の授業の素晴らしさが文章から伝わってくる。西谷先生の授業を通して、様々な社会問題に関する知識や英語でのコミュニケーション能力だけでなく、ゲストスピーカーから生き方まで学ぶことができたという作者の充実感・満足感が読者にも感じられる。

2013年度Happyくらすコンクールにたくさんのご応募をいただき、皆さんありがとうございました。
良い授業は教職員だけでは作れません。学生の声を反映させることで、大学の授業を「学生が本当に求める授業」にしてみませんか？
学生FDスタッフも随時募集中です！

全学 FD 委員会主催

2013 年度 Happy くらす作品コンクール 授賞式・座談会

授賞式終了後に「青山学院大学の教育をより良くするには」というテーマの下、座談会を開催しました。Happy な授業の思い出を作品にして提出してくれた受賞者のみなさんと全学 FD 委員教職員で意見を交わすことで、学生が望む授業をつくるためにはどうしたらいいのか考察する有意義な時間となりました。

～はじめに～

全学 FD 委員会委員長

学務及び学生担当副学長　長谷川信

長谷川　副学長の長谷川です。全学 FD 委員会の委員長として、授業改善等を担当しています。ここは学長室で、普段は学長先生がいるんですけど、今日は不在なものですから場所を借りて、このように Happy くらす作品コンクールの授賞式を行いたいと思います。このコンクールについては、昨年度から始まったばかりなんです。昨年度も受賞した方には来ていただいて、賞状の授与等をしました。今年はそれだけではなくて、終わってから皆さんとも少し懇談して、テーマが大きすぎますけれど、今後の青山学院大学の教育をどういうふうにしたらよいか、もう少し細かく、こんなふうにしたらいいんじゃないかとか、そんな話も聞かせていただきたいと思っています。今日は皆さんの受賞を祝すということ、後で少し意見交換をさせていただければと、そんなふうに考えております。よろしくお願いします。

～Happy くらす作品コンクール～

長谷川　このコンクールのことは前から知っていました？

最優秀賞　塩田伸一さん（総文研究科 2 年）

塩田　いや、ポータルで情報を見て知りました。

長谷川　すぐ応募してみようと思いましたか？

加藤　もともと書くのは好きなほう？

塩田　そうですね。

加藤　私、全学 FD 委員会の副委員長をしております、加藤と申します。よろしくお願いします。「Happy くらす作品コンクール」というアイデアが出てきたのは、授業の最後に、学生の皆さんによる授業アンケートがあるじゃないですか。あれはどちらかというと、教員に対して、教員がちゃんと授業をしたかどうかというのを、学生の側からむしろ非難、厳しく見る、評価するという感じに主体があって、教員のほうとしては、どちらかというと結構辛いものというのがありまして。でも、教員のなかには学生にすごくいい影響を与えた授業をしている先生もいるということは、学生たちと話をして聞いていました。そういうポジティブな面を学生の皆さんから聞かせていただいて、教員にとっても励みになるような、学生の間でもそういう思いを共有できるような、そういう場があったらいいなということで、こういう企画ができました。今年も皆さんから、皆さんのいい授業の思い出を聞かせていただいて、本当に頑張っている先生がたくさんいるんだなということを聞いて、私たちも励みになっている、そういう企画になっています。

長谷川　去年退職された先生の授業がとても良かったという文章があって。それを聞かれた先生は、とても喜ばれていて。

塩田　僕も、山内先生に報告したんですよ。「ありがとう」と言ってくださって、良かったです。

長谷川　山内先生の授業、これは学部の授業なんですか？

塩田　そうですね、学部の授業です。ただ僕は学部は英文科ではなかったので。でも、普通英文科の人は必修かもしれないんで、実はなんか、あんまり選ばないほうがいい、みたいな体で。そのへんよく分からなくて。

加藤　工学系というふうに書かれていましたが？

塩田　あ、工学が専攻なんです。

加藤　で、今は大学院で総文で？

長谷川　山内先生は、若干わたしも面識はあったんですけど。

塩田　書いてある通りに、すごく本当に楽しそうに授業をされるので、引き込まれる感じで、すごく面白い。細かい文法の話もあるので、内容的には結構難しいんですけど。それですごいなと思ったのがあって、良い授業というテーマだった

ので、これ書けるかなと思って、それで書いたんですよ。

～各受賞者の心に残った授業～

加藤　森さんは、フランスでも何年も働いてらしたそうですね。

森　14 年間フランスにおりまして。旅行会社で働いていたんですけれど、4 年前に帰国して今度は在日のフランス企業で働いています。今 1 年生なんですけれど、MBA を取ろうと。先生の授業というんですかね、教えるテクニックと言ったら変なんですけど、引き込まれるような、興味があるように教えてくださる先生ばかりなので、やっぱり先生の技術というのもずいぶん上がったんだな、みたいな。昔は、一方的に聞いているようなイメージがあったんですけれど、そういう感じではなくて、毎日楽しいです。

加藤　学部時代は何学部でいらっしゃったんですか？

森　社会学なんですけれど、でも全くフランス語とかはできなくて。実は年齢ばれちゃいますけど、30 歳になってからフランス語、アーベーセーから始めたんですね。

加藤　そんなにたくさんビジネスの経験をされていても、すごく勉強になるというふうに書いてくださっていらっしゃいますけども。

森　今回のクラスですね、ビジネスエシックス。海外にいて特に思ったことなんですけど、言葉ができるだけでは駄目なんですよね。言葉はもちろんできないといけないんですけれど、やっぱり話す内容といっても、フランス人というのは、政治の話であれ、自分の意見というのをはっきり言いますし。それを言えないと、存在していないというふうに扱われてしまって。だからやっぱり、常日頃から自分が何を考えているのか、何を思って生きているのかということですよね。そういうことで、やっぱり人を惹きつけていかないと、仕事も動かないですし。今回やっぱりビジネスだけでなく、宗教や倫理であるとか、いろいろな話をすることができたのは、自分を深めるという意味で良かったなと思っています。

加藤　張さんは、マネジメントゲームの。

張　企業経営を勉強するとき、基礎学問を学ぶより、最初に企業を運営するのを体験できたのが良かった。私は韓国から来たんですけど。最初にゲームで体験できたのが、経営学に興味を持たせるというようなきっかけができたと思います。加藤先生にミクロを、前期に教えていただきました。

加藤　経営学部で今年から新しく始めた形式なので、教員のなかにも、始める前にいろいろと賛否両論あって。実際の企業経営ではないわけじゃないじゃないですか。ゲームの中なので、本当に学生が勉強できるのかどうかということに疑問を持つ教員もいたりして。だから、張さんのようにこういう文章を書いてくださると、すごい励みになると思うんです。本当に、いい経験になったんですか？

張　はい。ファイナンスを学ぶときも、急に市場とか学問として学べると、あまりよく理解できないんですけど、ゲーム自体が株価を上げるゲームなので、いろいろ自分で戦略を工夫しないといけないので、自然に企業の回る原理だったり、思ったより勉強になりました。あと、他の経営学を学ぶときも、自分の企業の株価を上げるために、実践的に考えながら学ぶので、もっと勉強になったと思います。

長谷川　たまたまなんですけど、今日ここにいる 3 人は経営学部の教員なので、うれしいですね。

張　友だちとみんなで、「どうやって戦略立てた」とか話しながら、誰の株価が上がったのかみたいな話とかをしていて。LINE で「どうやって戦略立てた？」とか話をしていて。それもなんか、みんなで考えるきっかけにもなった。

加藤　それは本当に嬉しいです。

中邨　僕も実は、3 年生向けの科目でビジネスゲームをやっているんですけど、一番盛り上がるんです。講義じゃないので、結果が売上げでボーンと出たら、勝った、負けたというのがやっぱり面白いらしくて。

森　実践できるっていいですよね。

中邨　それをちゃんと考えさせないといけないので、工夫はしていますけど。ただただ入力で終わりじゃなくて、なんで上がったか下がったか、ちゃんと分析しなさいというようなことも。経営学部の学生さんは、やっぱりみんな、しっかり勉強をしてくれていると思います。

加藤　なぜ上がったのか下がったのかという理由は、後できちんと理解できていますか？？

張　結果をテンプレートに自分で作成するんですけど、みんなのと比べて、なんで上がったか、グループで作ったりとかして。先生が、理由を探すために市場の全部の情報を載せてくれるんですけど、それを見ながら、誰が何に投資して上がったかとか考えたりする時間を設けてくださったので。ちゃんと分析することができました。

～青山スタンダードについて～

長谷川　鈴木梨歩さんは、青山スタンダード科目を取り上げていただいて。わたしは青山スタンダードの担当をしているものですから、とっても嬉しいんですけれども。こういう理系の科目というのかな、内容を聞いてなかなか分かりにくいところもあるのかなと思うんですけれども。

優秀賞　鈴木梨歩さん(比芸 2 年)

鈴木　はい。もう全然分からないです（笑い)。基本的には、「はぁ」って感じで聞いていて。レポートのときにだけ、振り返りながらぎっしり詰め込んでいて。授業中はぽかんとしていることが多いですね。

長谷川　なるほどね。

加藤　この授業で、科学に対する考え方が変わったみたいに書いていらっしゃいますね。

鈴木　そうですね。これ、本当は東日本大震災のところまで書きたかったんですけど、汚染水の問題とかが、ちょうど書いている時に話題になっていて。汚染水がどれほど危険なのかとか全然分かっていなかったけど、今なら、自分で調べて能動的に発信することができるんだなっていうのが分かって。学科の先生に、福島出身ですごく東日本大震災に対してオピニオンが強い方がいらっしゃって、そのツイッターをフォローしていると、すごく発信されるんですよね。そういうのを見ていると、自分もこういうことができるんだなというふうに思えて。そういう基礎を作ったという意味で、作中では C 先生ってなっているんですけど、千葉先生の授業はすごく勉強になりました。

～短歌の作品について～

長谷川　今回、短歌が。田中さんと、もう一方福岡さん。お二人、佳作に選ばれているんですけれど、これは日本文学科ですから、短歌の専門。

田中　短歌のゼミに入っていまして、毎週散策に行ったりですとか、テーマに沿ってみんなで歌を詠んで、お互いに批評をしあったりしているんです。31 文字の中で、自分の伝えたいことを、他人にも理解してもらえるように表現するというのが難しくて。初めは自分でこういうことを詠みたいというテーマがあっても、自分では分かるけど、他人にはなかなか同じようには伝わらなかったり、別の角度から取られて。それがまた面白かったりするんですけれど。

加藤　ゼミの時間にみんなで散策に行かれて、作品を作るのですか？

田中　はい。テーマに沿った作品を。隔週で 2 週間に 1 回、歌会の時間と散策の時間とがありまして。歌会のときは、テーマに沿った歌をみんなで詠んできて、お互いに一番いいものを選んだりとか。あと、一番駄目なものを選んで、批評をしあったりして、自分の言葉をお互いに磨き合うということをしています。散策に出かけることで、また見つかることもありますし、何より他の人に言われて初めて気付く発見とかがあるので、すごい面白い授業です。

加藤　それを繰り返していると、上手になっていきますか？

田中　以前は、与えられたテーマだけをどう表現しようかっていうふうに考えていたんですけど、日常の生活のなかで、いいなと思ったことを少し短いフレーズにしてメモしてみたりだとか。今まで自分がやってこなかったようなことを、自然とできているというところに、自分がなんか成長したなというものを感じます。

加藤　いつも考えているのですか？

田中　気付いたら短歌の材料を探していたりするので、自分でも驚きです。

長谷川　日文に入るときから、短歌に興味があった？

田中　いえ。短歌には全く興味がなくて、今まで読み方とかも全くしらなかったんですけれども、新しいところに挑戦してみようと思ったときに、短歌は全く触れたことがなかったので、ちょっとチャレンジしてみようと思いました。

長谷川　あれは私にとっても難しいですね。

森　テンポはいいんだけどね。

田中　ありがとうございます。

～総合文化政策学部独自の授業～

加藤　島田さんは、本当に総文らしい授業というか、こういうものは他の学部には全くない授業ですよね。

島田　そうですね。もともと、受験生のときにこの学部を選んだ理由というのも、映画を撮りたかったんです。美大、芸大に行くほどの意思はないけれども、一般大学で映画を学べるところはないかなということを思っていて、それで総文という学部を見つけたので。もともと入りたかったゼミだったんですけど、単純に映画を作る楽しさみたいなものとは違うところの、しんどさというか、面倒くさいこともたくさんやらなきゃいけないということを、やっぱりサークルと違う質というか、授業として学べたので、すごく面白かったですね。

加藤　内山先生はこういう分野の先生でいらっしゃるんですね？

島田　そうですね。映像産業のマネジメントをやられている先生です。あまり詳しくないんですけど、日本の邦画を支えていく団体に所属されている方で、そういうところからマネジメントとかを。プロデューサー視点で学ぶために映画を 1 本作ってみようということで。僕は映画を撮りたかったので、作る側をさせてもらって。それをしながら映画をどうやって売るかというプロデューサー視点に結構重きを置いてやった授業だったので、自分が思っていたものと全然違う。

加藤　島田さんは前から映画を作っていらしたんですか？

島田　いや、大学に入ってからやりたいなっていうのがあって、大学で始めたばかりなんです。

加藤　大学でそういうサークルに入ってるんですか？

島田　サークルも、はい。青山クリエイティブチームという部活があって、そこもサークルでもやっていますし、ゼミでもやっているみたいな感じです。

加藤　もっぱら撮るほうで、俳優のほうはやってないのですか？

島田　たまにやります。サークルに人がいないので、それはもうお遊びでやるんですけど。ゼミだとオーディションするんですよ。学生映画なんですけども、プロの方にやってもらうので、オーディションをちゃんとしたりするので、やっぱり全然サークルとは違いますね。ちゃんとやらなきゃという。

加藤　総文のゼミではなにか作品を作ることが多いのですか？

島田　いや、ちょっと特殊なほうかもしれないですね。広告とかで、実際に企業とインターン的なゼミとか、ラボ・アトリエという制度もあるんですけども、そういうのをやっている人たち。銀ニャンプロジェクトとか、確かあれも総文の授業の一環で、銀杏を拾って、いろんなお店に配って商品に使ってもらうみたいな。ああいう楽しい活動もあります。

加藤　今回この作品を作って、内山先生からフィードバックをもらい、たくさんのことを学ばれましたか？

島田　そうですね。やっぱり、最初に作っていくと、映画は本当に難しくて、つまらない作品しかあまりできないんですよ。やっぱり１本１本撮っていくことで、作り方とかがすごく分かってくるので。やっぱりサークルとかで数を作りながら。ゼミでは１年間に１本、大体半年ぐらいの期間をかけて撮るので、自分のなかではそれを住み分けというか、サークルでは好きなものをいっぱい。CM とかも撮っているんですけど、短いのとかを撮っていて、それで得たのをゼミの映画でしたいなと思っているので。あとは、来年は卒論の代わりに卒業制作がうちのゼミにはあるので、それに向けて作る準備はしています。

長谷川　わたしは映画のことは全く分からないんですけど、映画のマネジメント側と作る側と、常に利害が違ったりするじゃないですか。そういう面というのは、こういう場面だとどうなんですか？そういう悩みはなく作る？

島田　要は、僕個人が作りたいものというのは、どうしてもちょっとテーマが万人受けではないものになってしまいがちにはなるんです。そういうときに、先生は「肉付けをするのではなくてそぎ落とせ」という言い方をされるんです。作品をスマートにしろという。それは、あまり僕ら学生にはない意見で。それは、多くの人に見てもらう上で、作品をそぎ落としていく、スマートという言い方も変ですけど、商業映画にある綺麗な絵作りとかをしていくというのは、教えられましたね。

加藤　総文には、将来映画とか広告とか、そういう方向を目指している人はたくさんいるんですか？

島田　そうですね。映画はあまり聞かないんですけど、広告のほうが多いかもしれないですね。

～先生に感謝を伝えたくて～

加藤　勝手に注で書いてしまいましたけど、戒野先生のことをおっしゃっているんですよね。

中澤　そうです。お礼を言えなかったので、ポータルを見て、これに書いて出しちゃおうかなと思って。感謝を出すところがなかったので、こういうので残してしまおうかなと思って書いたんです。

長谷川　留学はどちらに？

中澤　留学というかワーキングホリデーで、カナダのエドモントンに行っていて。戒野先生の友だちのところにホームステイをして。学校は行かなかったんですけど、ずっとバイトをしていて。その後一人旅を２ヵ月ぐらいして、帰って今度はベトナムにインターンしに行って、２ヵ月して帰ってきて就活をしてという感じですね。すごい面白かったです。

加藤　チップをもらったんでしたっけ？

中澤　そうです。これ、すごくうれしかったんですよね。日本でバイトしていて、「お金いいよ、取っておいて」みたいなのないじゃないですか。スタジアムで働いていたんですけど、キャッシャーの仕事をやっていたときに、アイスホッケーのスタジアムなので、ハーフタイムにバーッとすごいいっぱい人が来るんです。そうじゃない時の、試合中の時間に子どもがバーッと来て、ポップコーンの大きいやつを買って。3 ドル 75 セントなんですけど、5 ドル札で払って、僕が 1 ドル 25 セント返そうとしたら、「とっときなよ」みたいな。

加藤　小学生に？

中澤　小学生に。でも、ちょっと嬉しいなと思って、走って行っちゃったので叫びましたね、「サンキュー」って。嬉しかったので、1 ドルコインはまだ家にあります。その後も、なんかいっぱいもらったんですけど、やっぱり最初の子どものやつは、初めてだったのですごいしっかり覚えていますね。

加藤　この東南アジアってベトナムだったんですね。

中澤　はい。ホーチミンですね。他の大学のアイセックのメンバーにお願いをして。で、ベトナムのベンチャー企業を

紹介してもらって、IT 企業でベトナムの人と一緒に働いていました。

加藤　最初は食事で体調を崩して、嫌になりそうになったとか。

中澤　いや、やばかったですね。最初の１週間はすごく楽しかったんですけど、１週間してから、最初は熱かな？３週間で熱を２回出して、その間腹をずっと壊していて。あと、気管支炎になって、変な頭痛までずっと続いていて、本当に辛くて。本当に何回も帰ろうとしたんですけど、でも何にもしていないし帰れないなって、ベッドでずっとボーッとしていて。医者に行っても言葉が通じないし。一応日本人の医者にも診てもらったんですけど、その医者も「わたし来たばっかりなので、ちょっと分からないですね。とりあえず整腸剤だけ出しておきますね」と言われて整腸剤をもらったんですけど、全然治らなくて。３週間ぐらいずっともう、本当に辛くて、「ベトナム嫌いだわ」とずっと思っていたんですけど。１ヵ月ぐらいしたらお腹が治ってきて、それからは、会社の人にいろいろな所に連れて行ってもらったり、ベトナムの友だちを紹介してもらったりして、すごい楽しかったですね。

加藤　戒野先生、本当に残念で。

中澤　そうですね。びっくりしました。ここに書いていないんですけど、ちょうど先生にビジネスプランコンテストに参加しろと言われていて。青学の AVL という団体があるんですけど、青学ベンチャーラボが主催するビジネスプランコンテストに出て、ゼミのメンバー３人で出て優勝したんですよ。その優勝報告をした直後に亡くなられたんです。報告ができて良かったよねと、ゼミのメンバーで話しました。

～授業をより良くするには～

加藤　皆さんは、それぞれに青学でいい授業の体験をしてくださったと思うのですけれども、限られた授業ではなくて、全般的に見て、青学の授業を、もっとこうしたほうがいいんじゃないかとか、そういう意見がもしありましたらお願いします。塩田さんは、大学教員を目指されていらっしゃるんですね。

塩田　そうですね。青学で教えるのがベストだなと思ったんですけど。それもまあ、いろいろあるので、分からないですけど。

加藤　青学の授業を、２つの学部に渡って受けてこられましたけども。

塩田　先生は、すごく教えるのが上手だし、熱意がある方がすごい多いというイメージはあります。どちらかというと、学生にちょっと問題が。たぶん 1/3 ぐらいの一部はすごい真面目にやっていて、優秀な人もいるんですけど、半分ぐらいはちょっと微妙な感じがするんですね。だから、例えば山内先生の授業も、結構大教室でやっているので、前のほうはそれなりにやっているかと思うんですけど、後ろのほうだとどうしても私語というか、しゃべったりしていて。それも、山内先生はなんとかうまい具合になだめすかしながらみたいな感じでは。たまには、大きな声を出したりもされていたんですけども。どうすればいいのかちょっと分からないですけど、せっかくいい先生がいらっしゃって、いい内容をやっていて。図書館とかもすごい充実していると思うので、環境としてはすごいいいと思うんですけど、学生のほうに、もう少し目を開いてもらえる方法があると、すごいいいかなというふうに思います。環境としては、場所もすごいいいですし、こんないい学校はないと思うんですけど、本当にもったいないなという思いがたまにしていました。

長谷川　大教室講義の運営の問題ですかね。経営学部は、特に人数の多い授業がどうしても多くなりますから。そういうサイズの大きいクラスをどのように運営していくかというのはまた、少人数のゼミなんかとは別のテクニックが必要で。

塩田　でも、モティベーションをどうやって引き出すかというのは一番重要だと思うので、大きい教室だとしょうがないというか、そういうこともあっていいと思うんですけど。なんか面白いって思えるように、いい方法があるといいと思いますけど。

～体験型授業の魅力～

加藤　皆さんそれぞれに、作品にしてくださった授業の中で、モティベーションを引き出されたというところがあると思うんですけれども、そういったいい授業とはまた違う授業もたくさん受けてらっしゃいますよね。こういう授業は自分がやる気になったとか、こういう教え方がいいんじゃないかとか、いろいろありましたら聞かせてください。

森　さっき張さんがおっしゃっていた

みたいに、自らが社長になったり、CEOになったりとか、体験できる授業というのはやっぱり楽しいじゃないですか。実践して失敗もするけれど、ただ聞いているだけという授業ではなく、やっぱり体験型というのは、まず１つ手だなと思います。あとは、やっぱりなんか意見を言いづらいとか、周りの空気を読んじゃうとか、これは青学というよりは日本全体に言えることじゃないかと思うんですけれど。でも、ここにいらっしゃる皆さんとかは、自分からこういうのに応募されるぐらいなので、やる気がある方とか優秀な方だと思うんですね。だから、みんながやっぱり引っ張って、話そうよ、というような雰囲気に持っていくとか、なんかそういうような人たちが少しずつ増えていくといいなと思うし。まして、今からグローバル社会なので、黙っていてはもう日本は淘汰されていくばかりだと、わたしは本当に危機感を感じています。ぜひ皆さん発言して、学校は失敗する場所だというふうに自分で割り切って、ここで学んだことが、将来社会に出て絶対に役立つと思うんですよね。でも、今ここで黙っていたら、たぶん社会に行っても同じようなことになりかねないんじゃないかと思ったりします。

～教員と学生の距離が近い授業～

加藤　現実としては、やはり意見を言いづらいというのは森さんがおっしゃったようにあると思うので、教員の側から意見を言いやすいような雰囲気を作っているような授業はありますか？

鈴木　私は、比較芸術学科という、去年できたばかりの学科なんですけど、人数が１学年で 90 人ぐらいしかいないんですよ。たぶん経済の人とかからしたらすごい少ないと思うんですけど。だから、１授業の人数も、多くて 40 人ちょっとぐらいで多くないんですね。だから、先生がすごい近いんですよ。ちょっと失礼なんですけど、幅広い分野を受けると、自分の興味のない分野も芸術分野もあって、ちょっとうと～っとすると、浅井先生ってご存じですか？浅井先生が「おい、起きろ」、「ほら、寝るんじゃない」とか言って、みんなに声を１人ずつ声かけていて。名前を覚えていなくても、それぞれ特徴とかを覚えていて。「ほら、いつも一番前に座るやつ」とか、そうやって授業中に声をかけてくれると、浅井先生は自分たちを見ているんだとか、先生は自分たちを見ているから、ちゃんと受けなきゃ申し訳ないというのもあって。比較芸術の先生とかは、特にそういう方が多くて、能動的に授業を受けられる環境だと思います。

加藤　それは経営学部からすると、すごいうらやましい人数ですよね。今はそういうことなくなりましたけど、最高 550 人のクラスまで教えたことあったので。今はそんな大人数はありえないですけど。

長谷川　そうですね。経営学部も最近は割と。必修のでも 100 名ぐらい？

加藤　もうちょっと多いかも。

長谷川　100名台ぐらいに抑えてクラスを作って。あとは、１年生からもアクティブラーニングとかを入れているところもありますし。だいぶ変わってきましたけどね。まあ、人数は確かに多いですよね。

加藤　他の先生も、結構皆さんの名前とか覚えているんですか？

鈴木　そうですね。もう本当に１回授業を受けただけなんですけど、佐藤かつら先生は、顔を見ただけでほとんどの学生の名前を言えたりしていて。やっぱり、普通じゃないんですね。比較芸術の先生は、髙橋先生とかも、「鈴木です」と言えば、「あ、どっちの鈴木さんだっけ？」と言って、一生懸命覚えようとしてくれている姿勢もあって。だから、「あ、顔は見たことあるよ」とかも言ってくださる先生もいらっしゃいますし。だから、すごい覚えやすいですよね。だから、たまに青スタの経営とかの先生の授業とか受けると、後ろでしゃべっているのに慣れちゃっていて。リアクションペーパーとかにも、「後ろの方がうるさいんで、なるべく注意してください」といっても、もう諦めているというのもおかしいんですけど、普通に授業を進められていて、「ああ」みたいな。やっぱり違うなというのをすごく感じてしまいます。それは学科の問題なんですけど。私は教職の学芸員の資格を取っているんですけど、履修の科目の先生だと、先に人数が多くてしゃべる学生が多いのが分かっているんで、脅しをかけるんです。「しゃべったら、立って学年と名前を言わせるぞ」とか、「2 回目があったら退室させるぞ」とか。でも、脅しがあると、みんなビクビクして、授業受けなきゃで、すごい怖いんですよね。だからやっぱり、脅しとはまた別の方法で、みんなが能動的に授業受けられる方法があればなというのは思います。

～少人数授業・能動的な学生参加～

加藤　中澤さん、何かありますか。

中澤　はい。中谷安男先生という法政大学の方が、青学の経営学部のエフェクティブネゴシエーションという授業をされていて。今はもう、ライティングの授業もされているんですけど、少人数で、全部英語でやるんですけど。その授業は、僕としてはすごい理想というか。少人数なので､20 人ぐらいしかいないんです。全部英語なので、最初は結構みんな萎縮しちゃうんですけど、先生が、多少つたなくてもバーッとしゃべるんですよ。なんか、外国の授業ってこんな感じなのかなと思ったんですけど、手を上げるとか

じゃなくて、普通に会話みたいな感じでやるんですよ。ビジネスの本当に実践的な、IT はこうだったとか、バブルはこうやってできたんだとかトヨタはこうやって成功したんだ、そういう話をバンバンしていって。僕からしたらすごい興味深いんですよ。全部英語だから、英語の勉強にもなるし。「どう思う？」みたいな会話形式なので。「トヨタ、このときどうしたと思う？」とか聞かれて、「どうしたんだろう」みたいなのも横の人としゃべったりして、思ったことをバッと言って、先生が「あ、そういう方法もあるよね」とか、絶対に否定はしないんです。絶対肯定して、すごい言いやすい場所になっていて、すごい楽しかったし、すごい充実するというか。学生同士もすごい仲良くなるし、先生とも仲良くなるし。それで、僕は先生と仲良くなって、先生が理事長を務めている学会にちょっとお邪魔させてもらったりとかもしましたし。こういう授業は、4 年間で初めてだったので、こういう授業を学生が 1 年生の頃から受けていたら、すごい意識が変わるんじゃないかと思いましたね。あと、内容が身近なので。僕が 1 年生のときに会計学がすごく嫌いで、最初から会計学とかを教えられても、なんでこれをやらなきゃいけないのかよく分からなくて。これが実際に会社でどうなっているのかとか、よく分からなかったし。そういうのをイメージするためにも、身近な話題を最初に取り上げてくれるといいのかなというのは思いました。さっきのマネジメント基礎みたいに、自分で考えられるというか、自分の頭の中でイメージできる授業があると、能動的に参加しやすいのかなというのは、すごい思いますね。難しい言葉を並べられても、1 年のときは特によく分からないですね。これが、ビジネスの場でどう動いているのかとかよく分からないとか、そういうのが多くて、とりあえず覚えるとかというのが多かったので。そういう参加できる授業というか、自分で興味を持てるような、身近な話題をどんどん出してくれたら、もっと分かりやすいんじゃないかなとは思うんですよね。よく、ケーススタディとかやるじゃないですか。ああいうのは、最初に答えを出さないで、授業の最初に聞いたりしてくる先生もいて。そういうのは、いくら適当に受けようと思っている人も、やっぱりみんな考えるんですよ。なので、そういう授業がもっと増えたらいいのかなと思いますね。

加藤　中谷先生は、質問をした後に、ペアとか組ませて、答えを考える時間を与えてくれるんですか？

中澤　はい。それもありますし、最後にグループワークもあって、今まで組んだことなかった人と組んでねと言って、3 人ぐらいでグループ組んで、実際のケーススタディみたいな感じで。基本的に、経営は答えがないじゃないですか。この会社はこうしたけど、こういう考え方もあるよね、というもあるので、ジレンマというか、「この人たちはこうしたけど、あなたたちだったらどうする？」みたいな選択肢が 3 つぐらいあって、その理由も一緒に考えてくださいというのを 4 人ぐらいでやって。それも全部英語でやらなくちゃいけないので、ちょっと辛いんですけど、でもしゃべらなくちゃいけないので、恥もいっぱいかくし、いい意味で恥をかいて素になれるというか。そうですね、グループワークとかもいっぱいあって。

加藤　中谷先生は否定されないと言いましたけども、学生の側は、否定されなくても、どこが問題なのか、ということはちゃんと学べるようになっているんですか？

中澤　そうですね。トヨタだったら、「何が問題だったと思う？」とか言って。例えば 4P とかあるじゃないですか。例えば僕が「プライス」と言ったら「なんでそう思うの？」って言われて。こうこうこうだからと言ったら、「あ、そういう考えもあるよね」って。「他の考え方できる子いる？」とか聞いて、他の子がパーッとまた違う意見を言って、「そういう考え方もできるよね」って言って。「実際にトヨタはこういうふうにしたんだよね」って言って。「もしかしたら、君たちの意見のほうが正しかったかもしれない」とか、そういう感じで進めるので、意見を言うのが怖くないんですよ。基本的に、それ違うとか言われないので。だから、最初は硬いんですけど、学生もどんどん意見を出すようになって。ちょっとまだしゃべれない子もいるんですけど。発言とかは、英語の優劣で多少は発言とかはあったんですけど。でも、みんな能動的にすごい参加していて、こういう授業はいいなというのはありました。

～大教室授業のむずかしさ～

中澤　本当にいい授業でしたので。大教室は、後ろのコントロールは難しいですよね。大学はいろいろな人がいるじゃないですか。いろいろな意思で来ているじゃないですか。友だちには、別に経営学を学びに来ているわけじゃない人もいっぱいいるんです。別に俺、自分のやりたいことをやっていて、みたいな。とりあえず受かったから来たとか、そういう人たちもいるんですけど、そういう人たちが楽しいと思えたら最高だと思うんですけど、先生も大変だなって思って。注意すると授業進まないじゃないですか。授業も進めなくちゃいけないじゃないですか。そうするとやっぱり、板挟みなのかなというのはすごい思います。

加藤　注意してもなかなか静かにならないとか。

中澤　ならないですよね。

加藤　その学生の近くまで行って、「出てけ」みたいな感じでやったりというのもあるし。そうすると、なんか雰囲気が悪くなっちゃうしとか、いろいろありますよね。

中澤　少人数は一番いいと思いますね。

長谷川　今は選択で、ちょっと置き場所間違えるとか、そういうことがなければそんなに多くはならない。

加藤　それはもう、12～13 年前の話で、今はそんな人数はありえないです。

長谷川　その頃は必修で、私も 1 年生相手に 350 人とか、そんなの教えたことあります。今はもうそういうことはないです。ですから、小分けにするにしても、語学クラスなんか特にそうなんですけど、レベルの問題がもう 1 つたぶんあるんですよね。語学クラスなんかはある程度、今はレベル分けを大ざっぱにはしているというようなかたちになっていますけど。普通の授業はそういうことは難しいですから。

中澤　僕、就職活動して、周りがすごく変わったんですよね。就職活動終わった後の人は、すごく真面目になるんですよね。あと、休学した友だちも、すごい真面目になるんですよ。就職活動は、メンタルで結構やられるじゃないですか。企業もいろいろ調べるし、ビジネスの場というのを企業から学んで就職活動を終えるじゃないですか。そうすると、授業の内容も想像しやすくなっていて、内容もすごい面白いんですよね。いいか悪いか分からないですけど、1 年生の頃から就職活動とかを意識できたらいいのかなというのはちょっと思いますけど。大学生活つまらなくなるんですかね。就職活動はすごい良かったです。それはすごい思いました。一番学べるんじゃないかと思いました。だって、企業の人たちは、そういう情報はそんなに取れないじゃないですか。新卒の僕だから、いろいろな企業の OB 訪問とかして、いろいろ話聞けますけど、ライバル会社は絶対に聞けないじゃないですか。ちょっと、実際どうなんですか、みたいな話を聞いたりとかも、この立場だからできるじゃないですか。それを知った上で、また経営の授業を受けると、「あ、そういうことだったんだ」とかはありますね。なんか面白いです。分かりやすい。

～インターンシップ～

長谷川　中澤さんは、海外だけどもインターンシップに行ったりされていますけど、そういうのはどうですかね。インターンシップをかなり積極的に、1 年生の頃から取り入れるとか、そういう大学の動きも今あるんですよね。

中澤　僕はいいと思いますね。すごい面白かったのは、ベトナムは英語がちょっと通じないところがあって、一応日本語を頑張って勉強しているんですけど、N4 とか N5 とかなんですよ。だから、普通に何か指示を伝えたくても、1 時間とかかかったりするんですよ。類推の「らしい」と伝聞の「らしい」の違いが分からないとか言われてきて、「それ、俺も分からない」みたいになって、2 人で調べながら、「こういうことなんじゃないかな」みたいに。あまりそういうのとかを意識したことがなくて。それ自体で難しいのに、また文化の違いがあるじゃないですか。そういうので、だんだん常識ってよく分からなくなってきて。何が常識なのか分からなくなったし。ベトナムの現地の人たちにバッグを作ってもらって、実際にインターネットサイトとかでそれを売ったりとか、日本とベトナムの間の掛け持ちとかをやっていたんですけど、そういうのをやると、とりあえず面白いです。なので、そういう経験も最初にしておくと、違うんじゃないですかね。

加藤　ただでも、経営学部というのはありますよね。芸術学科とかあんまりつながらないかもしれないですね。

森　でも、どんな分野でも、一度外に出てみるというのはいいと思うんですよ。よく、国内にいても語学は学べるとか、いろいろ言うんですけど、たぶん中澤さんもそうだと思うんですけど、外に出ることで客観性が育つんですよね。日本のいいところももちろん見えてくるし、逆にここが問題なんじゃないか。比較対照がないと、人間というのは比べられないというか、どこが良くてとか、改善点も分からない。そういうものがまず認識できるようになるし、言葉とか、文化の要素も当然必要じゃないですか。そこに行ったことで、やっぱり全然違う世界が見えてきますよね。若いときにそういうことはうらやましいですね。本当に、インターンシップはいいと思います。

～留学について～

中澤　視野は広がりますよね。日本についてあんまり知らないなというの、すごい思いましたね。僕、高校のときは世界史を専攻していたんですけど、日本史を勉強しなかったので。外国の人は、自分たちの歴史にすごい詳しくて、僕全然日本史知らなくて、恥ずかしくなったんで

すよね。あと、勉強に対する姿勢も、向こうの人はすごい真面目で、大学はちゃんと学びに行くところなんです。日本はどちらかと言うと、遊びに行くところの要素が強いじゃないですか。これどうなのか分からないですけど、僕は 1、2 年生の頃は結構そういう要素が強くて、ゼミに入って変わりましたけど。なので、違うなというのはすごい感じましたね、あと、日本の発言できないところとか。向こうに行って、僕性格がオープンになって、恥をかくこともあまりいとわない感じになって。発言もどんどんするようになって、就活中も全体の前で変な質問したりして、隣の人に謝って帰ったりとかしていたんですけど。いいのか悪いのか分からないですけど、そういうのに怯えないというか、一歩勇気を出せるようになったというのは大きい。そういうのは、インターンとか海外の経験で身についたのかなと思いますね。

塩田　カリキュラムに、海外留学を強制的に組み込む、みたいのはあってもいいと思うんですけど。たぶん他の大学とかではあるところもあると思いますけど。

長谷川　そういう学部もありますよね、今。

塩田　1 年生か 2 年生のときに、半年ぐらいどこかどこでもいいから行きなさい、みたいなのは、完全に組み込んじゃうというのもいいんじゃないかと。

鈴木　それはいいと思います。インターンシップで海外に行けと言われても、私は特に芸術系なので、企業に放り込まれても右も左も分からないという感じになってしまうので。友だちは語学研修に行ったんですけど、普通の語学学校に行っても、語学の勉強をした後に、自分でただ美術館に行って、美術館見て帰ってきた、みたいな。自主的にそれを組むというのはすごい大変そうだったので、私は西洋美術が好きなので、西洋美術の国、例えばフランスの美術学校とか、カリキュラムでその学部・学科に合わせた海外の経験というのを積ませてもらえるといいのかなと思います。

塩田　話の腰を折るようであれなんですけど、僕はカリキュラムには結構反対で、何のために夏休みがあるのかと思っているんですね。僕驚いたんですけど、ゼミ生のなかで、半分の学生は語学留学とか行くんですよ。やっぱり夏休みにまず、せっかくの夏休みをどう過ごすかって非常に大事だと思っていて。そういうので留学に行くとか、インターンシップに行くとか。アメリカの大学ってそうですよね。夏休みのときにインターンシップで。かつ、インターンシップでお金をもらえるので、それでアルバイト代で、授業は授業で勉強するというのは。だから、大学としてはその夏休みの過ごし方を支援するのはありかなと思ってはいます。ちょっと、ごめんなさい、骨を折る感じであれなんですけど。理想的には、カリキュラムがあると単位もあるし、非常にいいとは思うんですけど。

鈴木　自分で調べて行くのも大変だし、プラスで費用もかかるのもあれだし。というのは、わたしも夏に行こうかなって少し悩んだんですけど、TOEIC とか TOFEL とかの試験も、「今まだ受けていないの、もう遅いよ」とか言われてしまって、「ああ、どうしよう」みたいになってしまって。やっぱり、そういうのを目的に入っている人じゃないと、今さらやろうと思っても、ちょっと遅いなってなっちゃうときもあったんで、もう少し気付きの機会というのがあったらいいかなというのは、自分の調査不足もあるんですけど、思いました。

長谷川　最近になってなんですけど、青山スタンダードの中にも、留学向け語学みたいなものと、それに接続する短期研修みたいなのをくっつけて、配置したんですけどね。まだちょっと受け入れの数がすごい少ないから、そういうのを早めにアナウンスされれば、だいぶ違うのかなと思いますけどね。

中澤　僕、休学した身なので、結構休学を勧めたいんです。僕はすごい良かったんです。海外だと、ギャップイヤーというのは結構多いんですけど、就職する前に 1 年、世界一周しているとか、そういう人に会ったんですけど。1 年ぐらい本当に何もないと、何かしなくちゃやばいなって思うんですよ。カナダにいたときは、語学学校行こうと思っていたのに、高いからやめて。3 ヵ月で 40 万と言われて、アホらしいと思ってやめて。面接をめっちゃ受けたんですけど、しゃべれなかったので落ちまくったんですけど。そういうのも、何かしなくちゃいけないと思って休学していたら、1 年間海外に行って何も得てこなかったら、これで「え？」ってなるんですね。わざわざお金払ってきたのに、なんだこれと思って。それで、僕最初は語学学校に行って帰ってくるつもりだったんですけどやめて、自分でバイトを応募して、バイトをやって。でも、このバイトだけじゃちょっと駄目だなと思って、一人旅をして、これももうちょっと何かやろうと思って、インターンやったんですけど。そういうのって、1 年間ぐらいずっと休学期間があったからできたんですよ。授業があったら、僕は結構ちゃんと授業に出ちゃうんですよ。ずっと授業受けていたので、単位取り終わって今もう授業ないんですけど。だから、海外みたいに、1 年ぐらい猶予とか持てたら、みんな嫌でも考えるんじゃないかなと、僕はちょっと思ったんですけど。休学費とかの問題もあると思うんですけど、それをもっと呼びかけてもいいんじゃないかなと。少ないですけど、休学した友だちって、みんなすごいイキイキしているんですよ。なんか

やりたいことを見つけている人とかも結構います。なんかよく分からない人もいますけど、そういう経験ももっと普通になっていいんじゃないかなっていうのは、僕はすごい思いましたね。僕が休学するって友だちに最初に言ったら、「え？」ってすごい言われて。僕もう、2年の冬か何かに決めていて。そういうのをもっと、大学から言ってもいいんじゃないかなと。そうやって帰ってきたら、もっと授業も、先生も面白いんじゃないかなと思うんですよね。

塩田　半年間休学してどっか行ってくる、というのをカリキュラムに入れ込んでしまえば。

～「英語の青山」の英語教育～

張　私は、青学の英語教育は実はすごいいいと思っていて。チャットルームだったりとか、自分で自主学習できる外国語ラボだったりとか、自主学習するプログラムだったりとか、すごいちゃんと勉強できるようにできていると思うんですけど、意外と知らない学生が多くて。外国語学習ラボだったり、本当に普通の市販の問題集よりよほどいいプログラムがあって。私はCALL教室だったりとかで学習したり、チャットルームに行って、英語ができなくても留学生の方と話したりとかして、青学で英語の勉強をちゃんとできるシステムがあるので、もっと学生に知らせて勉強できるようにしたらいいなと思いました。

中澤　チャットルームいいですよね。

長谷川　他に、英語教育に関して感想とかありますか？総文とかどうですか？

島田　うちは、英語教育はいいんじゃないかなと思っていて。クラスが9クラスで、コミュニケーションという授業が、45分の授業が週4回、1年生の時にあって。それは外国語のネイティブの先生だったので、文法ではないところを学ぶことができた授業があるのと、プロフィシエンシーという90分の文法を学ぶ授業があったので、英語の授業はすごいなとは思いましたね。ちょっと関係ないことになるかもしれないですけど、文系学部全部青学に来て、授業が取れないんですよ。それをどうにかしていただきたいんですよ。

長谷川　抽選になっちゃう。

島田　そうなんです。抽選に結構今年落ちたので、それがモロに今年出たので、ぜひどうにかしていただきたい。

加藤　総文の英語の授業で、学生のみんなは実力が上がったと実感しているようですか。

島田　それが、クラスによって違いますね。入学式が終わった後に、軽い文法テストみたいなのがあって、それによってクラスを分けられるんですね。ちょっとそこで失敗してしまいまして、僕は下から2番目のクラスになったので、正直、すごく簡単な授業でしたね。僕がいけないんですけど。

長谷川　クラス分けは難しいですよね。

島田　そうですね。その最初の試験のクラス分けで失敗しちゃったので。ただ、受験ではやっぱり文法だけで、語彙とか受験英語しかやっていなかったので、ネイティブの先生と話すというのは初めてだったので、それは面白かったですね。学力が上がったかどうかは別とするんですけど。

長谷川　総文はね、独特というか、学部を作るときに新しい仕組みを作ったので、そういう授業が受けられるんですけどね。

島田　基本的には、英語の授業はいいなとは思っています。

加藤　文学部も、割と少人数の授業が多いんですよね。

田中　はい。少人数なんですけど、今おっしゃっていたように、先生によって全く授業内容が異なりまして、映画をただ見ているだけのクラスもあったり、あとは本当に簡単な教科書の担当のところだけを訳して、他の人がそのメモを取っているだとか。あとは、ネイティブの先生が、教科書も全部英語で、一言も日本語を使わない授業もあったりするので、本当にレベルがまちまちで。必修単位で必ず、日本語ず一言も話さないクラスを誰もが1つは取れるようにしたりだとか、あと文法と。私、今文学部で日本文学科なので、日本文学科らしい教材を取り扱ったり、昔からの文学作品とかで、お互いに翻訳しあって、英語に直すとこうなんじゃないかとか、そういうふうに関連のある教材を取り上げたら、もっと興味が湧いて、学生たちも関心が湧くんじゃないかなというのは思っているんですけど。日本文学科で文学を勉強しているのに、全く訳の分からない英文だとか、分野が違うものを読んでも、あまり身にならないというか、ただ英語を訳してというところがあるので、教材の扱いがもっと違うと、学生も楽しめるんじゃないかなというのはあります。

～抽選システム改善の必要性～

張　私、青スタ全部落ちましたよ。

島田　そうなんですよ。応募がいっぱいになって、抽選になっちゃうんですよ。

加藤　教室の人数を制限しないと、というのがたぶんあるのではないでしょうか。

長谷川　教室サイズですね。その授業に割り当てた教室サイズで、受けられる人数が決まっちゃいますから。

島田　悲しいといえば悲しいです。

鈴木　モチベーションも下がりますね。

～他学部科目の履修～

中澤　僕は、カリキュラムとかを見ていて、総文の授業すごい面白いと思うんで

すよ。でも経営学部だと、絶対に受講できないんですよ。僕が受けたいなと思った授業、全部履修不可で、全部総文の授業だから受けられないんだと思って。都市作りとかすごい面白いなと思ったんですけど。

長谷川　他学部の授業を受けるというのは基本的に難しいんですよね。

中澤　東京大学とかは、学部を途中で選ぶみたいなスタイルじゃないですか。入ってから、自分で経営行きたいとか。そういうのを多少なりともこっちでもできないのかな、というのはちょっと思いました。転学（部）も、試験とかもいろいろあってちょっと難しいって聞きました。

長谷川　転学（部）制度は一応ありますけど、なかなか難しいんじゃないですかね。それでは今日は、改めておめでとうございました。また機会があれば、今後ともいろいろなご意見を聞かせてください。今日はどうもありがとうございました。

表彰式および座談会に出席された受賞者のみなさんと全学 FD 委員教職員

○ FD Tip

FDEago企画の1つとして、2012年度に始まった「FD Tip」は、授業改善のアイデアを短いフレーズで表現して教員に伝え、記憶に残してもらうことを目的に実施された。

「FD Tip」は、FD推進委員会によって設定された教育改善に関するテーマに基づき、有志の教員及び学生によって制作された多数の作品の中から、FD推進委員会が選定したものである。月1 ～ 2回の頻度で各学部教授会の他、学内WEBサイトや学内掲示等を通して、教職員及び学生へ周知された。

2012年7月より始まった「FD Tip」全ての作品を以下に掲載する。

FD Tip	公開日
気が付いて機関銃のようなお話に弾受けて私も倒れてしまう	2012 年 7 月
眠くなるあちらこちらに飛ぶ話教室はいまジェットラグ中	2012 年 10月
教室の舞台の主役は学生です舞台監督はすこし控えめに	2012 年 11月
ドキドキの初めての講義ほっと息ついたよ教授が雑談はじめて	2012 年 12月
学生の発言にメモをとっている先生が何より学びの模範	2013 年 1 月
止まらない生徒の雑談ゆっくりと黙らせていく教授の情熱 （注）大学生は正確には「生徒」ではなく「学生」です	2013 年 2 月
学生がつまずくところ毎年の授業でそこだと知っているのに	2013 年 4 月
入るなり話し始めて脱線し脱線のまま授業が終わる 簡単な前の授業のおさらいと細やかなまとめが次へのやる気	2013 年 5 月
ポイントの絞り込まれたプリントで今日もノートをとる手はかどる プリントを読めば流れはわかるけどペンは置かせぬ先生の声	2013 年 6 月
先生の授業に対するその想い身ぶり手ぶりで伝わってくる 先生が自分の体験話す時間この授業でしか知れない知識	2013 年 7 月
膨らまんと意欲を燃やす新米にくべて下さい疑問符の薪 先生のたった一言それだけで間違いもすべて身になる授業	2013 年 9 月
映像で目から耳から刺激を受け楽しく学べる飽きない授業 授業では問われ応えて問いかけて先生に友に理解深める	2013 年 10 月
師と友と体験や思考重ねれば ここにしかない授業が生まれる わくわくをクラスのみんなで共有し一緒に伸びる考える力	2013 年 11 月
先生の公平な目に安心しいつもやる気がみなぎる授業	2013 年 12 月
あっこれは私の意見！と胸が鳴る繋がり感じる先生との授業 手を挙げる勇気はないがカード裏書いた意見はしっかり届く	2014 年 1 月

10. その他

○ FD letter・FDハンドブック

【実施経緯】

FD推進委員会では「教員が日々の授業をおこなうに当たって、改善のヒントとなるような情報を提供すること」を目的に2011年3月より13号に渡って「FD letter」というニューズレターを発行した。

2013年度にこの企画を継続するに当たり、全面的な見直しを行った結果、1年間のニューズレターの発行を通して、その改善が指摘されていた「授業改善のための学生アンケート」の結果活用に資するハンドブックの制作を行うことにした。

【実施概要】

ニューズレターの名称を「FDEago letter」と改め、2013年4月より月1 ～ 2回のペースで発行を行った。

計14号の「FDEago letter」の発行を通して作成された「授業改善のアイディア」の他、本学の教育環境や設備・サービス等を掲載したハンドブック「FDハンドブック」を制作し、専任教職員及び兼任教員に「授業改善のための学生アンケート」結果報告と同時期に配布した。

○ 科目ナンバリング

【実施経緯】

FD活動の一環として、学部等による教育課程体系の点検・見直しや、個々の教員の教育改善、学生の教育課程の理解促進等に資すると考えられる「科目ナンバリング」制度を、FD推進委員会及び全学FD委員会にて検討した。

【実施概要】

FD推進委員会にて実施案を作成し、全学FD委員会にて協議、2013年10月に実施案が承認された。その後、学部等にて検討が行われている。

11. 諸規則

○青山学院大学FD規則

（2009年3月26日理事会承認）

（趣旨）

第１条　この規則は、大学設置基準（昭和31年文部省令第28号）第25条の3に基づき、青山学院大学（以下「本学」という。）全体の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組みであるファカルティ・ディベロップメント活動（以下「FD活動」という。）について必要な事項を定めるものとする。

（組織）

第２条　本学のFD活動を適切に実施するため、次の委員会を置く。

(1)　全学FD委員会

(2)　FD推進委員会

2　全学FD委員会は、FD活動を円滑に運営するために必要な事項等を審議する。

3　FD推進委員会は、FD活動の企画、立案及び実施に必要な事項等を審議する。

4　全学FD委員会及びFD推進委員会について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項は、別に定める細則による。

（所管）

第３条　この規則は、学務部教務課が所管する。

（改廃手続）

第４条　この規則の改廃は、全学FD委員会、学部長会及び教授会の議を経たのち、常務委員会及び理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附　則

この規則は、2009年3月27日から施行する。

○青山学院大学全学FD委員会運営細則

（2009年3月16日学部長会承認）

（趣旨）

第１条　この細則は、青山学院大学FD規則第2条第4項の規定に基づき、全学FD委員会（以下「FD委員会」という。）について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項を定めるものとする。

（構成）

第２条　FD委員会は、次の委員をもって構成する。

(1)　青山学院大学FD推進委員会運営細則第2条第1項に規定するFD推進委員会委員

(2)　青山学院大学全学教務委員会規則（以下「全学教務委員会規則」という。）　第2条第1項に規定する全学教務委員会委員

(3)　全学教務委員会規則第9条に規定する全学教務委員会出席者

2　FD委員会が特に必要と認めるときは、委員以外の者に列席を求め、その意見を聴くことができる。

（委員長）

第３条　FD委員会に、委員長を置き、学務及び学生担当の副学長をこれに充てる。

2　委員長は、委員会を代表し、委員会の業務を統括する。

（副委員長）

第４条　FD委員会に、副委員長1名を置く。

2　副委員長は、委員長が委員の中から指名する。

3　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときには、委員長の職務を代行する。

4　副委員長の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

（招集、開催及び定足数）
第５条　FD委員会は、必要に応じて委員長が招集し、その議長となる。
２　FD委員会の定足数は、構成員の過半数とする。
（審議事項）
第６条　FD委員会は、次の事項を審議する。
（1）　FD活動全般に関する事項
（2）　FD推進委員会の審議結果に関する事項
（3）　その他FD活動を円滑に運営するために必要な事項
（審議結果）
第７条　委員長は、前条の審議結果を学長に報告するものとする。
（事務の所管）
第８条　FD委員会に関する事務は、学務部教務課が行う。
（改廃手続）
第９条　この細則の改廃は、FD委員会、学部長会及び教授会の議を経て、学長がこれを行う。

附　則
この細則は、2009年3月27日から施行する。

○青山学院大学FD推進委員会運営細則

（2008年10月6日学部長会承認）
改正 2009年3月2日 2012年2月27日

（趣旨）
第１条　この細則は、青山学院大学FD規則第2条第4項の規定に基づき、FD推進委員会（以下「委員会」という。）について、構成、審議事項等、その運営に必要な事項を定めるものとする。
（構成）
第２条　委員会は、次の委員をもって構成する。
（1）　副学長（学務及び学生担当）
（2）　専任教員の中から学長が指名する者　若干名
（3）　事務職員の中から学長が指名する者　若干名
２　前項第2号及び第3号に規定する委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
３　委員会が特に必要と認めるときは、委員以外の者に列席を求め、その意見を聴くことができる。
（委員長）
第３条　委員会に、委員長を置き、前条第1項第1号に規定する副学長をこれに充てる。
２　委員長は、委員会を代表し、委員会の業務を統括する。
（副委員長）
第４条　委員会に、副委員長1名を置く。
２　副委員長は、委員長が委員の中から指名する。
３　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときには、委員長の職務を代行する。
４　副委員長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
（招集、開催及び定足数）
第５条　委員会は、必要に応じて委員長が招集し、その議長となる。
２　委員会の定足数は、構成員の過半数とする。
（審議事項）
第６条　委員会は、次の事項を審議する。

(1)　FD活動の啓発に関する事項
(2)　FD活動の企画、立案及び実施に関する事項
(3)　学長の諮問する事項
(4)　その他FD活動全般に関する事項

（審議結果）

第７条　委員長は、前条の審議結果を学長に報告するものとする。

（学生FDスタッフ）

第８条　必要な場合には、委員会の下に学生FDスタッフ（以下「スタッフ」という。）を置くことができる。

2　スタッフは、委員会の委員の指示により、FD活動に係る業務に当たる。

3　スタッフは、学部又は大学院研究科に在籍する学生で、FD活動への参加を希望する者の中から、委員会が任命する。

（事務の所管）

第９条　委員会に関する事務は、学務部教務課が行う。

（改廃手続）

第10条　この細則の改廃は、委員会及び学部長会の議を経て、学長がこれを行う。

附　則

この細則は、2008年10月7日から施行する。

附　則（2009年3月2日）

この細則は、2009年3月27日から施行する。

附　則（2012年2月27日）

この細則は、2012年4月1日から施行する。

○青山学院大学FDに係るデータ取扱に関する要領

（2009年2月4日制定）

（趣旨）

第１条　この要領は、学校法人青山学院個人情報保護に関する規則に基づき、青山学院大学のファカルティ・ディベロップメント（授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な取り組み。以下「FD」という。）活動において必要なデータの収集、集計と取り扱いについて、必要な事項を定める。

（目的）

第２条　データについては、以下の目的に使用される。
(1)　FD活動における企画・立案に資する
(2)　FD活動の報告に資する

2　前項以外の目的で、FD推進委員会（以下委員会）委員長が必要と認めたもの。

（データの範囲）

第３条　本要領が予定するデータとは、以下に掲げる各別から個人を特定できる情報を除いた匿名化データをいう。
(1)　広報入試センターが業務上収集する入試及び広報関連データ
(2)　学生部が管理するデータ
(3)　教務課が管理するデータ
(4)　進路・就職センターが業務上収集する就職関連データ
(5)　委員会が実施する調査データ・アンケートデータ
(6)　その他委員会が必要とするデータ

（データの収集）
第４条　FD活動に関わる必要なデータは、委員長が各部署と協議の上、学長名に基づき収集を行う。
（データ管理責任者）
第５条　データ管理責任者は委員会委員長とし、データは、各部署より委員長宛に提出する。
（データ利用者と利用時の注意義務、集計場所及び目的外利用の禁止）
第６条　データは委員会で認められた集計目的にのみ用いられ、その集計は同委員会から委嘱された専任教員（以下データ利用者）が、委員長の任命を受けてこれを行う。
２　データ利用者は集計期間中、原データや中間生成ファイルの保管に遺漏なく努めなければならない。ネットワークを介した当該情報の漏洩や集計場所への第三者の立ち入り、保存メディアの管理に対し、データ利用者は細心の注意を払う義務を負う。
３　データの使用場所は、原則として本学内とするが、データに十分な匿名化処理が施されていて、かつ委員長が特に必要と認めた場合についてはこの限りでない。
（結果の公表と守秘義務）
第７条　データ利用者は、係る集計が終了した後、速やかに委員長に報告する。委員長は集計結果について、委員会の議を経たのち、必要に応じて公表することができる。結果の正規公表がなされない限り、データ利用者と及び委員会委員は、集計過程で知りえた情報を一切口外してはならない。
（データの利用期間と破棄）
第８条　委員会で認められた目的に係る集計が終了した後、データ利用者は、速やかに中間生成ファイルを含む全ての利用データを削除し、データ管理責任者は、データの破棄を確認するとともに、これを学長に報告しなければならない。
（事故等への対応）
第９条　前条及び前条以外の項目について、事故等が発生した場合は、「学校法人青山学院個人情報保護に関する規則」を準用するものとする。
（改廃手続）
第10条　この要領の改廃は、委員会が行う。

附　則
この要領は、2009年2月4日から施行する。

12. FD推進委員会及び全学FD委員会
委員一覧

1. FD推進委員会委員

氏名		所属等	備考
委員長	長谷川　信	副学長、経営学部経営学科	
副委員長	加藤　篤史	経営学部マーケティング学科	
委員	杉谷　祐美子	教育人間科学部教育学科	
委員	大山　和寿	法学部法学科	
委員	中邨　良樹	経営学部経営学科	
委員	中野　昌宏	総合文化政策学部総合文化政策学科	
委員	米山　淳	理工学部電気電子工学科	
委員	宮川　裕之	社会情報学部社会情報学科	
委員	鈴木　寛也	事務局長	
委員	上倉　功	学務部　部長	～2013年8月
委員	髙野　悦子	学務部　部長(2013年8月～)	
委員	戸田　隆也	学務部　教育支援課　課長	
委員	鳥海　貴裕	学務部　教育支援課	
委員	土居　美菜子	学務部　教育支援課	
委員	蓬田　豊子	相模原事務部　学務課　主任	

2. 全学教務委員会委員

所属等	氏名	備考
委員長、副学長(学務及び学生担当)	長谷川　信	
副委員長、副学長(将来構想及び第二部担当)	平澤　典男	
大学宗教部長	伊藤　悟	
青山スタンダード教育機構副機構長	堀内　正博	
文学部	佐野　弘子	
教育人間科学部	樋田　大二郎	
経済学部	矢吹　初	
法学部	申　惠丰	
経営学部	島田　淳二	
国際政治経済学部	内山　義英	
総合文化政策学部	中野　昌宏	
理工学部	谷口　健二	
社会情報学部	長橋　透	
学務部　部長	上倉　功	～2013年8月
学務部　部長(2013年8月～)	髙野　悦子	
相模原事務部　学務課　課長	立花　愼一	
政策・企画部　部長	白濱　哲郎	
学務部　教務課　課長	篠山　良子	

全学FD委員会は上記2委員会の委員をもって構成される。

2013年度
青山学院大学 FD 活動報告書

発　行　日　2014 年 10 月 1 日
発　　行　青山学院大学全学 FD 委員会
　　学務部教育支援課
　　〒150-8366　渋谷区渋谷 4-4-25　17号館2階 スチューデントセンター
　　TEL 03-3409-4165　　FAX 03-3409-9423
発行責任者　長谷川　信